

太宰治の世界Ⅱ
晩年の作品

はじめに

さて、今回の『太宰治の世界Ⅱ』（晩年の作品）というのは、前回の『太宰治の世界』（走れメロスと人間失格）に補足を加えるという形で主に「晩年の作品」を取り上げたものであり、例えば、最初の『恥』という作品は、戦時中の昭和十七年（一九四二年）に雑誌「婦人画報」（二月号）に発表されたものであり、その内容は、まだ若い二十三歳の女子大生は、或る私小説家の作品をほとんど読んでしまい、そして、その作品の中に描かれている、その作家の「……容貌、風采、生活の様子、身辺の事情、その他」などを、そのまますべて本当（事実）のことだと盲目的に「信じ込んで」しまい、その作家にその「思い込み」に添った内容の手紙を出したり、また、実際にその作家に逢ってみると、小説の中の彼とは、全然違っていて、作家は「大嘘つきである」というような内容である。

次に、『家庭の幸福』という作品であるが、この作品は、最晩年の太宰治が好んで使っていた言葉であり、その「意味内容」は、「家庭の幸福」（自分や家族の幸福だけをひたすら最優先で考える）というものであり、それでは、仕事や芸術その他などはすべて「中途半端」になってしまおうという考え方であり、太宰治という人は、自分は「家庭の幸福」よりは、むしろ「芸術」（仕事）の方を優先させるという「考え方」であり、それをもっと極限すれば、「家庭（家族）の幸福」をたとえ犠牲にしても、自分は「芸術」（仕事）のほうを選ぼうという考え方になるのである。

また、『桜桃』という作品は、太宰治の当時の「生活状況」に近い内容であり、それは、三人の子供（長女・長男・次女）がいたが、その二番目の「長男」は、いわば「発達障害」のような所があり、夫婦は表面的には明るくふる舞っていたが、夫は、ふと「無理心中」のようなことも考えてしまうという内容である。……

一方、『ヴィヨンの妻』という作品であるが、その「ヴィヨン」というのは、「……十五世紀のフランスの詩人フランソワ・ヴィヨン」という人のことであり、その人は、放蕩（無頼）詩人としてよく知られていたらしく、それが主人公の大谷（太宰）にも似ているというところで、いわば「放蕩（酒や女に溺れる遊び人）の夫を持った妻」という意味合いで、まさに『ヴィヨンの妻』という作品名になっていると共に、その作品の内容は、その放蕩（酒や女に溺れている）「夫」は、深夜、行きつけの小料理屋の店のお金（五千元）を盗み出して、家へと逃げ込んでくるが、その後を追って店の「夫婦」もやって来て、夫に金を返してくれと言うと、夫は、いきなりナイフを突きつけて外へと逃げてしまう。残された妻は、仕方なく、店の夫婦の話を聞くと、実は、最初の頃、夫は店の亭主に百円札を手に握らせた他は、この三年間、一銭のお金も払わずに、店のお酒を飲み尽くしていたという事であり、そこで妻は、お金は用立てて、明日にも店に持って行きますと言って、二人に帰ってもらい、翌日、その店に行き行って待っていると、夫がやって来て、盗んだお金は返すことになるが、残りの「借金」は、この店で私が働いて返しますという内容になっているかと思う。

次は、『グッド・バイ』という太宰「最後の作品」であり、主人公は、雑誌「オペリスク」の編集長、田島周二という人であり、彼は、三十四歳、独身ではなく、終戦になり、細君と女兒を、細君のその実家にあずけ、かれは単身、東京に乗り込み、郊外のアパートの一部屋を借り、抜け目なく四方八方を飛び歩いて、しこたま、もうけていたが、それか

ら三年経ち、世の中が、何か微妙に変わって来たせいか、または、彼のからだは、日頃の不節制のために最近めつきり痩せ細って来たせいか、いや、単に「とし」のせいか、酒もつまらぬ、小さい家を一軒買い、田舎から女房子供を呼び寄せ、もう、この辺で、ヤミ商売からは足を洗い、雑誌の編集に専念しよう。それについて、さし当っての問題は、まず、女たちと上手に別れなければならぬが、思いがそこに到ると、さすがに抜け目のない彼も、途方にくれて、溜息が出るのであったが、先輩の文士から、「……すごい美人を、どこからか一人見つけて来て、その人に事情を話し、自分の女房という形になってもらって、それを連れて、自分のその女たち一人一人を歴訪したらどうだという案」を聞いて、主人公（田島）という人は、それを実行することになるのである。

また、次の『駆込み訴え』という作品であるが、これは、有名な「……ユダはなぜイエスを裏切ったのかという大問題」を、太宰治という作家ならではの「頭の中」（或いは「心の中」）で想い描いた「ユダの心理状態」を巧みに描写している作品であり、特に有名な「最後の晚餐」の場面を『新約聖書』の中で見てみると、「……夕方になると、イエスは十二人の弟子をつれて席につかれた。彼らが食事をしているとき、言われた。『アーメン、わたしは言う、あなた達のうちの一人が、わたしを敵に売ろうとしている！』（この場面が、まさにダビンチの『最後の晚餐』であり）、これを聞くと弟子たちはすっかり悲しくなって、『主よ、わたしではないでしょう！』『わたしではないでしょう！』と、ひとりびとりイエスに言い始めた。イエスは答えられた。『わたしと一しよに同じ鉢から食べているもの、それがわたしを売る。人の子わたしは聖書に書いてあるとおりに死んでゆく。だが人の子を売るその人は、ああかわいそうだ！ 生まれなかった方がよっぽど幸せであった』。イエスを売るユダが口を出して、『先生、わたしではないでしょう』と言うと、彼（ユダ）に言われた。「いや、そうかも知れない」と……

やがて、深夜二時〜四時頃、ユダの裏切りで「イエスは捕縛される」ことになるが、大事なのは、次の『新約聖書』（第二十七章）の中の次の言葉であり、それは、「……夜が明けると、大祭司連、国の長老たち全最高法院は満場一致でイエスを死刑にする決議をした。それから彼を縛り、引いていつて総督ピラスに渡した」。一方、「……その時イエスを売ったユダは、イエスの判決がきまったのを見て後悔し、受け取ったシケル銀貨三十枚を大祭司連、長老たちに返して、『罪もない人の血を売って、悪いことをした』と言うと、彼らが応えて、『われわれの知ったことではない。お前が自分で始末しろ！』と言われ、ユダは銀貨を宮に投げ込んで去り、行って首をくくった」とある。そして、太宰治という人は、恐らく、この『新約聖書』のこの場面の「この記述」を読んで、まさに『駆込み訴え』という作品の着想を得たに違いないということである。

最後に、『東京八景』と『十五年間』という作品であるが、まず、最初の『東京八景』という作品は、太宰治という作家を知る上では極めて大事な作品であり、太宰治（二十一歳〜三十二歳）までの間、東京でどのように過ごし、そして、どのようなことが実際にあったのかを知る上では、非常に貴重な内容であり、この時期に関しては、私の書いた『人間失格』のこの時期の部分を丁寧に読んでもらえれば、より詳しくその内容を知ることができ得るかと思う。そして、昭和十六年（一九四一年）十二月八日には、いよいよ「太平洋戦争」（つまり「真珠湾攻撃」）が勃発するのである。太宰治、三十二歳の時である。そして、その後、戦時中、太宰治という人は、どのように過ごしたのかという事がより詳

しく記述されているのが、まさに次の『十五年間』という作品になるのである。

令和五年四月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

はじめに

太宰治の世界Ⅱ
晩年の作品

- 一、 恥
 - 二、 家庭の幸福
 - 三、 桜桃
 - 四、 ヴィヨンの妻
 - 五、 グッド・バイ
 - 六、 駈込み訴え
 - 七、 東京八景
 - 八、 十五年間
- ※ 参考文献

一、
恥

恥

序（冒頭部分）

菊子きくこさん。恥はじをかいちやったわよ。ひどい恥をかきました。顔から火が出る、などの形容はなまぬるい。草原をころげ廻って、わあっと叫びたい、と言っても未だ足りない。サムエル後書にありました。「……タマル、灰を其の首こうべに蒙り、着たる振袖ふりそでを裂き、手を首こうべにのせて、呼よばわりつつ去りゆけり」、可愛そうな妹タマル。わかい女は、恥ずかしくてどうにもならなくなった時には、本当に頭から灰でもかぶって泣いてみたい気持になるわねえ。タマルの気持がわかります。

菊子さん。やっぱり、あなたのおっしゃったとおりだったわ。小説家なんて、人の層くすよ。いいえ、鬼です。ひどいんです。私は、大恥かいちゃった。菊子さん。私は今まであなたに秘密にしていたけれど、小説家の戸田さんに、こっそり手紙を出していたのよ。そうしてとうとう一度お目にかかって大恥かいてしまいました。つまらない。

一、作者に手紙を出す

はじめから、ぜんぶお話ししましょう。九月のはじめ、私は戸田さんへ、こんな手紙を差し上げました。たいへん気取って書いたのです。

「……ごめん下さい。非常識と知りつつ、お手紙をしたためます。おそらく貴下の小説には、女の読者がひとりも無かった事と存じます。女は、広告のさかんな本ばかりを読むのです。女には、自分の好みがありません。人が読むから、私も読もうという虚栄きよゑみたいなもので読んでいるのです。物知り振っている人を、矢鱈やたらに尊敬りくついたします。つまらぬ理窟りくつを買いかぶります。貴下は、失礼ながら、理窟りくつをちっとも知らない。学問も無いようです。貴下の小説を私は、去年の夏から読みはじめて、ほとんど全部を読んできました。つもりでございませぬ。それで、貴下にお逢まいする迄までもなく、貴下の身辺の事情、容貌、風采ふうさい、ことごとくを存じて居ります。貴下に女の読者がひとりも無いのは、確定的の事だと思いたしました。貴下は御自分の貧寒の事や、吝嗇りんしやくの事や、さもしい夫婦喧嘩げんか、下品な御病気、それから容貌のずいぶん醜みにくい事や、身なりの汚い事、蝮たこの脚あしなんかを齧かじって焼酎しやうちゆうを飲んで、あばれて、地べたに寝る事、借金だらけ、その他たくさん不名誉な、きたならしい事ばかり、少しも飾らずに告白こくはなさいませぬ。あれでは、いけません。女は、本能として、清潔を尊たびます。貴下の小説を読んで、ちよつと貴下をお氣の毒とは思つても、頭かぶのてつぺんが禿はげて来たとか、齒はがぼろぼろに欠けて来たとか書いてあるのを読みますと、やっぱり、余りひどくて、苦笑してしまいます。ごめん下さい。軽蔑けいべつしたくなるのです。それに、貴下は、とても口で言えない不潔な場所の女のところへも出掛けて行くようではありませんか。あれでもう、決定的です。私でさえ、鼻をつまんで読んだ事があります。女おんなのひとは、ひとりのこらず、貴下を軽蔑けいべつし、擻ひんしやく蹙しやくするの当然です。私は、貴下の小説をお友だちに隠れて読んでいました。私が貴下のものを読んでいるという事が、もしお友達にわかったら、私は嘲笑ちやうしやくせられ、人格を疑われ、絶交けつぎょうされる事でしょう。どうか、貴下に於いても、ちよつと反省はんせいをして下さい。私は、貴下の無学あるいは文章の拙劣、あるいは人格の卑ひしき、

思慮の不足、頭の悪さ等、無数の欠点をみとめながらも、底に一すじの哀愁感のあるのを見つけたのです。私は、あの哀愁感を惜しみます。他の女の人には、わかりません。女のひとは、前にも申しましたように虚栄ばかりで読むのですから、やたらに上品ぶった避暑地の恋や、あるいは思想的な小説などを好みますが、私は、そればかりでなく、貴下の小説の底にある一種の哀愁感というものも尊いのだと信じました。どうか、貴下は、御自身の容貌の醜さや、過去の汚行や、または文章の悪さ等に絶望なさらず、貴下独特の哀愁感を大事になさって、同時に健康に留意し、哲学や語学をいまま少し勉強なさって、もつと思想を深めて下さい。貴下の哀愁感が、もし将来に於いて哲学的に整理できたならば、貴下の小説も今日の如く嘲笑せられず、貴下の人格も完成される事と存じます。その完成の日には、私も覆面をとって私の住所姓名を明らかにして、貴下とお逢いしたいと思いますが、ただ今は、はるかに声援をお送りするだけで止そうと思えます。お断りして置きますが、これはファン・レターではごさいませぬ。奥様などにお見せして、おれにも女のファンが出来たなんて下品にふざけ合うのは、やめていただきます。私はプライドを持っています」。

*

*

菊子さん。だいたい、こんな手紙を書いたのよ。貴下、貴下とお呼びするのは、何だか具合が悪かったけど「あなた」なんて呼ぶには、戸田さんと私とでは、としが違いすぎて、それに、なんだか親し過ぎて、いやだわ。戸田さんが年甲斐も無く自惚て、へんな氣を起したら困ると思つたの。「先生」とお呼びするほど尊敬もしてないし、それに戸田さんには何も学問がないんだから「先生」と呼ぶのは、とても不自然だと思つたの。だから貴下とお呼びする事にしたんだけど、「貴下」も、やつぱり少しへんね。でも私は、この手紙を投函しても、良心の呵責は無かつた。よい事をしたと思つた。お氣の毒な人に、わずかでも力をかしてあげるのは、氣持のよいものです。けれども私は此の手紙には、住所も名前も書かなかつた。だって、こわいもの。汚い身なりで酔って私のお家へ訪ねて来たら、ママは、どんなに驚くでしょう。お金を貸せ、なんて脅迫するかも知れない、とにかく癖の悪いおからだから、どんなこわい事をなさるかわからない。私は永遠に覆面の女性でいたかつた。けれども、菊子さん、だめだつた。とつても、ひどい事になりました。それから、ひとつき経たぬうちに、私は、もう一度戸田さんへ、どうしても手紙を書かなければならぬ事情が起りました。しかも今度は、住所も名前も、はつきり知らせて。

二、二度目の手紙を書く

菊子さん、私は可哀想な子だわ。その時の私の手紙の内容をお知らせすると、事情もだいたいおわかりの筈ですから、次に御紹介いたしますが、笑わないで下さい。

「……戸田様。私は、おどろきました。どうして私の正体を捜し出す事が出来たのでしょうか。そうですね、本当に、私の名前は和子です。そうして教授の娘で、二十三歳です。あざやかに素破抜かれてしまいました。今月の『文学世界』の新作を拝見して、私は呆然としてしまいました。本当に、本当に、小説家というものは油断のならぬものだと思います。どうして、お知りになったのでしょうか。しかも、私の氣持まで、すっかり見抜いて、『……みだらな空想をするようにさえなりました』などと辛辣な一矢を放っているあたり、たしかに貴下の驚異的な進歩だと思いました。私のあの覆面の手紙が、ただちに貴下の製

作慾をかき起したという事は、私にとつてもよろこばしい事でした。女性の一支持が、作家をかく迄も、いちじるしく奮起させるとは、思いも及ばなかった事でした。人の話に依りますと、ユーゴー、バルザックほどの大家でも、すべて女性の保護と慰藉のおかげで、数多い傑作をものしたのだそうです。私も貴下を、及ばずながらお助けする事に覚悟をきめました。どうか、しっかりやって下さい。時々お手紙を差し上げます。貴下の此の度の小説に於いて、わずかながら女性心理の解剖を行っているのはたしかに一進歩にて、ところどころ、あざやかであつて感心も致しましたが、まだまだ到らないところもあるのです。私は若い女性ですから、これからいろいろ女性の心を教えてあげます。貴下は、将来有望の士だと思えます。だんだん作品も、よくなって行くように思います。どうか、もつと御本を読んで哲學的教養も身につけるようにして下さい。教養が不足だと、どうしても大小説家にはなれません。お苦しい事が起つたら、遠慮なくお手紙を下さい。もう見破られましたから、覆面はやめましょう。私の住所と名前は表記のとおりです。偽名ではございませんから、御安心下さいませ。貴下が、他日、貴下の人格を完成なさつた暁には、かならずお逢いしたいと思います。それまでは、文通のみにて、かんにんして下さいませ。本当に、このたびは、おどろきました。ちゃんと私の名前まで、お知りになつて居るので、すもの。きつと、貴下は、あの私の手紙に興奮して大騒ぎしてお友達みんなに見せて、そうして手紙の消印などを手がかりに、新聞社のお友達あたりにたのんで、とうとう、私の名前を突きとめたというようなところだろうと思つていますが、違いますか？ 男のかたは、女からの手紙だと直ぐ大騒ぎをするんだから、いやだわ。どうして私の名前や、それから二十三歳だという事まで知つたか、手紙でお知らせ下さい。末永く文通いたしましょう。この次からは、もつと優しい手紙を差し上げましょうね。御自重下さい」。

*

*

菊子さん、私はいま此の手紙を書き写しながら何度も泣きべそをかきました。全身に油汗がにじみ出る感じ。お察し下さい。私、間違つていたのよ。私の事なんか書いてたんじゃなかったのよ。てんで問題にされていなかったのよ。ああ恥ずかしい、恥ずかしい。菊子さん、同情してね。おしまいまでお話するわ。

戸田さんが今月の『文学世界』に発表した『七草』という短篇小説、お読みになりましたか。二十三の娘が、あんまり恋を恐れ、恍惚を憎んで、とうとうお金持ちの六十の爺さんと結婚してしまつて、それでもやっぱり、いやになり、自殺するという筋の小説。すこし露骨で暗いけれど、戸田さんの持味は出ていました。私はその小説を読んで、びっくり私をモデルにして書いたのだと思ひ込んでしまったの。なぜだか、二、三行読んだとたんにそう思ひ込んで、さつと蒼ざめました。だって、その女の子の名前は私と同じ、和子じゃないの。としも同じ、二十三じゃないの。父が大学の先生をしているところまで、そつくりじゃないの。あとは私の身の上と、てんで違うけれど、でも、之は私の手紙からヒントを得て創作したのにちがいないと、なぜだかそう思ひ込んでしまったのよ。それが大恥のもとでした。

三、返事を頂き、訪問を決意する

四、五日して戸田さんから葉書をいただきましたが、それにはこう書かれて居りました。

「……拝復。お手紙をいただきました。御支持をありがたく存じます。また、この前のお手紙も、たしかに拝誦いたしました。私は今日まで人のお手紙を家の者に見せて笑うなどという失礼な事は一度も致しませんでした。また友達に見せて騒いだ事もございません。その点は、御放念下さい。なおまた、私の人格が完成してから逢つて下さるのださうですが、いったい人間は、自分で自分を完成できるものでしょうか。不一」

やっぱり小説家というものは、うまい事を言うものだと思います。一本やられたと、くやしく思いました。私は一日ぼんやりして、翌朝、急に戸田さんに逢いたくなつたのです。逢つてあげなければいけない。あの人は、いまきつとお苦しいのだ。私がいま逢つてあげなければ、あの人は墮落してしまうかも知れない。あの人は私の行くのを待っているのだ。お逢い致しましょう。私は早速、身仕度をはじめました。菊子さん、長屋の貧乏作家を訪問するのに、ぜいたくな身なりで行けると思つて？ とても出来ない。或る婦人団体の幹事さんたちが狐の襟巻をして、貧民窟の視察に行つて問題を起した事があつたでしょう？ 氣を付けなければいけません。小説に依ると戸田さんは、着る着物さえ無くて綿のみ出たドテラ一枚きりなのです。そうして家の畳は破れて、新聞紙を部屋一ぱいに敷き詰めてその上に坐つて居られるのです。そんなにお困りの家へ、私がこないだ新調したピンクのドレスなど着て行つたら、いたずらに戸田さんの御家族を淋しがらせ、恐縮させるばかりで失礼な事だと思つたのです。私は女学校時代のつぎはぎだらけのスカートに、それからやはり昔スキーの時に着た黄色いジャケツ。此のジャケツは、もうすっかり小さくなつて、両腕が肘ちかく迄によつきり出るので。袖口はほころびて、毛糸が垂れさがつて、まず申し分のない代物なのです。戸田さんは毎年、秋になると脚氣が起つて苦しむという事も小説で知つていましたので、私のベッドの毛布を一枚、風呂敷に包んで持つて行く事に致しました。毛布で脚をくるんで仕事をなさるよう忠告したかつたのです。私は、ママにかくれて裏口から、こっそり出ました。菊子さんもご存じでしょうが、私の前歯が一枚だけ義歯で取りはずし出来るので、私は電車の中でそれをそつと取りはずして、わざと醜い顔に作りました。戸田さんは、たしか歯がぼろぼろに欠けている筈ですから、戸田さんに恥をかかせないように、安心させるように、私も歯の悪いところを見せてあげるつもりだったので。髪もくしゃくしゃに乱して、ずいぶん醜いまま女になりました。弱い無智な貧乏人を慰めるには、たいへんこまかい心使いがなければいけないものです。（これは恐らく、「私小説」を書いてる作家という設定であり、それゆえ、小説の中に書かれている内容を、まだ若い主人公の女性は、そのまま作者自身に関する内容だと一途に思い込んでしまつているのであるが、しかし、例えば、太宰治が書く様々な「小説」にしても、当然のことながら、うそもほんとうも入り交じつた内容になつているのであり、それゆえ、そのまま盲目的に信じてしまうのは、やはり危険な事になるのだろう。）

四、作家の家を訪問し実際に逢う

戸田さんの家は郊外です。省線電車から降りて、交番で聞いて、わりに簡単に戸田さんの家を見つけました。菊子さん、戸田さんのお家は、長屋ではありませんでした。小さいけれども、清潔な感じの、ちゃんとした一戸構えの家でした。お庭も綺麗に手入れされて、秋の薔薇が咲きそろつていました。すべて意外の事ばかりでした。玄関をあけると、下駄

箱の上に菊の花を活けた水盤が置かれていました。落ちついて、とても上品な奥様が出て来られて、私にお辞儀を致しました。私は家を間違ったのではないかと思いました。

「……あの、小説を書いて居られる戸田さんは、こちらまでございますか」と、恐る恐るたずねてみました。「……はあ」と優しく答える奥様の笑顔は、私にはまぶしかったです。

「……先生は」と思わず先生という言葉が出ました。「……先生は、おいででしょうか」。私は先生の書齋にとおされました。まじめな顔の男が、きちんと机の前に坐っていました。ドテラでは、ありませんでした。なんとという布地か、私にはわかりませんけれど、濃い青色の厚い布地の袴あむせに、黒地に白い縞が一本はいつている角帯を締めました。書齋は、お茶室の感じがしました。床の間には、漢詩の軸。私には、一字も読めませんでした。竹の籠には、鶯つたが美しく活けられていました。机の傍そばには、とてもたくさんの本がうず高く積まれていました。

まるで違うのです。齒も欠けていません。頭も禿はげていません。きりつとした顔をしていました。不潔な感じは、どこにもありません。この人が焼酎を飲んで地べたに寝るのかと不思議でなりませんでした。「……小説の感じと、お逢いした感じとまるでちがいます」と、私は気を取り直して言いました。「……そうですね」と軽く答えました。あまり私に関心を持っていない様子です。「……どうして私の事をご存じになったのでしょうか。それを伺いにまいりましたの」と、私は、そんな事を言つて、体裁を取りつくろつてみました。

*

*

すると、先生は、「……なんですか?」と、ちつとも(期待するような)反応がありません。そこで、「……私が名前も住所もかくしていたのに、先生は、見破つたじやありませんか。先日お手紙を差し上げて、その事を第一におたずねした筈ですけど」と言うのと、「……僕はあなたの事なんか知っていませんよ。へんですね」と澄んだ目で私の顔を、まっすぐに見て薄く笑いました。(これは、先生は、彼女の手紙など全く読んでおらず、送られてきた葉書は、誰かが代筆したものだったということである。)

「……まあ!」と私は狼狽ろうばいしはじめました。「……だって、そんなら、私のあの手紙の意味が、まるでわからなかったでしょうに、それを、黙っているなんて、ひどいわ。私を馬鹿だと思ったでしょうね」と、私は泣きたくなりました。私は何というひどい独り、合点をしていたのでしよう。滅めつつ茶、滅めつ茶。菊子さん。顔から火が出る、なんて形容はなまぬるい。草原をころげ廻つて、わあっと叫びたい、と言つても未だ足りない。「……それでは、あの手紙を返して下さい。恥ちずかしくていけません。返して下さい」と言うのと、戸田さんは、まじめな顔をしてうなずきました。怒つたのかも知れませんが、ひどい奴だ、と呆あきれたのでしよう。「……捜してみましよう。毎日の手紙をいちいち保存して置くわけにもいきませんから、もう、なくなっているかも知れませんが、あとで、家の者に捜させてみます。もし、見つかったら、お送りしましょう。二通でしたか?」と言うのでした。

「……二通です」と、まじめな気持。「……何だか、僕の小説が、あなたの身の上に似ていたようですが、僕は小説には絶対にモデルを使いません。全部フィクションです。だいいち、あなたの最初のお手紙なんか」とふつと口を噤くんで、うつむきました。

「……失礼いたしました」と、私は齒の欠けた、見すばらしい乞食娘だ。小さすぎるジヤケツの袖口は、ほころびている。紺くろのスカートは、つぎはぎだらけだ。私は頭のとっぺんから足の爪先まで、軽蔑けいべつされている。小説家は悪魔だ! 嘘うそつきだ! 貧乏でもないの

に極貧の振りをしている。立派な顔をしている癖に、醜貌だなんて言って同情を集めている。うんと勉強している癖に、無学だなんて言つてとぼけている。奥様を愛している癖に、毎日、夫婦喧嘩だと吹聴している。くるしくもないのに、つらいような身振りをしてみせる。私は、だまされた。だまつてお辞儀して、立ち上り、「……御病気は、いかがですか、脚気だとか」と聞くと、「……僕は健康です」と言う。

*

*

私は此の人のために毛布を持って来たのだ。また、持って帰ろう。菊子さん、あまりの恥ずかしさに、私は毛布の包みを抱いて帰る途々、泣いたわよ。毛布の包みに顔を押しつけて泣いたわよ。自動車の運転手に、馬鹿野郎！ 気をつけて歩いて歩けて怒鳴られた。

五、二通の手紙が戻る

二、三日経つてから、私のあの二通の手紙が大きい封筒にいれられて書留郵便でとどけられました。私には、まだ、かすかに一縷の望みがあったのでした。もしかしたら、私の恥を救ってくれるような佳い言葉を、先生から書き送られて来るのではあるまいか。此の大きい封筒には、私の二通の手紙の他に、先生の優しい慰めの手紙もはいつているのではあるまいか。私は封筒を抱きしめて、それから祈つて、それから開封したのですが、からっぽ。私の二通の手紙の他には、何もはいつていませんでした。もしや、私の手紙のレターペーパーの裏にでも、いたずら書きのようにして、何か感想でもお書きになつていないかしらと、いちまい、いちまい、私は私の手紙のレターペーパーの裏も表も、ていねいに調べてみましたが、何も書いていなかった。この恥ずかしさ。おわかりでしょうか。頭から灰でもかぶりたい。私は十年も、としをとりました。小説家なんて、つまらない。人の屑だわ。嘘ばかり書いています。ちつともロマンチックではないんだもの。普通の家庭に落ち附いて、そうして薄汚い身なりの、前歯の欠けた娘を、冷く軽蔑して見送りもせず、永遠に他人の顔をして澄ましていようというんだから、すさまじいや。あんなの、インチキというんじゃないかしら。(完)

*

*

さて、この『恥』という作品は、若い女性の「心理描写」が非常に面白おかしく巧みに表現されている佳作の一つかと思うが、それでは、なぜそうなるのかと問えば、それは、若い時というのは、誰でもそうであるように、まだ「人生経験」も少なく「人間としての成熟度」も十分ではなく、それゆえ、若い人の「ものの見方、とらえ方、考え方、価値観、道徳観（倫理観）、人生観、その他」というものは、どうしても物事を総合的にとらえて判断するというよりは、多くの場合、その人なりの一面的な「ものの見方や考え方や或いは価値観その他」などになり易く、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）であれこれ考えでは、もうそうに違いないという「思い込み」（或いは「決めつけ」）などの極めて激しい時期でもあり、それゆえ、作品の主人公（若い女性）のような様々なことも非常に起こり易くなるということにもなるのでしよう。

*

*

二、家庭の幸福

家庭の幸福

一、官僚は悪いか？

「……官僚が悪い」という言葉は、いわゆる「清く明るくほがらかに」などという言葉と同様に、いかにも間が抜けて陳腐で、馬鹿らしくさえ感ぜられて、私には「官僚」という種属の正体はどんなものなのか、また、それが、どんな具合に悪いのか、どうも、色あざやかに実感せられなかったのである。問題外、関心なし、そんな気持ちに近かった。つまり、役人は威張る、それだけの事なのではなからうかとさえ思っていた。しかし、民衆だって、ずるくて汚くて欲が深くて、裏切って、ろくでもないのだから、いわばアイコとでも申すべきで、むしろ役人のほうは、その大半、幼にして学を好み、長ずるに及んで立志出郷、もつばら六法全書のくそ暗記に努め、質素儉約、友人にケチと言われども馬耳東風、祖先を敬するの念厚く、亡父の命日にはお墓の掃除などして、大学の卒業証書は金色の額縁にいられて母の寝間の壁に飾り、まことにこれ父母に孝、兄弟には友ならず、朋友は相信せず、お役所に勤めても、ただもうわが身分の大過なきを期し、ひとを憎まず愛さず、にこりともせず、ひたすら公平、紳士の亀鑑、立派、立派、すこしは威張ったって、かまわない、と私は世のいわゆるお役人に同情さえしていたのである。

二、一日寢床の中でラジオを聞く

しかるに先日、私は少しからだ具合が悪くして、一日一ぱい寢床の中でうつらうつらしながら、ラジオというものを聞いてみた。私はこれまで十何年間、ラジオの機械を自分の家に取りつけた事がない。ただ野暮ったくもったいぶり、何の芸も機智も勇氣もなく、凶々しく厚かましく、へんにガアガア騒々しいものとはばかり独断していたのである。空襲の時には私は、窓をひらいて首をつき出し、隣家のラジオの、一機はどうして一機はどうしたとかいう報告を聞きとって、まず大丈夫、と家の者に言って、用をすましていたものである。(ところで、ラジオ放送は、大正十四年に東京で始まり、三年後の昭和三年には全国放送が開始されている。そして、その昭和三年から二十年後の昭和二十三年に、この『家庭の幸福』という作品は中央公論に掲載されているのであり、それゆえ、ラジオはすでに珍しいものではなく、かなりの家庭に普及していたのではないかと思う。)

三、母親と娘で勝手にラジオを購入

いや、実は、あのラジオの機械というものは、少し高い。くれるというひとがあったら、それは、もらってもいいけれど、酒と煙草とおいしい副食物以外には、極端に儉約吝嗇の私にとって、受信機購入など、とんでもない大濫費だったのである。それなのに、昨年の秋、私がいよいよ不安と恐怖とたたかいながら、やっと家の玄関前までたどりつき、大きいため息を一つ吐いてから、ガラリと玄関の戸をあけて、「……ただいま！」と言うと、それこそ、清く明るくほがらかに、帰宅の報知をするつもりが、むざんや、いつも声がし

やがれる。「……やあ、お父さんが帰って来た」と七歳の長女。「……まあ、お父さん、いったいどこへ行っていらしたんです」と赤ん坊を抱いてその母も出て来る。

とつさに、うまいうそも思い浮ばず、「……あちこち、あちこち」と言い、「……皆、めしはすんだのか」などと、必死のごまかしの質問を発し、二重まわしを脱いで、部屋に一步踏み込むと、箆笥の上からラジオの声。「……買ったのかい？　これを」と、私には外泊の弱味がある。怒る事が出来なかった。「……これは、マサ子のよ」と七歳の長女は得意顔で、「……お母さんと一緒に吉祥寺へ行って、買って来たのよ」と言うので、「……それは、よかつたねえ」と父は子供には、あいそを言い、それから母に向って小声で、「……高かつたろう。いくらだった？」と聞くと、千いくらだったと母は答える。「……高い。いったいお前は、どこから、そんな大金を算段出来たの？」と聞くのであった。

四、父親はそのラジオを聞いてみた

父は酒と煙草とおいしい副食物のために、いつもお金に窮して、それこそ、あちこち、あちこちの出版社から、ひどい借金をしてしまつて、いきおい家庭は貧寒、母の財布には、せいぜい百円紙幣三、四枚、というのが、全くいつわりの無い実状なのである。「……お父さんの一晩のお酒代にも足りないのに、大金だなんて……」と言うと、母もさすがに呆れたのか、笑いながら陳弁するには、お父さんのお留守のあいだに雑誌社のかたが原稿料をとどけて下さつたので、この折と吉祥寺へ行って、思い切つて買ってしまいました、この受信機が一ばん安かつたのです、マサ子も可哀想ですよ、来年は学校ですから、ラジオでもつて、少し音楽の教育をしてやらなければなりません、また私だつて、夜おそくまであなたの御帰宅を待ちながら、つくろいものなんかしている時、ラジオでも聞いていると、どんなに気がまぎれて助かるかわかりませんわ。「……めしにしよう」と言うのみである。こんな経緯で、私の家にもラジオというものが、そなわつたけれども、私は相かわらず、あちこち、あちこちなので、しみじみ聴取した事は、ほとんどないのである。たまに私の作品が放送せられる時でも、私は、うっかり聞きのがす。つまり、一言にして言えば、私はラジオに期待していなかつたのである。

ところが先日、病気で寝ながら、ラジオのいわゆる「番組」の、はじめから終わりまで、ほとんど全部を聞いてみた。聞いてみると、これもやはりアメリカの人たちの指導のおかげか、戦前、戦時中のあの野暮つたさは幾分消えて、なんと、なかなかにぎやかなもので、突如として教会の鐘のごときものが鳴り出したり、琴の音が響いて来たり、また間断なく外国古典名曲のレコード、どうにもいろいろと工夫に富み、聴き手を飽かせまいという親切心から、幕間というものが一刻もなく、うっかり聞いているうちに昼になり、夜になり、一ページの読書も出来ないという仕掛けになつていたのである。そうして、夜の八時だから九時だけに、私は妙なものを聴取した。

五、街頭録音というものを聴いてみた

街頭録音というものである。所謂政府の役人と、いわゆる民衆とが街頭において互いに意見を述べ合うという趣向である。——いわゆる民衆たちは、ほとんど怒っているような

口調で、れいの官僚に食ってかかる。すると、官僚は、妙な笑い声を交えながら、実に幼稚な観念語（例えば、研究中、ごもつともながらそこを何とか、日本再建、官も民も力を合わせ、それはよく心がけているつもり、民主主義の世の中、まさかそんな極端な、ですから政府は皆さんの御助力を願って、云々）そんな事ばかり言っている。つまり、その官僚は、はじめから終わりまで一言も何も言っていないのと同じであった。いわゆる民衆たちは、いよいよ怒り、舌鋒するどく、その役人に迫る。役人は、ますますさかんに、れいのいやらしい笑いを発して、厚顔無恥の阿呆らしい一般概論をクソていねいに繰り返すばかり。民衆のひとりは、とうとう泣き声になって、役人につめ寄る。

六、それを聴いて、様々な思いに襲われる

寝床の中でそれを聞き、とうとう私も逆上した。もし私が、あの場に居合わせたなら、そうして司会者から意見を求められたなら、きつとこう叫ぶ。「……私は税金を、おさめないつもりでいます。私は借金で暮しているのです。私は酒も飲みます。煙草も吸います。いずれも高い税金がついて、そのために私の借金は多くなるばかりなのです。この上また、あちこち金を借りに歩いて、税金をおさめる力が私には、ありません。それに私は病弱だから、副食物や注射液や薬品のためにも借金をします。私はいま、非常に困難な仕事をしているのです。少くとも、あなたよりは、苦しい仕事をしているのです。自分でも、ほとんど発狂しているのではないかと思うほど、仕事のことばかり考えつめています。酒も煙草も、また、おいしい副食物も、いまの日本人にはぜいたくだ、やめろと言う事になったら、日本に一人もいい芸術家がいなくなります。それだけは私、断言できます。おどかしているではありません。あなたは、さつきから、政府だの、国家だの、さも一大事らしくもつたいぶつて言っています。私たちが自殺にみちびくような政府や国家は、さつきと消えたほうがいいんです。誰も惜しいと思やしません。困るのは、あなたたちだけでしょう。何せ、クビになるんだから。何十年かの勤続も水泡に帰するんだから。そうして、あなたの妻子が泣くんだから。ところが、こっちはもう、仕事のために、ずっと前から妻子を泣かせどおしなんだ。好きで泣かせているんじゃない。仕事のために、どうしても、そこまで手がまわらないのだ。それを、まあ、何だい。ニヤニヤしながら、そこを何とか御都合していただくんですなあ、だなんて、とんでもない。首をくくらせる気か。おい、見つともないぞ。そのニヤニヤ笑いは、やめろ！ あっちへ行け！ みつともない。私は社会党の右派でも左派でもなければ、共産党員でもない。芸術家というものだ。覚えて置き給え。不潔なごまかしが、何よりもきらいなんだ。どだい、あなたは、なめていやる。そんな当たりさわりのない、いいかげんな事を言って、いわゆる民衆をなだめ、納得させる事が出来ると思っているのか。たった一言でいい、君の立場の実情を言え！ 君の立場の実情を……」と、そのような、すこぶる泥くさい面罵の言葉が、とめどなく、いくらでも、つぎつぎと胸に浮かび、われながらあまり上品ではないと思いつつながら、憤怒の念がつのるばかりで、いよいよひとりで興奮し、おしまいは、とうとう涙が出て来た。

七、役人のへらへら笑いが気に入らない

所詮は、陰弁慶である。私は経済学には、まるで暗い。税の問題など、何もわからぬと言つてよい。その街頭録音の場に居合わせて、おそろおそろの質問を發し、たちまち役人に教えさとされ、「……さよか、すみません」という情ない結果になるかも知れない。けれども、私には、その役人のヘラヘラ笑いが氣にいらなかったのだ。ご自分の言う事に確信のない証拠だ。ごまかしている証拠だ。いい加減を言っている証拠だ。もしあの、ヘラヘラ笑いの答弁が、官僚の実体だとしたなら、官僚というものは、たしかに悪いものだ。あまりに、なめている。世の中を、なめ過ぎている。私はラジオを聞きながら、その役人の家に放火してやりたいくらいに極度の憎悪を感じたのである。「……おい！ ラジオを消してくれ」と言うのであった。

それ以上、その役人のヘラヘラ笑いを、聞くに忍びなかった。私は税金を、おさめない。あんな役人が、あんなヘラヘラ笑いをしているうちは、おさめない。牢へはいったつて、かまわない。あんなごまかしを言っているうちは、おさめない、と狂うくらいに逆上し、そうしてただもう口惜しくて、涙が出るのである。

けれども、やはり私は政治運動には興味がない。自分の性格がそれに向かないばかりか、それによつて自分が救われるとも思っていない。ただ、それにはうつつとうしいばかりだ。私の視線は、いつも人間の「家」のほうに向いている。

*

*

その夜、私は前の日に医者からもらつておいた鎮静剤を飲み、少し落ちついてから、いまの日本の政治や経済の事は考えず、もっぱら先刻のお役人の生活形態についてのみ思いをめぐらしていた。——あのいまのひとの、ヘラヘラ笑いは、しかし、いわゆる民衆を輕蔑している笑いではない。決してそんな性質のものではなかった。わが身と立場とを守る笑いだ。防禦の笑いだ。敵の鋭鋒を避ける笑いだ。つまり、ごまかしの笑いである。（例えば、国会の予算委員会の「一般質疑」などに於いても、攻め手は、当然、各野党の代表の人たちであり、一方、守り手は、総理をはじめ、それぞれの担当の大臣や役人たちであり、そして、何より恐れているのは国会が紛糾することであり、今日一日何事もなく無事に終われば、それに越した事はないのである。）

八、街頭討論からある空想が浮かぶ

そうして、私の寝ながらの空想は、次のような展開をはじめたのである。彼はあの街頭の討論を終えて、ほつとして汗をふき、それから急に不機嫌な顔になってあのひとの役所に引き揚げる。「……いかがでございました？」と下僚にたずねられ、彼は苦笑し、「……いや、もう、さんざんさ」と答える。討論の現場に居合せたもうひとりの下僚は、「……いえ、いえ、どうして、かいとう乱麻を断つ、というところでしたよ」とお世辞を言う。「……かいとうとは、怪しい刀と書くんだらう？」と彼はやはり苦笑しながら言つて、でも内心は、まんざらでない。「……冗談じゃない。どだい、あんな質問者とは、頭の構造がちがいますよ。何せ、こつちは千軍万馬の……」と、すこしお世辞が過ぎたのに気づいて下僚は素早く話題を転ずる。「……きょうの録音は、いつ放送になるんです？」と聞くこと、「……知らん」と言う。知っているのだけれども、知らんと言つたほうが人物が大きく鷹揚に見える。彼は、きょうの出来事はすべて忘れたような顔をして、のろのろと執

務をはじめ。「……とにかく、あの放送は、たのしみだなあ」と言うのであった。

下僚は、なおも小声でお世辞を言う。しかし、この下僚は、少しも楽しみだと思っていないし、実際その放送の夜には、カストリという奇妙な酒を、へんな屋台で飲み、ちよど街頭討論放送の時刻に、さかんにげえげえゲロを吐いている。楽しみも何もあつたものでない。たのしみにはしているのは、れのあの役人と、その家族である。

いよいよ今夜は、放送である。役人は、その日は、いつもより一時間ほど早く帰宅する。そうして街頭録音の放送の三十分くらい前から家族全部、緊張して受信機の傍に集る。「……いまに、この箱から、お父さんのお声が聞えて来ますよ」と、夫人は末の小さいお嬢さんをだっこして、そう教えている。中学一年の男の子は、正坐して、そうしてきちんと両手を膝ひざに置き、実に行儀よく放送の開始を待っている。この子は、容貌も端麗で、しかも学校がよく出来る。そうして、お父さんを心から尊敬している。

放送開始。――父は平然と煙草たばこを吸いはじめ。しかし、火がすぐ消える。父は、それに気がつかず、さらにもう一度吸い、そのまま指の間にはさみ、自分の答弁に耳を傾ける。自分が予想していた以上に、自分の答弁が快調に録音せられている。まず、これでよし。太過なし。官庁における評判もいだろう。成功である。しかも、これは日本国中に、いま、放送せられているのだ。彼は自分の家族の顔を順々に見る。皆、誇りと満足に輝いている。――家庭の幸福。家庭の平和。――

人生の最高の栄冠。皮肉でも何でもなく、まさしく、うるわしい風景ではあるが、ちょっと待て。私の空想の展開は、その時にわかにかに中断せられ、へんな考えが頭脳をかすめた。家庭の幸福。誰がそれを望まぬ人があるうか。私は、ふざけて言っているのではない。家庭の幸福は、或いは人生の最高の目標であり、栄冠であろう。最後の勝利かも知れない。しかし、それを得るために、彼は私を、口惜し泣きに泣かせた。

九、また新たな空想が浮かんで来た

私の寝ながらの空想は一転する。

ふいと、次のような短篇小説のテーマが、思い浮かんで来たのである。この小説には、もはや、あの役人は登場しない。もともとあの役人の身の上も、全く私の病中の空想の所産で、実際の見聞でないのはもちろんであるが、次の短篇小説の主人公もまた、私の幻想の中の人物に過ぎない。

……それは、全く幸福な、平和な家庭なんだ。主人公の名前を、かりに、津島修治つしましゅうじ、とでもして置こう。これは私の戸籍名なのであるが、下手に仮名かめいを用いて、うっかり偶然、実在の人の名に似ていたりして、そのひとに迷惑をかけるのも心苦しいから、そのような誤解の起らぬよう、私の戸籍名を提供するのである。

津島の勤め先は、どこだっていい。いわゆるお役所でありさえすればいい。戸籍名なんて言葉が、いま出たから、それにちなんで町役場の戸籍係りという事にしてもよい。何だっつかまわぬ。テーマは出来ているのだから、あとは津島の勤め先に応じて、筋書の肉付けを工夫して行けばよい。

津島修治は、東京都下の或る町の役場に勤めていた。戸籍係りである。年齢は、三十歳。いつも、にこにこしている。美男子ではないが血色もよく、いわば陽性の顔である。津島

さんと話をしておれば苦勞を忘れると、配給係りの老嬢が言った事があるそうだ。二十四歳で結婚し、長女は六歳、その次のは男の子で三歳。家族は、この二人の子供と妻と、それから、彼の老母と、彼と、五人である。そうして、とにかく、幸福な家庭なんだ。彼は、役所においては、これまで一つも間違いをし出かさず、模範的な戸籍係りであり、また、細君にとっては模範的な亭主であり、また、老母にとっては模範的な孝行息子であり、さらに、子供たちにとっても、模範的なパパであった。彼は、酒も煙草もやらない。我慢しているのではなく、ほしくないのだ。細君がそれを全部、闇屋に売って、老母や子供のよるこぶようなものを買う。ケチではないのだ。夫も妻も、家庭をたのしくするために、全力を尽しているのだ。もともと、この家族は、北多摩郡に本籍を有していたのであったが、亡父が中学校や女学校の校長として、あちこち転任になり、家族も共に歩いて歩いて、亡父が仙台の某中学校の校長になって三年目に病歿したので、津島は老母の里心を察し、亡父の遺産のほとんど全部を気前よく投じて、現在のこの武蔵野の一角に、八畳、六畳、四畳半、三畳の新築の文化住宅みたいなのを買ひ、自分は親戚の者の手引きで三鷹町の役場に勤める事になったのである。さいわい、戦災にもあわず、二人の子供は丸々と太り、老母と妻との折合いもよろしく、彼は日の出とともに起きて、井戸端で顔を洗い、その気分がすがすがしき、思わずパンパンと太陽に向って拍手を打って礼拝するのである。老母妻子の笑顔を思えば、買出しのお芋六貫も重くはなく、畑仕事、水くみ、薪割き、絵本の朗読、子供の馬、積木の相手、アンヨは上手、つつましくながらも家庭は常に春の如く、かなり広い庭は、ことごとく打ちたがやされて畑になってはいるが、この主人、ただの興覚めの実利主義者とかいうものとは事ちがい、畑のぐるりに四季の草花や木の花を品よく咲かせ、庭の隅の鶏舎の白色レグホンが、卵を産むたびに家中に歓声があがり、書きたてたらきりのないほど、つまり、幸福な家庭なんだ。つい、こないだも、同僚から押しつけられて仕方なく引き受けた「たからくじ」二枚のうち、一枚が千円の当りくじだったが、もともと落ちついた人なので、あわてず騒がず、家族の者たちにもまた同僚にも告げ知らせず、それから数日経って出勤の途中、銀行に立ち寄って現金を受け取り、家庭の幸福のためには、ケチでないどころか万金をも惜しまぬ気前のいいひとなのだから、彼の家のラジオ受信機が、ラジオ屋に見せても、「修繕の仕様がな」と宣告されたほどに破損して、この二、三年間ただ茶筍の上の飾り物になっていて、老母も妻も、この廢物に対して時折、愚痴を言っていたのを思い出して、銀行から出たすぐその足でラジオ屋に行き、躊躇するところなく気軽に受信機の新品を買ひ求め、わが家のところ番地を教えて、それをとどけるように依頼し、何事もなかったような顔をして役場に行き執務をはじめた。けれども、さすがに内心は、浮き浮きしていたのである。老母や妻のおどろき、よろこびもさる事ながら、長女も、もの心がついてから、はじめてわが家のラジオが歌いはじめるのを聞いてその興奮、お得意、また、坊やの目をぱちくりさせながらの不審顔、一家の大笑い、手にとるようにわかるのだ。そこへ自分が帰って行って、「たからくじ」の秘密をはじめて打ち明ける。また、大笑い。ああ、早く帰宅の時間が来ればよい。平和な家庭の光を浴びたい。きょうの一日は、ばかに永い。

しめた！ 帰宅の時間だ。ばたばたと机上の書類を片づける。その時、いきせき切って、ひどく見すばらしい身なりの女が出産届を持って彼の窓口に現われる。「……おねがいます」「……だめですよ。きょうはもう」と、津島は例の「苦勞を忘れさせるような」

にこにこ顔で答え、机の上をきれいに片づけ、空のお弁当箱を持って立ち上る。「……お願いします」、「……時計をこらん、時計を」と、津島は上機嫌で言って、その出産とどけを窓口の外に押し返す。「……おねがいします」、「……あしたになさい、ね、あしたに」と津島の語調は優しくなった。「……きょうでなければ、あたし、困るんです」と、津島は、もう、そこにいなかった。

……見すばらしい女の、出産にからむ悲劇。それには、さまざまの形態があるだろう。その女の、死なねばならなかったわけは、それは、私（太宰）にもはっきりわからないけれども、とにかく、その女は、その夜半に玉川上水に飛び込む。新聞の都下版の片隅に小さく出る。身元不明。津島には何の罪もない。帰宅すべき時間に、帰宅したのだ。どだい、津島は、あの女の事など覚えていない。そうして相変わらず、にこにこしながら家庭の幸福に全力を尽している。

十、結論として、

だいたいこんな筋書の短篇小説を、私は病中、眠られぬままに案出してみたのであるが、考えてみると、この主人公の津島修治は、何もことさらに役人でなくてもよさそうである。銀行員だって、医者だってよさそうである。けれども、私にこの小説を思いつかせたものは、かの役人のヘラヘラ笑いである。あのヘラヘラ笑いの拠つてきたる根源は何か。いわゆる「官僚の悪」の地軸は何か。いわゆる「官僚的」という気風の風洞は何か。私は、それをたどって行き、家庭のエゴイズム、とでもいふべき陰鬱な観念に突き当たり、そうして、とうとう、次のような、おそろしい結論を得たのである。

いわく、家庭の幸福は諸悪の本。(完)

*

*

さて、晩年の太宰治という人は、この「家庭の幸福」という言葉を好んで多用していましたが、それでは、それは一体どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなものである。

つまり、本文の最後にもあるように「家庭の幸福は諸悪の本」というのが、まさに「太宰治の考え方」であり、それは、「家庭の幸福」（自分や家族の幸せ）だけをひたすら最優先させていたら、すべてのことにおいて「中途半端」になってしまうということであり、例えば、「家庭」を取るか、「芸術」（仕事）を取るかという、まさに「究極の選択」になった時に、太宰治という人は、自分は「家庭の幸福」よりも、むしろ「芸術」（仕事）の方を優先させるという「考え方」であり、それをもっと極限すれば、「家庭（家族）の幸福」をたとえ犠牲にしても、自分は「芸術」（仕事）のほうを選ぶという考え方になるのである。また、実際、そのような「人生を生きただけでもあったのである。例えば、酒、煙草、女遊び、薬物乱用、反社会活動、自殺未遂、その他、それは、実家や彼の家族をはじめ、実に様々な人たちに迷惑をかけて生きて来た人であり、当時でさえ、その生活ぶりが批判の対象となり、それゆえ、第一回の「芥川賞」候補にもなりましたが、結局、次点に泣くということになるのである。しかし、一方、太宰治という人がはじめ一方で家庭第一という生き方だけをしていたら、恐らく、太宰治のような「作品」は生み出されなかったであろうことにはなるのだろう。そして、「芸術」のためなら、何をやっても許される、家庭を

犠牲にしてもいい、他人を踏みにじってもいい、女遊びは芸の肥やしだという、いわば「芸術第一主義」的な考え方がここに生じ易くなるのである。

この「問題」に関しては、自分の中なかではすでに結論が出ているのであるが、それは、次のようなものである。

一、芸術のためなら何でも許される

さて、仮に「芸術のためなら何でも許される」というような「考え方」があるとすれば、それは、極めて危険な「考え方」であり、——例えば、芥川龍之介の有名な『地獄変』という作品の中なかでも、もちろん、画家の意志ではなく、無理やりではあったが、画家は、自分の「実の娘」を犠牲（火だるま）にして、その迫真の「地獄絵」を描き上げる結果になるが、むろん、そのようなことは、まさに「狂気の沙汰」であり、決して許されるものではないのである。なぜなら、もし自分がその「犠牲者」の立場に立った時に、自分は喜んでその「犠牲者」になれるのか？ になれるはずがない。——つまり、「芸術」は、あくまでも「芸術」であって、「芸術」を何か「絶対視」（何ものにも勝る絶対価値）のように盲目的に考えることは、極めて危険な「考え方」になるのである。

二、自分は特別の人間、或いは、自分は選ばれた人間

例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、何であれ、何かに「特化した人」の中なかには、「……自分は特別の人間、或いは、自分は選ばれた人間だ」と思い込んでしまい、それゆえ、「……自分は何をやっても許される人間なのだ」という、実に愚かしい「考え方」に取り憑かれてしまう傾向は強く、例えば、「革命」のためには「……人殺し、破壊活動、強奪、強姦、その他」、何でも許されるのだと思いついてみたり、また、芸術や芸のためなら、その他、何のためであれ、人を踏みつけ犠牲にしてもよいのだという実に愚かしい「考え方」に取り憑かれやすいものだが、それらはすべて間違った「考え方」であり、その人の芸術や芸その他などがどれほど優れているようにも、人間としてはただの「クズ」になってしまうのである。——つまり、芸術家として優れていることと、人間として優れていることは、全く全然違うことであり、それぞれの分野での「特化」というのは、いわば「その道の器用」に過ぎず、例えば、政治や経済が得意、学問が得意、文学が得意、絵が得意、音楽が得意、芸能が得意、スポーツが得意、医療が得意、その他、その人がたとえ何が得意であったとしても、それだけを以て、人を平気で踏みつけ犠牲にしてもよいのだという「論理」というのは、実に愚かしい「考え方」であり、なぜなら、例えば、何々のためと言いながらも、実はその人の「欲望や感情」などを満たしているだけの、自分が可愛いだけの、その人の勝手な「エゴ」に過ぎないことが極めて多いからである。もちろん、その人の「才能」を高く評価するのはよいが、だからと言って、何をやっても許されるなどという「特権」などは何一つ許されてはいないのであり、何らかの「犯罪」を犯せば、当然のことながら、その「罪」は償なぐさわなければならぬということである。

例えば、なぜ、「人殺し」が悪いのかと問えば、それは、すべての「犯罪」がそうであ

るように、「……する側は、よくても、される側は、たまったものではない」からであり、これほど簡単な「論理」はなく、例えば、自分が（自分の家族が）無残に殺されていいはずはなく、それは、殺人、強盗、窃盗、詐欺、恐喝、暴行、傷害、放火、万引、強姦、その他、すべて同じことであり、「……する側は、よくても、される側は、たまったものではない」からであり、これほど簡単な「論理」はなく、すべては「される側」に立てば、すぐにもわかることである。ところが、犯罪（間違い）を犯すような人たちというのは、とかく「する側の論理」だけに固執して、いわゆる「される側」の立場に立つてものを考えるということが欠落しているのである。ここにこそ、犯罪（間違い）を犯す人たちの「身勝手さ」があるのである。つまり、「する側」、「される側」、その他、できるだけあらゆる視点からものを考えるということこそは、まさに「現実に即したものの考え方」になるということである。

三、一つのこと「特化する」とは……

例えば、仕事を初めとして、芸術、芸能、スポーツ、趣味、その他、何であれ、何か一つのこと「特化している」ような場合、その分野に関しては専門的な「知識や技術」などをしっかりと身に付けていながらも、その分野（専門）から離れてしまうと、ふつうの人（或いは「ふつうの人以下」）になつてしまふというのは、一体、どういうことなのだろうか？ それは、次のようなことである。——例えば、仕事でも、音楽でも、スポーツでも、その他、何であれ、（子供の頃から）、そのことを何年も徹底的に学習し続ければ、やがては、専門的な「知識や技術」などをしっかりと身に付けることになるだろうが、しかし、それは、人間として真に「内的成長（成熟）」することとは、全く全然違うことなのである。それでは、一体、何がどのように違うのかと言えば、それは、何か一つのこと「特化する」というのは、ある一つのことの専門的な「知識や技術」などの習得であり、それは、いわば「道の器用」であり、その「道の器用」というのは、その人の人間としての成熟度とは全く関係なく、本人の努力次第でいくらでも上達でき得るものなのである。

一方、人間として真に「内的成長（成熟）」することというのは、一つのこと「特化する」ことではなく、人間としての総合的な「内的成長（成熟）度」であり、それは、若い時からの極めて旺盛な「知的遍歴」などを経て、つまり、もの凄い「知識欲」（或いは「真善美欲」）などであるが、それこそは、まさに「神的な恋（エロス）」であり、それをプラトン風に言えば、遙か彼方にある「叡知界」（つまり「アイデア界」）の方へと想いを寄せ、最究極的には「美のアイデア」や「善のアイデア」などを観て取る地点にまで到達しようとする、そのようなもの凄い「知識欲」であり、そのような極めて旺盛な「知的遍歴」を経ることによってこそ、初めて、物事を極めて厳密に「認識（識別）」でき得るような真の「思考（思索）能力」というものが、しっかりと身につくことになるのである。

それは、つまり、その人の「生まれ育った環境（つまり家庭・学校教育・社会・民族・国家・その他）」などの影響を非常に強く受けて自ずと形成される、その人なりの「もの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などを、あらためて徹底的に「考え直して」みると、今まではそうだと思っていたことも、実はそうではなく、それでは、こうなのかと、次から次へと「考え方」を新たにしていこうちに、

今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解してしまい、もう何がなんだか自分でもよく分からないような世界に深く陥ってしまうわけであるが、それは、言葉を換えれば、まさに根底からの「自己改革」が起こっている状態であり、そのような「心の状態」から、やがて、真に「内的成長(成熟)」を遂げることによってこそ、初めて、「自らものを考え、自ら判断する自由を得る」ことにもなるわけである。

そして、人間として真に「内的成長(成熟)」することによって、初めて、人間として真に成熟した「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などができ得るようになるということである。それは、すなわち、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になる、ということであるとともに、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るようになるということである。それに加えて、今までの本能に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行するということである。それゆえ、人間として真に「内的成長(成熟)」することによってこそ、初めて、人間として真に成熟した、より客観的で、より普遍的な「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などができ得るようになるということである。

四、一般の人たちと知識人たちの違い

例えば、ソクラテスは、その『ソクラテスの弁明』のなかで、次のように語っている。つまり、「……名前のいちばんよく聞こえている人たちのほうが、思慮の点では、かえって、一般の人たちよりも欠けている」というようなことを言っている。それは、一体、どういうことなのかと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、一般の人たちというのは、現実という大地にしっかりと根を下ろして生活をしている。そして、その現実の実に様々な「生活知」や「経験知」などを基にして、物事を考え、判断し、行動しようとしている。それゆえ、彼らは、現実即した「考え方」をしているのである。——一方、各分野の様々な「知識人」たちというのは、その各分野の実に様々な「専門知」や「学問知」などを基にして、物事を考え、判断し、行動しようとしている。それゆえ、彼らは、実に様々な「知識」(つまり「専門知」や「学問知」など)に即した「考え方」をしているのである。それは、それぞれの「分野」のなかでは「極めて有効」であるとしても、それぞれの「分野」を離れて、現実の実に複雑で生々しい「様々な問題」などに直面した時に、彼らの「思慮」(その時々々の即座の「判断力」)の点では、つまり、いざという時には、かえって、現実即した「考え方」をしている一般の人たちの方が、遙かに優れた「思慮」(その時々々の現実即した即座の「判断力」)を持っているということである。

例えば、ある「一つの専門」に特化しているような人たちというのは、それぞれの「分野」のなかでは「極めて有効」であるとしても、ひとたび、それぞれの「分野」を離れると、それぞれの「分野」以外では、かえって世間知らずの、ふつうの人(或いは「ふつうの人以下」)になってしまいうということである。——一方、ソクラテスという人は、ある「一つの専門」に特化したような人(専門家)ではなかった。そうではなく、ソクラテスという人は、人間としての総合的な「内的成長(成熟)」を遂げていた人なのである。

五、まとめ

では、もう一度、再確認しておきたいと思うが、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、何であれ、何かに「特化した人」の中には、「……自分は特別の人間、或いは、自分は選ばれた人間だ」と思い込んでしまい、それゆえ、「……自分は何をやっても許される人間なのだ」という、実に愚かしい「考え方」に取り憑かれてしまう傾向は強く、例えば、「革命」のためには「……人殺し、破壊活動、強奪、強姦、その他」、何でも許されるのだと思いついてみたり、また、芸術や芸のためなら、その他、何のためであれ、人を踏みつけ犠牲にしてもよいのだという実に愚かしい「考え方」に取り憑かれやすいものだが、それらはすべて間違った「考え方」であり、その人の芸術や芸その他などがどれほど優れているようにも、人間としてはただの「クズ」になつてしまうのである。——つまり、それぞれの分野での「特化」というのは、いわば「その道の器用」に過ぎず、例えば、政治や経済が得意、学問が得意、文学が得意、絵が得意、音楽が得意、芸能が得意、スポーツが得意、医療が得意、その他、何であれ、もちろん、その人の「才能」を高く評価するのはよいが、だからと言って、何をやっても許されるなどという「特権」などは何一つ許されてはいないのであり、何らかの「犯罪」を犯せば、当然のことながら、その「罪」は償わなければならないということである。

例えば、その人がどのような「社会的地位や名誉或いは名声」などを得ていたとしても、その人が何か「大きな問題」などを起こせば、あつという間に地に墜ちてしまうようなものに過ぎないとともに、それらは、すべてその時々の「社会的な衣装」に過ぎず、それらの「社会的な衣装」がどれほど豪華な「社会的な衣装」であろうとも、それらを身に纏っているその人「自身」と、その豪華な「社会的な衣装」とは、もともと「別々のもの」であり、それゆえ、その豪華な「社会的な衣装」などをかきにして、何か「……自分は特別の人間、或いは、自分は選ばれた人間なのだ」と思い込んでしまい、それゆえ、「……自分は何をやっても許される人間なのだ」という、実に愚かしい「考え方」に取り憑かれてしまい、それを以つて、人を平気で踏みつけ犠牲にしているとすれば、たとえその人がどれほど優れた「才能」その他などを持ち合わせていても、人間としてはただの「クズ」になつてしまふとともに、そのような人間こそは、世間（一般）の目から見れば、まさに哀れな「裸の王様」に過ぎないということにもなるのである。

六、三つの充実について

それでは、ここで「三つの充実」ということについて、少し考えてみたいと思うが、それは、今日、われわれ人間にとつて、一体、どのように生きることが、最も「幸せ」な生き方であるかという問いに対して、誰もが心の底から納得できるようなものとして、ここでは、いわゆる「三つの充実」という考え方を、参考程度に書き留めてみたいと思う。

それは、何も難しいことはないので、いわゆる「仕事、生活、遊び」という、この「三つの充実」を心がけるとのことである。——つまり、一つは、「仕事」（社会的な活動）を充実させることである。その場合、もちろん、学生であれば、学校の「勉強」ということにな

るだろうし、また、専業主婦であれば、家事や育児或いは介護、その他を充実させるということである。そして、もちろん、社会人であれば、その人が従事している職業的な「仕事」を充実させるということである。次に、「生活」を充実させるというのは、主に「各人の家庭（家族）生活」を充実させるということであり、そして、もう一つは、「遊び」（趣味や娯楽やレジャーなど）を充実させるということになるかと思う。

それでは、その「三つの充実」について、もう少し詳しく考えてみたいと思うが、われわれ人間というのは、非常に「贅沢な存在」であって、それゆえ、ただ「一つの領域」が満たされただけでは、なかなか満足できにくいところがあり、最終的には、「仕事、生活、遊び」という、この「三つの充実」によってこそ、初めて、自分の「人生」に対して、心の底からの満足感が得られるようなところがあるということである。

例えば、学生の場合であれば、その人が、いくら学校の「勉強」が得意で、優秀な成績を上げていても、それだけでは、なかなか自分の人生に対して、心の底からの満足感は、得られにくいものであり、それに加えて、友だちなどと楽しく遊んだりすることが、必要不可欠であり、そういうことが満たされることによって、初めて心の底からの満足感が得られることになるかと思う。もちろん、その場合、家族との「家庭生活」が、うまくいっていないければ、当然のことながら、そのことが「悩みの種」となり、心の底からの満足感は、なかなか得られにくいものである。また、逆に、家庭生活や友だちとの遊びなどには、十分に満足していても、学校の「勉強」の方が思うようになければ、今度は、そのことが「悩みの種」となり、心の底からの満足感は、なかなか得られにくいものである。

同じように、社会人の場合にも、その人が従事している職業的な「仕事」だけが、いくら充実していても、それだけでは、なかなか「心の底」からの満足感は、得られにくいものがあり、それに加えて、同僚や友だち或いは異性との関係などが、うまくいって、楽しい時が得られているということが、必要であり、そのようなことが欠落していると、いくら「仕事」だけが充実していても、やはり「心の底」からの満足感は、なかなか得られにくいものである。また、その人の家族や夫婦関係その他に何か大きな悩みや採め事（わかし）があれば、そのことがどうしても、その人の精神的な「緊張（ストレス）」となつて、心の底からの満足感は、なかなか得られにくいものである。そのように、ただ「一つの領域」、或いは、「二つの領域」だけが充実していても、もう「一つの領域」が、思うように満たされないと、どうしても自分の人生に対して、心の底からの満足感は、なかなか得られにくいものである。それだけわれわれ人間というのは、まさに「贅沢な存在」ということになるのだろう。

*

*

例えば、この地球上のあらゆる生命体は、何よりも「生きよう」としている。それゆえ、われわれ人間も、当然のことながら、何よりも「生きよう」としている存在である。そして、われわれ人間が、この世で生きていくためには、どうしても必要最低限の「衣食住」というものが、どうしても必要不可欠になって来る。もちろん、遙か遠い大昔（むかし）であれば、例えば、狩猟や採集、また、農耕や牧畜などによって、いわゆる「自給自足」ということも、あるいは可能であったかも知れないが、今日のような「貨幣経済」においては、その必要最低限の「衣食住」というものを「確保・維持」するためにも、いわゆる「金銭的な収入」というものが、どうしても必要不可欠になって来るということである。

もちろん、その「金銭的な収入」を得るための方法としては、不法（不正）なものも含めれば、実にいろいろな方法があるかと思うが、その大きな主軸となっているものは、いわゆる「産業活動に従事する」（つまり「仕事に就く」ということであり、それには、第一次産業（農業、林業、漁業）、第二次産業（鉱業、建設業、製造業）、そして、第三次産業（卸売・小売業、金融・保険業、運輸・通信業、不動産業、電気・ガス・水道・熱供給業、サービス業）、また、公務などがあり、そのいずれかの産業活動か公務活動、その他に従事することによって、いわゆる「収入」を得るという方法である。

つまり、「仕事」というのは、何よりも「収入」を得るための「一つの手段」であり、そのための「労働」ということになるかと思う。もちろん、「収入」などいらぬというならば、それは、いわゆる「ボランティア活動」ということであり、その「労働目的」は、前者とは、はっきりと違ったものになるのである。また、もちろん、その人が「資産家」、その他であれば、何も「仕事」などしなくてもよいのかも知れないが、しかし、それ以外の圧倒的多数の人たちにとって、いわゆる「仕事」というのは、何よりも「収入」を得るための「一つの手段」であり、そのためにこそ、たとえつらく厳しい労働であつても、それにじつと耐え忍びながらも、その「労働に従事する」ということになるのである。

とは言え、もちろん、「仕事」というのは、何も「収入」を得るためだけのものではなく、それに加えて、いわゆる「社会的な活動」に従事するということであり、それは、社会の一員として、何らかの「社会的な活動」を行なうということでもあるわけである。

これは、極めて大事な認識であり、「仕事」というのは、いわゆる「趣味や遊び」などのような「個人的な活動」ではなく、まさに「社会的な活動」であり、それゆえ、「趣味や遊び」などであれば、その人が好きな時に好きなことを好きなように行なえば、それでよいものであり、しかも、その「活動や結果」などに対しても、特に「責任を負うということもない」わけである。ところが、「仕事」というのは、「趣味や遊び」などとははつきりと違って、与えられた業務を「誠実に遂行する」ということが、暗黙のうちに要求されているとともに、その「活動や結果」などに対しても、何らかの「責任を負わなければならない」ということであり、その「見返り」として、いわゆる「金銭的な報酬」（つまり収入）が得られるということがある。

一、仕事

それでは、どのような「仕事」に従事するのが、いちばんよいのかという問題が生じて来るかと思うが、それは、その人の「資質」に最も適した「仕事」に従事するというのが、まさに「最もよいこと」になるのだろう。もちろん、生きるためには、どのような「仕事」でも従事しなければならないものではあるが、できれば、その人の「資質」に最も適した「仕事」に従事するというのが、まさに「理想」であり、それは、言葉を換えれば、いわゆる「天職」を見つけ出すということにもなるのだろう。

それでは、その「天職」というのは、一体、どういうものかと問えば、それは、その人に最も適した「仕事」であり、それゆえ、その仕事に従事しているような時には、その人自身、まさに「最も充実した時」を過ごしているような状態であるということである。そして、そ

の人の「仕事の内容」とともに、その人の「人生」もより深まっていくようなものである。それゆえ、ただ単に「収入が多い」とか、「カッコいい」というようなことではなく、その人の「資質」に最も適したものであるので、その仕事に従事しているような時には、その人は、まさにその人自身になりきって活動している状態であり、それゆえ、まさに「確かな手応えや充実感」などを全身で感じている状態にもなるわけである。

つまり、その人にとって、確かな手応えが全身にしかと伝わって来るようなもの。その人が、時の経つのを忘れるほど、その活動に深く熱中できるようなもの。その人の心にも身体からだにも熱き「情熱おもい」が満ちあふれて来るようなもの。その人が、我を忘れて、その世界に深く「没頭・没入」できるようなもの。その人の「心の中」で大きな位置を占め、「心の主軸」にもなっているようなもの。その人の「夢やロマン」などを強くかき立て、また、深く充たしてくるようなもの。その人が、多くの時間を降り注いで全力で取り組んでも悔いがないようなもの。その人が、本来の「自分自身」になりきって思いっきり活動できるようなもの。その他、そのように、その人にとって、「……なるほど、これに従事（専念）しているような時こそは、自分は、最も自分らしく生き生きと躍動して生きている。そして、張りつめた空気と精神とのなかで、確かな手応えと充実感を深く味わい、感じている」。そのようなものこそは、まさにその人にとっての「天職」になるということである。(一、「生活」省略)

三、遊び

それでは、最後に、「遊び」（趣味や娯楽やレジャーなど）を充実させるということであるが、それは、もう言うまでもなく、その人が、まさに「好きな時に好きなことを好きなように思いっきり遊び楽しめば、それでよいこと」であり、それ以外のことは、すべて余計なことになるかと思う。が、敢えて、それに加えて、ただ単に飽くなき欲望を盲目的に「むさぼる」ということではなくて、むしろ、その「一つ一つ」をじっくりと「深く味わう」ということについて、少し話をしてみたいと思う。

それは、一体、どういうことかと言えば、例えば、テーブルの上に数多くの料理があるとして、それをできるだけ数多くの「品と量」とを口の中にどんどんかっこみ、そして、食べた食ったと満足しているような状態と、その「一品一品」をじっくりと深く「味ひ分け」ながら、その食事を心から楽しむのでは、やはり違ってくるだろう。——例えば、他人よりも少しでも数多くの「映画」を観ただけから、それだけ自分のほうが幸せだというような問題ではなく、その一つ一つの「映画」をほんとうに心の底から深く「味わえて」いるのかどうか。つまり、ただ単に表面的な「内容」（ストーリー）を楽しんでいるだけなのか。それとも、もつとその「映画」の本質的な部分まで深く厳密に見極めながら、「なるほど、ほんとうに素晴らしい！」と、心の底から深く「味わえて」いるのかどうか？ それは、文学、音楽、絵画、演劇などをはじめ、新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、漫画、アニメ、CD、DVD、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、ゲーム、また、将棋、囲碁、釣り、手芸、旅行（ドライブ）、あるいは様々なスポーツ、園芸、その他、何であれ、自ら行なう場合でも、或いは、他人が行なっているのを見聞きするような場合であれ、とにかく、この世にある実に様々な対象の、その一つ一つをできるだけ深く厳密に「見

分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味^{あじ}ひ分ける、感じ分ける」ようにすることによって、その対象の「本質的な部分」(或いは「根源的な部分」)などが見えて来るということであり、そして、その対象の「本質的な部分」(或いは「根源的な部分」)などと深く交わって、楽しむ。或いはまた、深く溶け合って、喜ぶ。それが、いわゆる「人生の深み」でもあり、そのようなことの「積み重ね」によってこそ、より深い「充実感や満足感」などが得られるようになるということである。

むろん、人によつては、何もできるだけ深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味^{あじ}ひ分ける、感じ分ける」などという面倒なことなどはせず、その人のまさに「見たまま、聞いたまま、嗅いだまま、味わったまま、感じたまま」に心から楽しめば、それでも十分ではないかと反論する人も非常に多いかと思う。確かに、そのように「気楽に楽しむ」ということも、非常に大事なことであり、あるいは、それでも十分なのかも知れない。しかし、例えば、野球などの中継を観ていても、その一つ一つのプレーの細かなところまで十分に理解できているのと、そういう細かなことは、何も分からずに、ただ単に「投げた、打った、走った、捕った、勝った、負けた」というように「表面的な現象」だけしか理解できていないのとでは、たとえ同じようにその試合を「心の底から楽しんだ」といっても、その「味わいの深さ」というものは、全く「全然違ったもの」になるだろう。そのように、この世にある実に様々な対象の、その一つ一つの対象を、どのくらい深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味^{あじ}ひ分ける、感じ分ける」ことができ得るかに応じて、その人の「人生」も、より深まっていくなことになるのである。

* * *

それでは、もう一度、なぜ、「三つの充実」というものがどうしても必要不可欠になるのかと問えば、それには、次のような非常にはつきりとした理由があるからである。つまり、——例えば、「仕事」(社会的な活動)などがどれほどうまくいっていても、それを以って、「生活」(主に各人の家庭《家族》生活)の「穴埋め」には「決してならない」ということである。それは、一体、どういうことかと問えば、それは、次のようなことであり、例えば、「仕事」(社会的な活動)の充実から得られる「喜び」と、「生活」(主に各人の家庭《家族》生活)の充実から得られる「喜び」と、そして、「遊び」(趣味や娯楽やレジャーなど)の充実から得られる「喜び」とは、その一つ一つは、全く全然「別の喜び」になるからである。——つまり、「仕事」(社会的な活動)から得られる「喜び」とその「志向」は、まさに「手応え」志向であり、それは、国内外の「社会的な活動」の中で獲得^{なか}される様々な社会的な「充実感や達成感」という喜びであり、また、「生活」(主に各人の家庭《家族》生活)から得られる「喜び」とその「志向」は、まさに「幸せ」志向であり、それは、家族(或いは自分)たちが楽しく充実して暮らせているという実感から生じて来る喜びであり、そして、「遊び」(趣味や娯楽やレジャーなど)の充実から得られる「喜び」とその「志向」は、まさに「楽しさ」志向であり、それは、各人の「趣味や娯楽やレジャー」などを通じて得られる心から「楽しい」という喜びであり、それゆえ、その一つ一つの「喜びと志向」は、全く全然「別の喜びと志向」になるのである。それゆえ、一方が一方の「穴埋め」には「決してならない」ということが、最も「大事な認識」であり、だからこそ、まさに「三つの充実」というものがどうしても必要不可欠になるといふ結論になるのである。

以上、われわれ人間にとって、一体、どういう人生であれば、より「幸せ」であるのかという問題については、いわゆる「三つの充実」(それは「仕事、生活、遊び」という、この「三つの充実」を心がけるようにすることによって、より深い「充実感や満足感」などが得られるようになるということである。

*

*

三、
櫻桃

われ、山にむかいて、目を挙ぐ。(詩篇、第二百二十一)

子供より親が大事、と思いたい。子供のために、などと古風な道学者みたいな事を殊勝らしく考えてみても、何、子供よりも、その親のほうが弱いのだ。少なくとも、私の家庭においては、そうである。まさか、自分が老人になつてから、子供に助けられ、世話になるうなどという図々しい虫のよい下心は、まったく持ち合わせてはいないけれども、この親は、その家庭において、常に子供たちのご機嫌ばかり伺っている。子供、といつても、私のところの子供たちは、皆まだひどく幼い。長女は七歳、長男は四歳、次女は一歳である。それでも、既にそれぞれ、両親を圧倒し掛けている。父と母は、さながら子供たちの下男下女の趣きを呈しているのである。

夏、家族全部三畳間に集まり、大にぎやか、大混乱の夕食をしたため、父はタオルでやたらに顔の汗を拭き、「……めし食って大汗かくもげびた事、と柳多留にあつたけれども、どうも、こんなに子供たちがうるさくては、いかにお上品なお父さんといえども、汗が流れる」と、ひとりぶつぶつ不平を言い出す。

母は、一歳の次女におっぱいを含ませながら、そうして、お父さんと長女と長男のお給仕をするやら、子供たちのこぼしたものを拭くやら、拾うやら、鼻をかんでやるやら、八面六臂のすさまじい働きをして、「……お父さんは、お鼻に一ばん汗をおかきになるようね。いつも、せわしくお鼻を拭いていらっしやる」と言うと、父は苦笑して、「……それじゃ、お前はどこだ。内股かね？」と言うので、「……お上品なお父さんですこと」と言う。「……いや、何もお前、医学的な話じゃないか。上品も下品もない」と言うと、「……私はね」と母は少しまじめな顔になり、「……この、お乳とお乳のあいだに、……涙の谷……」、涙の谷。父は黙して、食事をつづけた。

*

*

私は家庭にあつては、いつも冗談を言っている。それこそ「心には悩みわずらう」事が多いゆえに、「おもてには快樂」をよそわざるを得ない、とでも言おうか。いや、家庭にある時ばかりでなく、私は人に接する時でも、心がどんなにつらくても、からだがどんなに苦しんでも、ほとんど必死で、楽しい雰囲気を作る事に努力する。そうして、客とわかれた後、私は疲労によるめき、お金の事、道徳の事、自殺の事を考える。いや、それは人に接する場合だけではない。小説を書く時も、それと同じである。私は、悲しい時に、かえって軽い楽しい物語の創造に努力する。自分では、もつとも、おいしい奉仕のつもりでいるのだが、人はそれに気づかず、太宰という作家も、このごろは軽薄である、面白さだけで読者を釣る、すこぶる安易、と私をさげすむ。

人間が、人間に奉仕するというのは、悪い事であろうか。もつたいぶつて、なかなか笑わぬというのは、善い事であろうか。

つまり、私はくそまじめで興ざめな、気まずい事に堪え切れないのだ。私は、私の家庭においても、絶えず冗談を言い、薄氷を踏む思いで冗談を言い、一部の読者、批評家の想像を裏切り、私の部屋の畳は新しく、机上は整頓せられ、夫婦はいたわり、尊敬し合い、夫は妻を打った事などないのは無論、出て行け、出て行きます、などの乱暴な口争いした

事さえ一度もなかったし、父も母も負けずに子供を可愛がり、子供たちも父母に陽気によくなつく。

しかし、これは外見。母が胸をあげると、涙の谷、父の寝汗も、いよいよひどく、夫婦は互いに相手の苦痛を知っているのだが、それに、さわらないように努めて、父が冗談を言えば、母も笑う。しかし、その時、涙の谷、と母に言われて父は黙し、何か冗談を言つて切りかえそうと思つても、とっさにうまい言葉が浮かばず、黙しつづけると、いよいよ気まずさが積り、さすがの「通人」の父も、とうとう、まじめな顔になってしまつて、「…誰か、人を雇いなさい。どうしたつて、そうしなければ、いけない」と、母の機嫌を損じないように、おつかなびつくり、ひとりごつたように呟く。

子供が三人。父は家事には全然、無能である。蒲団さえ自分で上げない。そうして、ただもう馬鹿げた冗談ばかり言っている。配給だの、登録だの、そんな事は何も知らない。全然、宿屋住いでもしているような形。来客。饗応。仕事部屋にお弁当を持って出かけて、それつきり一週間も御帰宅にならない事もある。仕事、仕事、いつも騒いでいるけれども、一日に二、三枚くらいしかお出来にならないようである。あとは、酒。飲みすぎると、げっそり痩せてしまつて寝込む。そのうえ、あちこちに若い女の友達などもある様子だ。

子供、…七歳の長女も、ことしの春に生れた次女も、少し風邪をひきやすければ、まづまあ人並み。しかし、四歳の長男は、やせこけていて、まだ立てない。言葉は、アアとかダアとか言うきりで一語も話せず、また人の言葉を聞きわける事も出来ない。はつて歩いていて、ウンコもオシッコも教えない。それでいて、ごはんは実にたくさん食べる。けれども、いつも痩せて小さく、髪の毛も薄く、少しも成長しない。

父も母も、この長男について、深く話し合うことを避ける。白痴、唾、…それを一言でも口に出して言つて、二人で肯定し合うのは、あまりに悲惨だからである。母は時々、この子を固く抱きしめる。父はしばしば発作的に、この子を抱いて川に飛び込み死んでしまいたく思う。

「…：唾の次男を斬殺す。×日正午すぎ×区×町×番地×商、何某(五三)さんは自宅六畳間で次男何某(一八)君の頭を薪割りで一撃して殺害、自分はハサミで喉を突いたが死に切れず附近の医院に収容したが危篤、同家では最近二女某(二二)さんに養子を迎えたが、次男が唾の上に少し頭が悪いので娘可愛さから思い余つたもの」。

こんな新聞の記事もまた、私にヤケ酒を飲ませるのである。

ああ、ただ単に、発育がおくれているというだけの事であつてくれたら！ この長男が、いまに急に成長し、父母の心配を憤り嘲笑するようになってくれたら！ 夫婦は親戚にも友人にも誰にも告げず、ひそかに心でそれを念じながら、表面は何も気にしていないみたいに、長男をからかつて笑っている。

母も精一ぱいの努力で生きているのだろうが、父もまた、一生懸命であつた。もともと、あまりたくさん書ける小説家では無いのである。極端な小心者なのである。それが公衆の面前に引き出され、へどもどしながら書いているのである。書くのがつらくて、ヤケ酒に救いを求める。ヤケ酒というのは、自分の思っていることを主張できない、もどっかしさ、いまいまして飲む酒の事である。いつでも、自分の思っていることをハッキリ主張できるひとは、ヤケ酒なんか飲まない。(女に酒飲みの少いのは、この理由からである)

私は議論をして、勝つたためしがない。必ず負けるのである。相手の確信の強さ、自己肯定のすさまじさに圧倒せられるのである。そうして私は沈黙する。しかし、だんだん考えてみると、相手の身勝手に気がつき、ただこっちはばかりが悪いのではないのが確信せられて来るのだが、いちど言い負けたくせに、またしつこく戦闘開始するのも陰惨だし、それに私には言い争いは殴り合いと同じくらいいつまでも不快な憎しみとして残るので、怒りにふるえながらも笑い、沈黙し、それから、いろいろさまさま考え、ついヤケ酒という事になるのである。

はつきり言おう。くどくどと、あちこち持ってまわった書き方をしたが、実はこの小説、夫婦げんかの小説なのである。「涙の谷」——それが導火線であった。この夫婦は既に述べたとおり、手荒なことはもちろん、口ぎたなくのしり合った事さえないすこぶるおとなしい一組ではあるが、しかし、それだけまた一触即発の危険にのいているところもあった。両方が無言で、相手の悪さの証拠固めをしているような危険、一枚の札をちらと見ては伏せ、また一枚ちらと見ては伏せ、いつか、出し抜けに、さあ出来ましたと札をそろえて眼前にひろげられるような危険、それが夫婦を互いに遠慮深くさせていたと言つて言えないところがないでもなかった。妻のほうはとにかく、夫のほうは、たたけばたたくほど、いくらでもホコリの出そうな男なのである。

「涙の谷」、そう言われて、夫は、ひがんだ。しかし、言い争いは好まない。沈黙した。お前はおれに、いくぶんあてつける気持ちで、そう言ったのだろうが、しかし、泣いているのはお前だけでない。おれだって、お前に負けず、子供の事は考えている。自分の家庭は大事だと思っている。子供が夜中に、へんな咳一つしても、きつと目がさめて、たまらない気持ちになる。もう少し、ましな家に引越して、お前や子供たちをよるこぼせてあげたくてならぬが、しかし、おれには、どうしてもそこまで手が回らないのだ。これでもう、精一ぱいなのだ。おれだって、凶暴な魔物ではない。妻子を見殺しにして平然、というような「度胸」を持つてはいないのだ。配給や登録の事だって、知らないのではない、知るひまがないのだ。……父は、そう心の中でつぶやき、しかし、それを言い出す自信もなく、また、言い出して母から何か切りかえされたら、ぐうの音も出ないような気もして、「誰か、ひとを雇いなさい」と、ひとりごとみたいに、わずかに主張してみた次第なのだ。

母も、いったい、無口なほうである。しかし、言うことに、いつも、つめたい自信を持っていた。(この母に限らず、どこの女も、たいていそんなものであるが)、「……でも、なかなか、来てくれるひとありませんから」と言うので、「……捜せば、きつと見つかりますよ。来てくれるひとがないんじゃない、いてくれるひとがないんじゃないかな?」と言うと、「……私が、ひとを使うのが下手だとおっしゃるのですか?」と言うので、「……そんな」と、父はまた黙した。じつは、そう思っていたのだ。しかし、黙した。

ああ、誰かひとり、雇ってくれたらいい。母が末の子を背負って、用足しに外に出かけると、父はあとの二人の子の世話を見なければならぬ。そうして、来客が毎日、きまつて十人くらいずつある。「……仕事部屋のほうへ、出かけたんだけど」と言うので、「……これからですか?」と言うので、「……そう。どうしても、今夜のうちに書き上げなければならぬ仕事があるんだ」と、それは、うそでなかった。しかし、家の中の憂鬱から、のがれたい気もあったのである。「……今夜は、私、妹のところへ行って来たいと思つているのですけど」と言う。それも、私は知っていた。妹は重態なのだ。しかし、女房が見

舞いに行けば、私は子供のお守りをしていなければならぬ。

「……だから、ひとを雇って」と言いかけて、私は、よした。女房の身内のひとの事に少しでも、ふれると、ひどく二人の気持がややこしくなる。——生きるという事は、たいへんな事だ。あちこちから鎖がからまつていて、少しでも動くと、血が噴き出す。

私は黙って立って、六畳間の机の引き出しから稿料のはいつている封筒を取り出し、袂につつ込んで、それから原稿用紙と辞典を黒い風呂敷に包み、物体でないみたいに、ふわりと外に出る。もう、仕事どころではない。自殺の事ばかり考えている。そうして、酒を飲む場所へまっすぐに行く。「……いらつしやい」、「……飲もう。きようはまた、ばかにきれいな縞を……」、「……わるくないでしょう？ あなたの好く縞だと思っていたの」と言う。「……きようは、夫婦げんかだね、陰にこもってやりきれねえんだ。飲もう。今夜は泊るぜ。だんぜん泊る」と言うのであった。

子供より親が大事、と思いたい。子供よりも、その親のほうが弱いのだ。

桜桃が出た。私の家では、子供たちには、ぜいたくなものを食べさせない。子供たちは、桜桃など、見た事もないかもしれない。食べさせたら、よろこぶだろう。父が持つて帰ったら、よろこぶだろう。蔓を糸でつないで、首にかけると、桜桃は、珊瑚の首飾りのように見えるだろう。

しかし、父は、大皿に盛られた桜桃を、極めてまずそうに食べては種を吐き、食べては種を吐き、食べては種を吐き、そうして心の中で虚勢みたいに呟く言葉は、子供よりも親が大事。(完)

さて、この作品は、晩年の太宰治の「家庭状況」に近い内容になっているかと思うが、その中でも、最も大事なところは、次のような内容のところである。

つまり、子供が三人。父は家事には全然、無能である。蒲団さえ自分で上げない。そうして、ただもう馬鹿げた冗談ばかり言っている。配給だの、登録だの、そんな事は何も知らない。全然、宿屋住いでもしているような形。来客。饗応。仕事部屋にお弁当を持つて出かけて、それつきり一週間も御帰宅にならない事もある。仕事、仕事、いつも騒いでいるけれども、一日に二、三枚くらいしかお出来にならないようである。あとは、酒。飲みすぎると、げっそり痩せてしまつて寝込む。そのうえ、あちこちに若い女の友達などもある様子だ。

子供、……七歳の長女も、ことしの春に生れた次女も、少し風邪をひきやすいけれども、まずまあ人並み。しかし、四歳の長男は、やせこけていて、まだ立てない。言葉は、アアとかダアとか言うきりで一語も話せず、また人の言葉を聞きわける事も出来ない。はつて歩いていて、ウンコもオシッコも教えない。それでいて、ごはんは実にたくさん食べる。けれども、いつも痩せて小さく、髪の毛も薄く、少しも成長しない。

父も母も、この長男について、深く話し合うことを避ける。白痴、嘔、……それを一言でも口に出して言つて、二人で肯定し合うのは、あまりに悲惨だからである。母は時々、この子を固く抱きしめる。父はしばしば発作的に、この子を抱いて川に飛び込み死んでしまいたく思う。

「……嘔の次男を斬殺す。×日正午すぎ×区×町×番地×商、何某(五三)さんは自宅

六畳間で次男何某（一八）君の頭を薪割りで一撃して殺害、自分はハサミで喉を突いたが死に切れず附近の医院に収容したが危篤、同家では最近二女某（二二）さんに養子を迎えたが、次男が唾の上に少し頭が悪いので娘可愛さから思い余ったもの」。

こんな新聞の記事もまた、私にヤケ酒を飲ませるのである。
ああ、ただ単に、発育がおくれているというだけの事であってくれたら！ この長男が、いまに急に成長し、父母の心配を憤り嘲笑するようになってくれたら！ 夫婦は親戚にも友人にも誰にも告げず、ひそかに心でそれを念じながら、表面は何も気にしていないみたい、長男をからかって笑っている。

さて、なぜこれが大事な内容かと言えば、それは、太宰治は、なぜ「一家無理心中」を選ばず、富栄との玉川上水への「無理心中」を選んだかという問題にも直結するからである。このことについては、私の『人間失格』の中で詳しく解説していますが、それは、次のようなものである。

例えば、太宰治の「妻宛の遺書」として公表されている「三つの抜粋」があり、一つは、「美知様、誰よりもお前を愛していました」と、毛筆で書いた自筆の手紙がある。そして、多くの専門家たちは、この「手紙の内容」は、いわば「形式的なもの」に過ぎないと解釈している場合が多いかと思うが、しかし、それは、そうではなく、むしろ「心の底からの思い」と解釈する方が、遙かに正しいのである。それは、一体、なぜなのか？ それは、太宰治は、妻と子供とを巻き込んだ「無理心中」を避けているからである。それは、妻への「愛情のなさ」ではなく、むしろ、それは「妻や子供」への愛情の深さであり、自分の「道連れ」には出来ない。「……自分という馬鹿者が、この二人のあいだにはいつて、いまに二人を滅茶苦茶にするのだ、つましい幸福。いい親子。幸福を、ああ、もし神様が、自分のような者の祈りでも聞いてくれるなら、いちどだけ、生涯にいちどだけでいい、祈る」という心境であり、だからこそ、だんだんと家へは疎遠になっていくのである。

つまり、太宰治には、最晩年、三人の「女性」がいた。一人は、「妻」（津島美知子）であり、一人は、「愛人」（太田静子）であり、そして、もう一人は、「愛人」（山崎富栄）である。そして、まず、「妻」（津島美知子）とは「心中」は出来ない。なぜなら、子供がいるからである。当然、三人の子供まで道連れには出来ない。次は、「愛人」（太田静子）であるが、彼女は、『斜陽』という作品のなかで、「……私には、はじめからあなたの人格とか責任とかをあてにする気持はありませんでした。私のひとすじの恋の冒険の成就だけが問題でした。（中略）、こいしいひとの子を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成なのでございます。あなたが私をお忘れになっても、また、あなたが、お酒でいのちをお無くしになっても、私は私の革命の完成のために、丈夫で生きて行けそうです」とある。これでは、太宰治がたとえ彼女に「心中」を持ちかけても、一緒に死んでくれるわけがない。そこで、太宰治は、意識的にしろ、或いは、無意識的にしろ、「第三の女性」を見つけ出さなければならなかった。そして、その「第三の女性」こそは、まさに「山崎富栄」に他ならないということである。

*

*

四、ヴィヨンの妻

ヴィヨンの妻

一、夫の深夜の帰宅と店の夫婦の来客

あわただしく、玄関をあける音が聞えて、私はその音で、眼をさしましたが、それは泥酔の夫の、深夜の帰宅にきまっているのでございますから、そのまま黙って寝ていました。

夫は、隣りの部屋へやに電気をつけ、はあつはあつ、とすさまじく荒い呼吸をしながら、机の引き出しや本箱の引き出しをあけてかきまわし、何やら捜している様子でしたが、やがて、どたりと畳に腰をおろしてすわったような物音が聞こえまして、あとはただ、はあつはあつという荒い呼吸ばかりで、何をしている事やら、私が寝たまま、「……おかえりなさいまし。ごはんは、おすみですか？ お戸棚に、おむすびがございますけど」と申しますと、「……や、ありがとうございます」といつになく優しい返事をいたしまして、「……坊やはどうです。熱は、まだありますか？」とたずねます。

これも珍らしい事でございます。坊やは、来年は四つになるのですが、栄養不足のせいか、または夫の酒毒のせい、か、病毒のせい、か、よその二つの子供よりも小さいくらいで、歩く足もとさえおぼつかなく、言葉もウマウマとか、イヤイヤとかを言えるくらいが関の山で、脳が悪いのではないかとも思われ、私はこの子を銭湯に連れて行きはだかにして抱き上げて、あんまり小さく醜くやせているので、凄さましくなつて、おおぜいの人の前で泣いてしまった事さえございました。そうしてこの子は、しょっちゅう、おなかをこわしたり、熱を出したり、夫はほとんど家に落ちついていいる事はなく、子供の事など何と思つていいるのやら、坊やが熱を出しまして、と私が言つても、あ、そう、お医者に連れて行つたらいいでしょう、と言つて、いそがしげに二重回しを羽織つてどこかへ出掛けてしまいます。お医者に連れて行きたくつても、お金も何もないのですから、私は坊やに添そい寝して、坊やの頭を黙もつてなでてやつているより他はないのでございます。

けれどもその夜はどういうわけか、いやに優しく、坊やの熱はどうだ、など珍らしくたずねてくださつて、私はうれしいよりも、何だかおそろしい予感で、脊筋が寒くなりました。何とも返辞の仕様がなく黙もつていますと、それから、しばらくは、ただ、夫のはげしい呼吸ばかり聞えていましたが、「……ごめん下さい」と、女のほそい声こゑが玄関でいたします。私は、総身に冷水を浴びせられたように、ぞつとしました。「……ごめん下さい。大谷さん」と、こんどは、ちよつと鋭い語調でした。同時に、玄関のあく音がして、「……大谷さん！ いらつしやるんでしょう？」と、はつきり怒っている声で言うのが聞こえました。

夫は、その時やつと玄関に出た様子で、「……なんだい」と、ひどくおどおどしているような、まの抜けた返辞をいたしました。「……なんだいではありませんよ」と女は、声をひそめて言い、「……こんな、ちゃんとしたお家うちもあるくせに、どろぼうを働たくくなんて、どうした事です。ひとのわるい冗談はよして、あれを返して下さい。でなければ、私はこれからすぐ警察に訴えます」と言う。「……何を言うんだ。失敬な事を言うな。ここは、お前たちの来るところではない。帰れ！ 帰らなければ、僕のほうからお前たちを訴えてやる」と言うのであった。

その時、もうひとりの男の声が出ました。「……先生、いい度胸だね。お前たちの来るところではない、とは出かした。あきれてものが言えねえや。ほかの事とは違う。よその家の金を、あんた、冗談にも程度がありますよ。いままでだって、私たち夫婦は、あんたのために、どれだけ苦勞をさせられて来たか、わからねえのだ。それなのに、こんな、今夜のような情けねえ事をし出かしてくる。先生、私は見そこないましたよ」と言うと、「……ゆすりだ」と夫は、威だけ高に言うのですが、その声は震えていました。「……恐喝だ。帰れ！ 文句があるなら、あした聞く」と言う。「……たいへんな事を言いやがるなあ、先生、すつかりもう一人前の悪党だ。それではもう警察へお願いするより手がねえぜ」と、その言葉の響きには、私の全身鳥肌立ったほどのすごい憎悪がこもっていました。

「……勝手にしろ！」と叫ぶ夫の声は既に上ずって、空虚な感じのものでした。私は起きて寝巻きの上に羽織を引掛け、玄関に出て、二人のお客に、「……いらつしやいまし」と挨拶しました。「……や、これは奥さんですか」と、ひざきりの短い外套を着た五十すぎくらいの丸顔の男のひとが、少しも笑わずに私に向ってちよつとうなずくように会釈しました。女のほうは四十前後のやせて小さい、身なりのきちんとしたひとでした。「……こんな夜中にあがりました」とその女のひとは、やはり少しも笑わずにシヨールをはずして私にお辞儀をかえました。

その時、やにわに夫は、下駄を突っかけて外に飛び出ようとなりました。「……おつと、そいつあいけない」と、男のひとは、その夫の片腕をとらえ、二人は瞬時もみ合いました。「……放せ！ 刺すぞ」と、夫の右手にジャックナイフが光っていました。そのナイフは、夫の愛蔵のものでございまして、たしか夫の机の引き出しの中にあつたので、それではさつき夫が家へ帰るなり何だか引き出しを掻きまわしていたようでしたが、かねてこんな事になるのを予期して、ナイフを捜し、懐にいられたのに、違いありません。

男のひとは身をひきました。そのすきに夫は大きい鴉のように二重回しの袖をひるがえして、外に飛び出しました。「……どろぼう！」と男のひとは大声を挙げ、つづいて外に飛び出そうとしましたが、私は、はだして土間に降りて男を抱いて引きとめ、「……およしなさいまし。どちらにもお怪我があつては、なりませぬ。あとの始末は、私がいたします」と申しますと、傍から四十の女のひとも、「……そうですね、とうさん。気がいらぬに刃物です。何をするかわかりません」と言いました。「……ちきしょう！ 警察だ。もう承知できねえ」と、ぼんやり外の暗闇を見ながら、ひとりごとのようにそう呟き、けれども、その男のひとの総身の力は既に抜けてしまっていました。「……すみません。どうぞ、おあがりになつて、お話を聞かして下さいまし」と言つて私は式台にあがつてしゃがみ、「……私でも、あとの始末は出来るかも知れませんが。どうぞ、おあがりになつて、どうぞ。きたないところですけど」と言うと、二人の客は顔を見あわせ、かすかにうなずき合つて、それから男のひとは様子をあらため、「……何とおっしゃつても、私どもの気持は、もうきまつています。しかし、これまでの経緯は一応、奥さんに申し上げて置きます」と言うのであつた。

二、これまでの経緯を店の主人が語る

「……はあ、どうぞ。おあがりになつて。そうして、ゆつくり」と言うと、「……いや、

そんな、ゆっくりもしておられませんが」と言いながら、男のひとは外套を脱ぎかけました。「……そのまま、どうぞ。お寒いんですから、本当に、そのまま、お願いします。家の中には火の気が一つもないのでございますから」と言うと、「……では、このままで失礼します」、「……どうぞ。そちらのお方も、どうぞ、そのまま」と言う。男のひとがさきに、それから女のひとが、夫の部屋の六畳間にはいり、腐りかけているような畳、破れほうだいの障子、落ちかけている壁、紙がはがれて中の骨が露出している襖、片隅に机と本箱、それもからつぼの本箱、そのような荒涼たる部屋の風景に接して、お二人とも息を呑んだような様子でした。

破れて綿のはみ出ている座蒲団を私はお二人にすすめて、「……畳が汚うございますから、どうぞ、こんなものでも、おあてになつて」と言い、それから改めてお二人に御挨拶を申しました。「……はじめてお目にかかります。主人がこれまで、たいへんなご迷惑ばかりおかけしてまいりましたようで、また、今夜は何をどう致しました事やら、あのようなおそろしい真似などして、おわびの申し上げ様もございませぬ。何せ、あのよう、変つた気象の人なので」と言いかけて、言葉がつまり、落涙しました。

「……奥さん。まことに失礼ですが、いくつにおなりですか？」と男のひとは、破れた座蒲団に悪びれず大あくらをかいて、肘をその膝の上に立て、こぶしで顎を支え、上半身を乗り出すようにして私に尋ねます。「……あの、私でございますか？」、「……ええ。たしか旦那は三十、でしたかね？」、「……はあ、私は、あの、……四つ下です」と言うと、「……すると、二十、六、いやこれはひどい。まだ、そんなですか？ いや、そのはずだ。旦那が三十ならば、そりやそのはずだけど、おどろいたな」と言い、「……私も、さきほどから」と女のひとは、男のひとの脊中の蔭から顔を出すようにして、「……感心しております。こんな立派な奥さんがあるのに、どうして大谷さんは、あんなに、ねえ」と言うと、「……病気だ。病気なんだよ。以前はあれほどでもなかったんだが、だんだん悪くなりやがった」と言つて大きい溜息をつき、「……実は、奥さん」とあらたまつた口調になり、「……ども夫婦は、中野駅の近くに小さい料理屋を経営して、私もこれも上州の生まれで、私はこれでも堅気のあきんどだったのでございますが、道楽気が強い、というのでございましょうか、田舎のお百姓を相手のケチな商売にもいや気がさして、かれこれ二十年前、この女房を連れて東京へ出て来まして、浅草の、或る料理屋に夫婦ともに住込みの奉公をはじめまして、まあ人並に浮き沈みの苦勞をして、すこし蓄えも出来ましたので、いまのあの中野の駅ちかくに、昭和十一年でしたか、六畳一間に狭い土間附きのまこととむさくるしい小さい家を借りました、一度の遊興費が、せいぜい一円か二円の客を相手の、心細い飲食店を開業いたしましたして、それでもまあ夫婦がぜいたくもせず、地道に働いて来たつもりで、そのおかげか焼酎やらジンやらを、割にどつきり仕入れて置く事が出来まして、その後の酒不足の時代になりましたから、よその飲食店のように転業などせずに、どうやら頑張つて商売をつづけてまいりました、また、そうになると、ひいきのお客もむきになつて応援を下さつて、いわゆるあの軍官の酒さかなが、こちらへも少しづつ流れて来るような道を、ひらいて下さるお方もあり、対米英戦がはじまつて、だんだん空襲がはげしくなつて来てからも、私どもには足手まといの子供はなし、故郷へ疎開などする気も起らず、まあこの家が焼けるまでは、と思つて、この商売一つにかじりついて来て、どうやら罹災もせず終戦になりましたのでほつとして、こんどは大ぴらに鬮酒を仕

入れて売っているという、手短かに語ると、そんな身の上の人間なのでございます。

けれども、こうして手短かに語ると、さして大きな難儀もなく、割に運がよく暮して来た人間のようにお思になるかも知れませんが、人間の一生は地獄でございまして、寸善尺魔、とは、まったく本当の事でございますね。一寸の仕合せには一尺の魔物が必ずくっついてまいります。人間三百六十五日、何の心配もない日が、一日、いや半日あったら、それは仕合せな人間です。あなたの旦那の大谷さんが、はじめて私どもの店に来ましたのは、昭和十九年の、春でしたか、とにかくその頃はまだ、対米英戦もそんなに負けいくさではなく、いや、そろそろもう負けいくさになっていたのでしようが、私たちにはそんな、実体、ですか、真相、ですか、そんなものはわからず、ここ二、三年頑張れば、どうにかこうにか対等の資格で、和睦わづなが出来るくらいに考えていまして、大谷さんがはじめて私どもの店にあらわれた時にも、たしか、久留米くるとみ緋がすりの着流しに二重回しを引つけていた筈で、けれども、それは大谷さんだけでなく、まだその頃は東京でも防空服装で身をかためて歩いている人は少く、たいてい普通の服装でのんきに外出できた頃でしたので、私どもも、その時の大谷さんの身なりを、別段だらしなげとも何とも感じませんでした。

大谷さんは、その時、おひとりではございませんでした。奥さんの前ですけれども、いや、もう何も包みかくしなく洗いざらい申し上げましょう、旦那は、或る年増女に連れられて店の勝手口からこっそりはいつてまいりましたのです。もつとも、もうその頃は、私どもの店も、毎日おもての戸は閉めつきりで、その頃はやはり言葉で言うとお店開業というやつで、ほんの少数の馴染客だけ、勝手口からこっそりはいり、そうしてお店の土間の椅子席でお酒を飲むという事はなく、奥の六畳間で電気を暗くして大きい声を立てずに、こっそり酔っぱらうという仕組になっていまして、また、その年増女というのは、そのすこし前まで、新宿のバアで女給さんをしていたひとで、その女給時代に、筋のいいお客を私の店に連れて来て飲ませて、私の家の馴染にしてくれるという、まあ蛇どろの道はへび、という工合いの附合いをしておりまして、そのひとのアパートはすぐ近くでしたので、新宿のバアが閉鎖になって女給をよしましてからも、ちよいちよ知合いの男のひとを連れてまいりまして、私どもの店にもだんだん酒が少くなり、どんなに筋のいいお客でも、飲み手がふえるというのは、以前ほど有難くないばかりか、迷惑にさえ思われたのですが、しかし、その前の四、五年間、ずいぶん派手な金遣いをするお客ばかり、たくさん連れて来てくれたのでございますから、その義理もあつて、その年増のひとから紹介された客には、私どもも、いやな顔をせずお酒を差し上げる事にしていたのでした。

だから旦那がその時、その年増のひと、秋ちゃん、といますが、そのひとに連れられて裏の勝手口からこっそりはいつて来ても、別に私どもも怪しむ事なく、れいのとおり、奥の六畳間に上げて、焼酎を出しました。大谷さんは、その晩はおとなしく飲んで、お勘定は秋ちゃんに払わせて、また裏口からふたり一緒に帰って行きましたが、私には奇妙にあの晩の、大谷さんのへんに静かで上品な素振りが忘れられません。魔物がひとの家にはじめて現われる時には、あんなひっそりした、ういういしいみたいな姿をしているものなのでしょう。その夜から、私どもの店は大谷さんに見込まれてしまったのです。それから十日ほど経って、こんどは大谷さんがひとりで裏口からまいりまして、いきなり百円紙幣を一枚出して、いやその頃はまだ百円と言えば大金でした、いまの二、三千円にも、それ以上にも当る大金でした、それを無理矢理、私の手に握らせて、たのむ、と言って、

気弱そうに笑うのです。もう既に、だいぶ召上っている様子でしたが、とにかく、奥さんもご存じでしょう、あんな酒の強いひとはありません。酔ったのかと思うと、急にまじめな、ちゃんと筋のおつた話をするし、いくら飲んで、足もとがふらつくなんて事は、ついで一度も私どもに見せた事はないのですからね。人間三十前後は謂わば血気のさかりで、酒にも強い年頃ですが、しかし、あんなのは珍しい。その晩も、どこかよそで、かなりやって来た様子なのに、それから私の家で、焼酎を立てつづけに十杯も飲み、まるでほとんど無口で、私ども夫婦が何かと話しかけても、ただはにかむように笑って、うん、うん、とあいまいにうなずき、突然、何時ですか、と時間をたずねて立ち上り、お釣を、と私が言いますと、いや、いい、といい、それは困ります、と私が強く言いましたら、にやつと笑って、それではこの次まであずかって置いて下さい、また来ます、と言って帰りました。奥さん、私どもがあのお金からお金をいただいたのは、あとにもさきにも、ただこの時いちど切り、それからもう、なんだかんだとごまかして、三年間、一銭のお金も払わずに、私どものお酒をほとんどひとりで、飲みほしてしまっただから、呆れるじやありませんか」と言う。(つまり、最初の頃、亭主に百円札をにぎらせ、それ以降、三年間、一銭のお金も払わずに、店のお酒を飲みつくし、しかも、今夜は、その店のお金(五千円)までも盗み出して、家へと逃げて来たという始末なのである。)

三、夫の家柄とその立ち振る舞い

思わず、私は、嘖き出しました。理由のわからない可笑しさが、ひよいとこみ上げて来たのです。あわてて口をおさえて、おかみさんのほうを見ると、おかみさんも妙に笑ってうつむきました。それから、ご亭主も、仕方無さそうに苦笑いして、「いや、まったく、笑い事では無いんだが、あまり呆れて、笑いたくもありません。じつさい、あれほどの腕前を、他のまともな方面に用いたら、大臣にでも、博士にでも、なんにでもなれますよ。私ども夫婦ばかりでなく、あの人に目込まれて、すってんてんになってこの寒空に泣いている人間が他にもまだまだある様子だ。げんにあの秋ちゃんなど、大谷さんと知合ったばかりに、いいパトロンには逃げられるし、お金も着物も無くしてしまうし、いまはもう長屋の汚い一部屋で乞食みたいな暮しをしているそうだが、じつさい、あの秋ちゃんは、大谷さんと知合った頃には、あさましくらしいのぼせて、私たちにも何かと吹聴していたものです。だいいち、ご身分が凄。四国の或る殿様の別家の、大谷男爵の次男で、いまは不所持のため勘当せられているが、いまに父の男爵が死ねば、長男と二人で、財産をわけるといふ大天才の書いた本よりも、もっと上手で、それからまた十何冊だかの本を書いて、としては若いけれども、日本一の詩人、という事になっている。おまけに大学者で、学習院から一高、帝大とすすんで、ドイツ語フランス語、いやもう、おそろしい、何が何だか秋ちゃんに言わせるとまるで神様みたいな人で、しかし、それもまた、まんざら皆うそではないらしく、他のひとから聞いても、大谷男爵の次男で、有名な詩人だという事に変わりはないので、こんな、うちの婆まで、いいとしをして、秋ちゃんと競争してのぼせ上って、さすがに育ちのいいお方はどこか違っていらっしやる、なんて言って大谷さんのおいでを心待ちにしているていたらくなんですから、たまりません。

いまはもう、華族もへったくれも無くなったようですが、終戦前までは、女を口説くには、とにかくこの華族の勘当息子という手に限るようでした。へんに女が、くわつとなるらしいんです。やつぱりこれは、その、いまはやりの言葉で言えば奴隷根性というものなんでしょうね。私なんぞは、男の、それも、すれっからしと来ているのでございますから、たかが華族の、いや、奥さんの前ですけれども、四国の殿様のそのまた分家の、おまけに次男なんて、そんなのは何も私たちと身分のちがいがあろう筈が無いと思っておりますし、まさかそんな、あさましく、くわつとなったりなどはしやしません。ですけれども、やはり、何だかどうもあの先生は、私にとつても苦手にがてでして、もうこんどこそ、どんなにたのまれてもお酒は飲ませまいと固く決心していても、追われて来た人のように、意外の時刻にひよいとあらわれ、私どもの家へ来てやつとほつとしたような様子を見ると、つい決心もにぶつてお酒を出してしまうのです。酔つても、別に馬鹿騒ぎをするわけじゃないし、あれでお勘定さえきちんとしてくれたら、いいお客なんですがねえ。自分で自分の身分を吹聴するわけでもないし、天才だのなんだのとそんな馬鹿げた自慢をした事もありませんし、秋ちゃんなんか、あの先生の傍で、私どもに、あの人の偉さに就いて広告したりなどすると、僕はお金がほしいんだ、ここの勘定を払いたいんだ、とまるつきり別な事を言つて座を白けさせてしまします。

あの人が私どもに今までお酒の代を払った事はありますが、あのひとのかわりに、秋ちゃんの時々支払つて行きますし、また、秋ちゃんの他にも、秋ちゃんに知られては困るらしい内緒の女のひともありまして、そのひとはどこかの奥さんのようで、そのひとも時々大谷さんと一緒にやつて来まして、これもまた大谷さんのかわりに、過分のお金を置いて行く事もありまして、私どもだって、商人でございますから、そんな事でもなかった日には、いくら大谷先生であろうが宮様であろうが、そんなにいつまでも、ただで飲ませるわけにはまいりませんのです。けれども、そんな時たまの支払いだけでは、とても足りるものではなく、もう私どもの大損で、なんでも小金井に先生の家があつて、そこにはちやんとした奥さんもうらつしやるという事を聞いていましたので、いちどそちらへお勘定の相談にあがろうと思つて、それとなく大谷さんにお宅はどのへんでしようと、たずねる事もありましたが、すぐ勘附いて、無いものは無いんだよ、どうしてそんなに気をもむのかね、喧嘩けんかわかれは損だぜ、などと、いやな事を言います。それでも、私どもは何とかし、先生のお家だけでも突きとめて置きたくて、二、三度あとをつけてみた事もありましたが、そのたんびに、うまく巻かれてしまうのです。そのうちに東京は大空襲の連続という事になりました、何が何やら、大谷さんが戦闘帽などかぶつて舞い込んで来て、勝手に押入れの中からブランドイの瓶なんか持ち出して、ぐいぐい立たまま飲んで風のように立ち去つたりなんかして、お勘定も何もあつたものでなく、やがて終戦になりましたので、こんどは私どもも大つぴらで闇の酒さかなを仕入れて、店先には新しいのれんを出し、いかに貧乏の店でも張り切つて、お客への愛嬌あいせきょうに女の子をひとり雇つたり致しましたが、またもや、あの魔物の先生があらわれまして、こんどは女連れでなく、必ず二、三人の新聞記者や雑誌記者と一緒にまいて、なんでもこれからは、軍人が没落して今まで貧乏していた詩人などが世の中からもはやされるようになったとかいうその記者たちの話でございます、大谷先生は、その記者たちを相手に、外国人の名前だか、英語だか、哲学だか、何だかわけのわからないような、へんな事を言つて聞かせて、そうしてひよいと

立って外へ出て、それっきり帰りません。

記者たちは、興覚め顔に、あいつどこへ行きやがったんだろう、そろそろおれたちも帰ろうか、など帰り支度をはじめ、私は、お待ち下さい、先生はいつもあの手で逃げるので、お勘定はあなたたちから戴きます、と申します。おとなしく皆で出し合って支払って帰る連中もありますが、大谷に払わせる、おれたちは五百円生活をしているんだ、と言って怒る人もあります。怒られても私は、いいえ、大谷さんの借金が、いままでいくらになっているかご存じですか？ もしあなたたちが、その借金をいくらでも大谷さんから取って下さったら、私は、あなたたちに、その半分は差し上げます、と言いますと、記者たちも呆れた顔を致しまして、なんだ、大谷がそんなひでえ野郎とは思わなかった、こんどからはあいつと飲むのはごめんだ、おれたちには今夜は金は百円も無い、あした持つて来るから、それまでこれをあずかって置いてくれ、と威勢よく外套を脱いだりなんかするのでございます。記者というものは柄が悪い、と世間から言われているようですけれども、大谷さんにくらべると、どうしてどうして、正直であっさりして、大谷さんが男爵の御次男なら、記者たちのほうが、公爵の御総領くらいの値打があります。大谷さんは、終戦後は一段と酒量もふえて、人相がけわしくなり、これまで口にした事の無かったひどく下品な冗談などを口走り、また、連れて来た記者を矢庭に殴って、つかみ合いの喧嘩をはじめたり、また、私どもの店を使っているまだはたち前の女の子を、いつのまにやらだまし込んで手に入れてしまった様子で、私どもも実に驚き、まったく困りましたが、既にもう出来てしまった事ですから泣き寝入りの他は無く、女の子にもあきらめるように言いふくめて、こっそり親御の許にかえしてやりました。大谷さん、何ももう言いません、拝むから、これっきり来ないで下さい、と私が申しましたが、大谷さんは、闇でもうけているくせに人並の口をきくな、僕はなんでも知っているぜ、と下司な脅迫がましい事など言いまして、またすぐ次の晩に平気な顔してまいります。

私どもも、大戦中から闇の商売などして、その罰が当って、こんな化け物みたいな人間を引受けなければならなくなったのかも知れませんが、しかし、今晚のような、ひどい事をされては、もう詩人も先生もへったくれもない、どろぼうです、私どものお金を五千元ぬすんで逃げ出したのですからね。いまはもう私どもも、仕入れに金がかかって、家の中にはせいぜい五百円か千円の現金があるくらいのもので、いや本当の話、売上げの金はすぐ右から左へ仕入れに注ぎ込んでしまわなければなりません。今夜、私どもの家に五千元などという大金があったのは、もうことしも大みそかが近くなって来ましたし、私が常連のお客さんの家を廻ってお勘定をもらって歩いて、やっとそれだけ集めてまいりましたのでして、これはすぐ今夜にでも仕入れのほうに手渡してやらなければ、もう来年の正月からは私どもの商売をつづけてやって行かれなくなるような、そんな大事な金で、女房が奥の六畳間で勘定して戸棚の引出しにしまったのを、あのひとが土間の椅子席でひとり酒を飲みながらそれを見ていたらしく、急に立ってつかつかと六畳間にあがって、無言で女房を押しつけ引き出しをあけ、その五千元の札束をわしづかみにして二重まわしのポケットにねじ込み、私どもがあっけにとられているうちに、さつさと土間に降りて店から出て行きますので、私は大声を挙げて呼びとめ、女房と一緒に後を追う、私はこうなればもう、どろぼう！ と叫んで、往來のひとたちを集めてしばってもらおうかとも思ったのですが、とにかく大谷さんは私どもとは知り合いの間柄ですし、それもむごすぎるよう

に思われ、今夜はどんな事があっても大谷さんを見失わないようにどこまでも後をつけて行き、その落ちつく先を見とどけて、おだやかに話してあの金をかえてしてもらおうとまあ私どもも弱い商売でございますから、私ども夫婦は力を合せ、やっとな今夜はこの家をつきとめて、かんにん出来ぬ気持をおさえて、金をかえて下さいと、おんびんに申し出たのに、まあ、何という事だ、ナイフなんか出して、刺すぞだなんて、まあ、なんというと言うのであった

またもや、わけのわからぬおかしさがこみ上げて来まして、私は声を挙げて笑ってしまいました。おかみさんも、顔を赤くして少し笑いました。私は笑いがなかなかとまらず、ご亭主に悪いと思いましたが、なんだか奇妙におかしくて、いつまでも笑いつづけて涙が出て、夫の詩の中にある「文明の果ての大笑い」というのは、こんな気持ちの事を言っているのかしらと、ふと考えました。

四、翌日、妻はその店へと出かけて行く

とにかく、しかし、そんな大笑いをして、すまされる事件ではございませんでしたので、私も考え、その夜お二人に向かつて、それでは私が何とかしてこの後始末をする事にいたしますから、警察ざたにするのは、もう一日お待ちになつて下さいまし、明日そちらさまへ、私のほうからお伺いいたします、と申し上げまして、その中野のお店の場所をくわしく聞き、無理にお二人にご承諾をねがひまして、その夜はそのままひとまず引きとつていただき、それから、寒い六畳間のまんなかに、ひとりすわって物案じものあんいたしました。べつだん何のいい工夫くふうも思ひ浮びませんでしたので、立って羽織はおりを脱いで、坊やの寝ている蒲団ふとんにもぐり、坊やの頭をなでながら、いつまでも、いつまで経つても、夜が明けなければいい、と思いました。

私の父は以前、浅草公園のひょうたん池のほとりに、おでんの屋台を出していました。母は早くなくなり、父と私と二人きりで長屋住居をしていて、屋台のほうも父と二人でやっています。いままのあの人がときどき屋台に立ち寄って、私はそのうちに父をあざむいて、あの人と、よそで逢うようになりまして、坊やがおなかに出来ましたので、いろいろごたごたの末、どうやらあの人の女房というような形になったものの、もちろん籍も何もはいつておりませんし、坊やは、てて無し児ななしこという事になっていますし、あの人は家を出ると三晩も四晩も、いいえ、ひとつきも帰らぬ事もございまして、どこで何をしている事やら、帰る時は、いつも泥酔どろよしていて、まっ青な顔で、はあっはあつと、くるしそうな呼吸をして、私の顔を黙って見て、ぼろぼろ涙を流す事もあり、またいきなり、私の寝ている蒲団にもぐり込んで来て、私のからだを固く抱きしめて、「……ああ、いかん。こわいんだ。こわいんだよ、僕は。こわい！ たすけてくれ！」などと言ひまして、がたがた震えている事もあり、眠ってからも、うわごとを言うやら、うめくやら、そうしてあくる朝は、魂の抜けた人みたいになんやりして、そのうちにふつといなくなり、それっきりまた三晩も四晩も帰らず、古くからの夫の知り合いの出版のほうの方が二、三人、そのひとたちが私と坊やの身を案じて下さって、時たまお金を持って来てくれますので、どうやら私たちも飢え死にせずにはきようまで暮してまいりましたのです。……

とろとろと、眠りかけて、ふと眼をあけると、雨戸のすきまから、朝の光線がさし込ん

でいるのに気づいて、起きて身じたくをして坊やを背負い、外に出ました。もうとても黙って家の中におられない気持ちでした。

どこへ行こうというあてもなく、駅のほうに歩いて行って、駅の前の露店で飴あめを買ひ、坊やにしゃぶらせて、それから、ふと思いついて吉祥寺までの切符を買って電車に乗り、つり皮にぶらさがって何気なく電車の天井にぶらさがっているポスターを見ますと、夫の名が出ていました。それは雑誌の広告で、夫はその雑誌に「フランソワ・ヴィヨン」という題の長い論文を発表している様子でした。私はそのフランソワ・ヴィヨンという題と夫の名前を見つめているうちに、なぜだかわかりませぬけれども、とてもつらい涙がわいて出て、ポスターがかすんで見えなくなりました。

吉祥寺で降りて、本当にもう何年振りかで井いの頭かしら公園に歩いて行って見ました。池のはたの杉の木が、すっかり切り払われて、何かこれから工事でもはじめられる土地みたい

に、へんにむき出しの寒々とした感じで、昔とすっかり変っていました。坊やを背中からおろして、池のはたのこわれかかったベンチに二人ならんで腰をかけ、家から持って来たおいもを坊やに食べさせました。「……坊や。きれいなお池でしょ？昔はね、このお池に鯉こいトトや金かトトが、たくさんいたのだけれども、いまはなんにも、いないわねえ。つまらないねえ」と言うと、坊やは、何と思ったのか、おいもを口の中に一ぱい頬張ほおばったまま、けけ、と妙に笑いました。わが子ながら、ほとんど阿呆あほうの感じでした。

その池のはたのベンチにいつまでいたって、何のらちのあく事ではなし、私はまた坊やを背負って、ぶらぶら吉祥寺の駅のほうへ引っ返し、にぎやかな露店街を見て回って、それから、駅で中野行きちのの切符を買ひ、何の思慮も計画もなく、いわばおそろしい魔の淵ふちにするすると吸い寄せられるように、電車に乗って中野で降りて、きのう教えられたとおりの道筋を歩いて行って、あの人たちの小料理屋の前にたどりつきました。

五、店の中へと入っていく

表の戸は、あきませんでしたので、裏へまわって勝手口からはいりました。ご亭主さんはいなくて、おかみさんひとり、お店の掃除そうじをしていました。おかみさんと顔が合ったとたんに私は、自分でも思いがけなかった嘘うそをすらすらと言いました。「……あの、おばさん、お金は私がいかにいいから、もうご心配なさい」と言うと、「……お、はつきり見込みがついたのですから、もうご心配なさい」と言うと、「……おや、まあ、それはどうも」と言って、おかみさんは、ちよつとうれしそうな顔をしました。が、それでも何かふに落ちないような不安な影がその顔のどこやらに残っていました。「……おばさん、本当よ。かくじつに、ここへ持って来てくれるひとがあるのよ。それまで私は、人質になって、ここにずっといる事になっています。それなら、安心でしょう？ お金に来るまで、私はお店のお手伝いでもさせていただくわ」と言うのであった。

私は坊やを背中からおろし、奥の六畳間にひとりで遊ばせておいて、くるくると立ち働いて見せました。坊やは、もともとひとり遊びにはなれておりますので、少しも邪魔になりません。また頭が悪いせい、人見知りをしないたちなので、おかみさんにも笑いかけたりして、私がおかみさんのかわりに、おかみさんの家の配給物を取りに行つてあげてい

る留守にも、おかみさんからアメリカの缶詰かんづめの殻からを、おもちゃ代りにもらって、それを叩いたりころがしたりしておとなしく六畳間の隅で遊んでいたようでした。

お昼ごろ、ご亭主がおさかなや野菜の仕入れをして帰って来ました。私は、ご亭主の顔を見るなり、また早口に、おかみさんに言ったのと同様のうそを申しました。

ご亭主は、きよとんとした顔になって、「……へえ？　しかし、奥さん、お金つてものは、自分の手に、握ってみないうちは、あてにならないのですよ」と案外、しずかな、教えさとするような口調で言いました。「……いいえ、それがね、本当にたしかなのよ。だから、私を信用して、おもて沙汰にするのは、きょう一日待つて下さいな。それまで私は、このお店でお手伝いしていますから」と言うと、「……お金か、かえつて来れば、そりやもう何も」とご亭主は、ひとりごとのように言い、「……何せことしも、あと五、六日なのですからね」と言う。「……ええ、だから、それだから、あの私は、おや？　お客さんですわよ。いらつしやいまし」と私は、店へはいつて来た三人連れの職人ふうのお客に向つて笑いかけ、それから小声で、「……おばさん、すみません。エプロンを貸して下さいな」と言うと、「……や、美人を雇いやがった。こいつあ、凄いな」と客のひとりが言いました。「……誘惑しないで下さいよ」とご亭主は、まんざら冗談でもないような口調で言い、「……お金のかかつているからだですから」と言う。「……百万ドルの名馬か？」ともうひとりの客は、げびた洒落しゃれを言いました。「……名馬も、雌めすは半値だそうです」と私は、お酒のお爛かんをつけながら、負けずに、げびた受けこたえをいたしますと、「……けんそんなよ。これから日本は、馬でも犬でも、男女同権だつてき」と一ばん若いお客が、どなるように言いまして、「……ねえさん、おれはほれた。一目ぼれた。が、しかし、お前は、子持ちだな？」と言うので、「……いいえ」と奥から、おかみさんは、坊やを抱いて出て来て、「……これは、こんど私どもが親戚しんせきからもらつて来た子ですの。これでもう、やつと私どもにも、あとつぎが出来たというわけですわ」と言うと、「……金も出来たし」と客のひとりが、からかいますと、ご亭主はまじめに、「……いろもでき、借金もでき」とつぶやき、それから、ふいと語調をかえて、「……何にしますか？　よせ鍋なべでも作りましょうか？」と客にたずねます。私には、その時、或る事が一つ、わかりました。やはりそうか、と自分でひとりうなずき、うわべは何気なく、お客にお銚子ちやうしを運びました。

その日は、クリスマスの、前夜祭とかいうのに当つていたようで、そのせいか、お客が絶えることなく、次々と参りまして、私は朝からほとんど何一ついただいておらなかつたのでございますが、胸に思いがいっぱいこもっているためか、おかみさんから何かおあがりとお勧められても、いいえたくさんと申しまして、そうしてただもう、くるくると羽衣はしろも一まいをまとつて舞っているように身軽く立ち働き、うぬぼれかも知れませぬけれども、その日のお店は異様に活気づいていたようで、私の名前をたずねたり、また握手などを求めたりするお客さんが二人、三人どころではございませんでした。

けれども、こうしてどうなるのでしょうか。私には何も一つも見当がついていないのです。ただ笑つて、お客のみだらな冗談にこちらも調子を合わせて、さらにもつと下品な冗談を言いかえし、客から客へ滑り歩いてお酌して回つて、そうしてそのうちに、自分のこのからだにアイスクリームのように溶けて流れてしまえばいい、などと考えるだけでございます。——奇蹟きせきはやはり、この世の中にも、ときたま、あらわれるものらしいでございます。九時すこし過ぎくらいの頃でございましたでしょうか。クリスマスのお祭りの、

紙の三角帽をかぶり、ルパンのように顔の上半分を覆いかくしている黒の仮面をつけた男と、それから三十四、五のやせ型のきれいな奥さんと二人連れの客が見えまして、男のひとは、私どもには後ろ向きに、土間のすみの椅子いすに腰をおろしましたが、私はその人がお店にはいつてくると直ぐに、誰だかわかりました。どろぼうの夫です。

六、夫の連れの婦人が盗んだお金を立て替える

向うでは、私のことに何も気づかぬようでしたので、私も知らぬ振りして他のお客とふざけ合い、そうして、その奥さんが夫と向い合つて腰かけて、「……ねえさん、ちよつと」と呼びましたので、「……へえ」と返辞して、お二人のテーブルのほうに参りまして、「……いらつしやいませ。お酒でございませうか？」と申しました時に、ちらと夫は仮面の底から私を見て、さすがに驚いた様子でしたが、私はその肩を軽くなでて、「……クリスマスおめでどうつて言うの？　なんていうの？　もう一升くらいは飲めそうね」と申しました。奥さんはそれには取り合わず、改まった顔つきをして、「……あの、ねえさん、すみませんがね、ここのご主人にないお話し申したい事がございますのですけど、ちよつとここへご主人を」と言いました。私は奥で揚物あげものをしているご亭主のところへ行き、「……大谷が帰つてまいりました。会つてやつて下さいませ。でも、連れの女のかたに、私のことは黙つていてくださいね。大谷が恥かしい思いをするといけませんから」と言い、「……いよいよ、来ましたね」と、ご亭主は、私の、あのうそを半ばは危あやぶみながらも、それでもかなり信用してしてくれたもののように、夫が帰つて来たことも、それも私の何か差しがねによつての事と單純に合点している様子でした。「……私のことは、黙つてね」と重ねて申しますと、「……そのほうがよろしいのでしたら、そうします」と氣さくに承知して、土間に出て行きました。

ご亭主は土間のお客を一わたりざつと見回し、それから真つ直ぐに夫のいるテーブルに歩み寄つて、そのきれいな奥さんと何か二言、三言話をかわして、それから三人そろつて店から出て行きました。もういいのだ。万事が解決してしまつたのだと、なぜだかそう信ぜられて、さすがにうれしく、紺緋こんがしりの着物を着たままだはたち前くらいの若いお客さんの手首を、（私は）だしぬけに強くつかんで、「……飲みましようよ、ね、飲みましよう。クリスマスですもの」と言うのであった。（例えば、実際、太宰治という人は、自分で問題解決すると言うよりは、実家をはじめ、実に様々な場面で特に「女性」に助けられている場合が極めて多いのである。）

七、妻はその店で働き始める……

ほんの三十分、いいえ、もっと早いくらい、おや、と思つたくらいに早く、ご亭主がひとり帰つて来まして、私の傍に寄り、「……奥さん、ありがとうございました。お金はかえして戴きました」と言うので、「……そう。よかつたわね。全部？」と聞くと、ご亭主は、へんな笑い方をして、「……ええ、きのうの、あの分だけはね」と言う。「……これまでのが全部で、いくらなの？　ざつと、まあ、大負けに負けて」と言う、「……二万円」と言うので、「……それだけでいいの？」と聞くと、「……大負けに負けました」

と言う。「……おかえしいたします。おじさん、あすから私を、ここで働かせてくれない？
ね、そうして！ 働いて返すわ」と言うのと、「……へえ？ 奥さん、とんだ、おかるだ
ね」と言うので、私たちは、声を合せて笑いました。

その夜、十時すぎ、私は中野の店をおいとまして、坊やを背負い、小金井の私たちの家
にかえりました。やはり夫は帰って来ていませんでしたが、しかし私は、平気でした。あ
すまた、あのお店へ行けば、夫に逢えるかも知れない。どうして私はいままで、こんな
い事に気づかなかったのかしら。きのうまでの私の苦労も、所詮は私が馬鹿で、こんな名
案に思いつかなかったからなのだ。私だって昔は浅草の父の屋台で、客あしらは決して
下手ではなかったのだから、これからあの中野のお店できっと巧く立ちまわれるに違いな
い。現に今夜だって私は、チップを五百円ちかくもらったのだもの。

ご亭主の話によると、夫は昨夜あれからどこか知り合いの家へ行って泊まったらしく、
それから、けさ早く、あのきれいな奥さんの営んでいる京橋のバーを襲って、朝からウイ
スキーを飲み、そうして、そのお店に働いている五人の女の子に、クリスマス・プレゼン
トだと言ってむやみにお金をくれてやって、それからお昼頃にタキシードを呼び寄せさせど
こかへ行き、しばらくたって、クリスマスの三角帽やら仮面やら、デコレーションケーキ
やら七面鳥まで持ち込んで来て、四方に電話を掛けさせ、お知合いの方たちを呼び集め、
大宴会をひらいて、いつもちっともお金を持っていない人なのにと、バーのマダムが不審
がって、そつと問いただしてみたら、夫は平然と、昨夜のことを洗いざらいそのまま言う
ので、そのマダムも前から大谷とは他人の仲ではないらしく、とにかくそれは警察沙汰に
なって騒ぎが大きくなっても、つまらないし、かえさなければなりませんと親身に言っ
て、お金はそのマダムがたてかえて、そうして夫に案内させ、中野のお店に来てくれたのだそ
うで、中野のお店のご亭主は私に向って、「……たいがい、そんなところだろうとは思っ
ていましたが、しかし、奥さん、あなたはよくその方角にお気がつきましたね。大谷さん
のお友だちにも頼んだのですか」とやはり私が、はじめからこうしてかえって来るの
を見越して、このお店に先廻りして待っていたもののように考えているらしい口振りでした
から、私は笑って、「……ええ、そりやもう」とだけ、答えて置きましたのです。

八、店での仕事が楽しくなる

その翌る日からの私の生活は、今までとはまるで違って、浮き浮きした楽しいものにな
りました。さっそく電髪屋に行つて、髪の手入れもいたしましたし、お化粧品も取りそ
ろえまして、着物を縫い直したり、また、おかみさんから新しい白足袋しろたびを二足もいただき、
これまでの胸の中の重苦しい思いが、きれいにぬぐい去られた感じでした。

朝起きて坊やと二人で御飯をたべ、それから、お弁当をつくって坊やを背負い、中野に
ご出勤ということになり、大みそか、お正月、お店のかきいれどきなので、つばきや椿屋の、さ
つちゃん、というのがお店での私の名前なのでございますが、そのさつちゃんは毎日、目
のまわるくらいの大忙しで、二日に一度くらいは夫も飲みにやっつて参りまして、お勘定は
私に払わせて、またふつといなくなり、夜おそく私のお店をのぞいて、「……帰りません
か」とそつと言い、私もうなずいて帰り支度をはじめ、一緒にたのしく家路をたどる事も、
しばしばございました。「……なぜ、はじめからこうしなかつたのでしょうか。とつても

私は幸福よ」と言うと、「……女には、幸福も不幸もないものです」と言う。「……そうなの？　そう言われると、そんな気もして来るけど、それじゃ、男の人は、どうなの？」と聞くと、「……男には、不幸だけがあるんです。いつも恐怖と、戦つてばかりいるのです」と言う。「……わからないわ、私には。でも、いつまでも私、こんな生活をつづけて行きとうございますわ。椿屋のおじさんも、おばさんも、とてもいいお方ですもの」と言ううと、「……馬鹿なんですよ、あのひとたちは。田舎者ですよ。あれでなかなか欲張りですね。僕に飲ませて、おしまいには、もうけようと思つて居るのです」と言う。「……そりや商売ですもの、当り前だわ。だけど、それだけでもないんじゃない？　あなたは、あのおかみさんを、かすめたでしょう」と言うと、「……昔ね。おやじは、どう？　気づいているの？」と聞くと、「……ちやんと知つて居るらしいわ。いろもでき、借金もでき、といつか溜息まじりに言つてたわ」と言う。「……僕はね、キザのようですけど、死にたくて、仕様がななんです。生まれた時から、死ぬ事ばかり考へていたんだ。皆のために、死んだほうがいいんです。それはもう、たしかなんだ。それでいて、なかなか死ねない。へんな、こわい神様みたいなものが、僕の死ぬのを引きとめるのです」と言うので、「……お仕事が、おありですから」と言うと、「……仕事なんてものは、なんでもないんです。傑作も駄作もありやしません。人がいいと言へば、よくなるし、悪いと言へば、悪くなるんです。ちやうど吐くいきと、引くいきみたいなものなんです。おそろしいのはね、この世の中の、どこかに神がいる、という事なんです。いるんでしようね？」と言う。「……え？」と言うと、「……いるんでしようね？」と言うので、「……私には、わかりませんわ」と言うと、「……そう」と答えるのであつた。

九、夫の浮氣と妻の過ちあやまち

十日、二十日とお店にかよつて居るうちに、私には、椿屋つばきやにお酒を飲みに来て居るお客さんがひとり残らず犯罪人ばかりだという事に、気がついてまいりました。夫などはまだまだ、優しいほうだと思ふようになりました。また、お店のお客さんばかりでなく、路を歩いている人みなが、何か必ずうしろ暗い罪をかくしているように思われて来ました。立派な身なりの、五十年配の奥さんが、椿屋つばきやの勝手口にお酒を売りに来て、一升三百円、とはつきり言ひまして、それはいまの相場にしては安いほうですので、おかみさんがすぐに引きとつてやりましたが、水酒でした。あんな上品そうな奥さんさえ、こんな事をたくらまなければならなくなつて居る世の中で、わが身にうしろ暗いところが一つもなく生きて行く事は、不可能だと思ひました。トランプの遊びのように、マイナスを全部あつめるとプラスになるといふ事は、この世の道徳には起り得ない事でしょうか。

神がいるなら、出て来て下さい！　私は、お正月の末に、お店のお客にけがされました。その夜は、雨が降つて居ました。夫は、あらわれませんでした。夫の昔からの知り合ひの出版のほうの方で、時たま私のところへ生活費をとどけて下さつた矢島さんが、その同業のお方らしい、やはり矢島さんくらいの四十年配のお方と二人でお見えになり、お酒を飲みながら、お二人で声高く、大谷の女房がこんなところで働いて居るのは、よろしくないとか、よろしいとか、半分は冗談みたいに言い合ひ、私は笑いながら、「……その奥さんは、どこにいらつしやるの？」とたずねますと、矢島さんは、「……どこに居るのか知

りませんがね、すくなくとも、椿屋のさっちゃんよりは、上品できれいだ」と言いませぬで、「……やけるわね。大谷さんみたいな人となら、私は一夜でもいいから、添ってみたいわ。私はあんな、ずるいひとが好き」と言うと、「……これだからねえ」と矢島さんは、連れのお方のほうに顔を向け、口をゆがめて見せました。

その頃になると、私が大谷という詩人の女房だという事が、夫と一緒にやって来る記者のお方たちにも知られていましたし、またそのお方たちから聞いてわざわざ私をからかいにおいでになる物好きなお方などもありまして、お店はにぎやかになる一方で、ご亭主のご機嫌もいよいよ、まんざらでございませぬでしたのです。

その夜は、それから矢島さんたちは紙のヤミ取引の商談などして、お帰りになったのは十時すぎで、私も今夜は雨も降るし、夫もあらわれそうもございませぬでしたので、お客さんがまだひとり残っておりましたけれども、そろそろ帰り支度をはじめて、奥の六畳の隅に寝ている坊やを抱き上げて脊負い、「……また、傘をお借りしますわ」と小声でおかみさんにお頼みしますと、「……傘なら、おれも持つている。お送りしましょう」とお店に一人残っていた二十五、六の、やせて小柄な工員ふうのお客さんが、まじめな顔をして立ち上りました。それは、私には今夜がはじめてのお客さんでした。「……はばかりさま。ひとり歩きには馴れていますから」と言うと、「……いや、お宅は遠い。知っているんだ。おれも、小金井の、あの近所の者なんだ。お送りしましょう。おばさん、勘定をたのむ」と言い、お店では三本飲んだだけで、そんなに酔ってもいないようでした。

一緒に電車に乗って、小金井で降りて、それから雨の降るまっくらい路を相合傘で、ならんで歩きました。その若いひとは、それまでほとんど無言でしたのでしたが、ぼつりぼつり言いはじめ、「……知っているのです。おれはね、あの大谷先生の詩のファンなのですよ。おれもね、詩を書いているのですがね。そのうち、大谷先生に見ていただこうと思っていたのですがね。どうもね、あの大谷先生が、こわくてね」と言いながら、家につきました。「……ありがとうございます。また、お店で」と言うと、「……ええ、さようなら」と、若いひとは、雨の中を帰って行きました。

深夜、がらがらと玄関のあく音に、目をさましましたが、れいの夫の泥酔のご帰宅かと思ひ、そのまま黙って寝ていましたら、「……ごめん下さい。大谷さん、ごめん下さい」という男の声がいたします。起きて電燈をつけて玄関に出て見ますと、さっきの若いひとが、ほとんど直立できにくいくらいにふらふらして、「……奥さん、ごめんなさい。かえりにまた屋台で一ぱいやりましてね、実はね、おれの家は立川でね、駅へ行ってみたらもう、電車がねえんだ。奥さん、たのみます。泊めてください。ふとんも何も要りませぬ。この玄関の式台でもいいのだ。あしたの朝の始発が出るまで、ごろ寝させてください。雨さえ降ってなけや、その辺の軒下にも寝るんだが、この雨では、そうもいかねえ。たのみます」と言うので、「……主人もおりませぬし、こんな式台でよろしかったら、どうぞ」と私は言い、破れた座蒲団を二枚、式台に持って行ってあげました。「……すみませぬ。ああ酔った」と苦しそうに小声で言い、すぐにそのまま式台に寝ころび、私が寢床に引返した時には、もう高いいびきが聞えていました。

そうして、その翌る日のあけがた、私は、あつけなくその男の手にいれられました。その日も私は、うわべは、やはり同じ様に、坊やを背負って、お店の勤めに出かけました。中野のお店の土間で、夫が、酒のはいったコップをテーブルの上に置いて、ひとりで新聞

を読んでいた。コップに午前の陽の光が当って、きれいだと思います。「……誰もいないの？」と、夫は、私のほうを振り向いて見て、「……うん。おやじはまだ仕入れから帰らないし、ばあさんは、ちよつといままでお勝手のほうにいたようだったけど、いませんか？」と言うと、「……ゆうべは、おいでにならなかったの？」と聞くと、「……来ました。椿屋のさつちやんの顔を見ないとこのごろ眠れなくなつてね、十時すぎにここを覗いてみたら、いましがた帰りましたというのでね」、「……それで？」と聞くと、「……泊っちゃいましたよ、ここへ。雨はさんざ降っているし」と言う。「……あたしも、こんどから、このお店にずっと泊めてもらおう事にしようかしら」と言う、「……いいでしょう、それも」と言うので、「……そうするわ。あの家をいつまでも借りてるのは、意味ないもの」と言い、夫は、黙ってまた新聞に目をそそぎ、「……やあ、また僕の悪口を書いている。エピキュリアンのにせ貴族だつてさ。こいつは、当っていない。神におびえるエピキュリアン、とでも言ったらよいのに。さつちやん、ごらん、ここに僕のことを、人非人にんびにんなんて書いていますよ。違うよねえ。僕は今だから言うけれども、去年の暮にね、ここから五千円持つて出たのは、さつちやんと坊やに、あのお金で久し振りのいいお正月をさせたかったからです。人非人にんびにんでないから、あんな事も仕出かすのですと言う。私は格別うれしくもなく、「……人非人にんびにんでもいいじゃないの。私たちは、生きていさえすればいいのよ」と言いました。(完)

*

*

さて、太宰治の有名な『ヴィヨンの妻』という作品であるが、その「ヴィヨンの妻」というのは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それを「ウェブ」で調べてみると、それは、「……(作中主人公の)大谷という人が雑誌に載せた論文のテーマが十五世紀のフランスの詩人フランソワ・ヴィヨンという人であり、その人は、放蕩(無頼)詩人として有名でよく知られていたらしく、それが主人公の大谷(太宰)にも似ているということで、いわば「放蕩(酒や女に溺れる遊び人)の夫を持った妻」という意味合いで、まさに『ヴィヨンの妻』という作品名になったということである。

次に、その作品の簡単な「概略」であるが、深夜、夫は、行きつけの小料理屋の店のお金(五千円)を盗み出して、家へとあわてて逃げ込んでくるが、その後を追って店の「夫婦」たちもやって来て、夫に金を返してくれと言うと、夫は、いきなりナイフを突きつけて外へと逃げ出してしまう。残された妻は、仕方なく、店の夫婦たちの話を聞くと、実は、最初の頃、夫は店の亭主に百円札を手に握らせた他は、この三年間、一銭のお金も払わずに、店のお酒を飲み尽くしていたという事であり、そこで妻は、お金は用立てて、明日にも店に持つて行きますと言うと、二人に帰ってもらい、翌日、その店に行つて待っていると、夫がやって来て、盗んだお金は返すことになるが、残りの「借金」は、この店で私が働いて返しますという内容になっているかと思う。

ところで、この『ヴィヨンの妻』という作品は、昭和二十二年の『展望』三月号に掲載されたものであり、まさに「戦後の混乱期」(食料や物資などは圧倒的に不足し、ヤミ市が立ち、貧しい女性たちは身を売るような時代)であり、道徳や倫理などを言っていたら、それこそ「生きてはいけない」ような時代であり、それゆえ、女主人公の「妻」(さつちやん)という人も、その本文の中で、「……十日、二十日とお店にかよっているうちに、私には、椿屋つばきやにお酒を飲みに来ているお客さんがひとり残らず犯罪人ばかりだという事

に、気がついてまいりました。それは、お店のお客さんばかりではなく、路を歩いている人みなが、何か必ずうしろ暗い罪をかくしているように思われて来ました。立派な身なりの、五十年配の奥さんが、椿屋つばきやの勝手口にお酒を売りに来て、一升三百円、とはつきり言いまして、それはいまの相場にしては安いほうですので、おかみさんがすぐに引きとつてやりましたが、水酒でした。あんな上品そうな奥さんさえ、こんな事をたくらまなければならなくなっている世の中で、わが身にうしろ暗いところが一つもなくて生きて行く事は、不可能だと思いました」し、また、「……私は、お正月の末に、お店のお客にけがされましたし、夫は、店の女将おかみさんともできている」というように、そういうことを一々気にしていたらとても「生きられない」ということであり、「ヴィヨンの妻」が言うように、（今は）「……人非人にんびにんでもいいじゃないの。私たちは、生きていさえすればいいのよ」ということになるのかも知れない。

*

*

四、グッド・バイ

一、変心(一) 二人の話題は女性問題

文壇の、或る老大家が亡くなつて、その告別式の終り頃から、雨が降りはじめた。早春の雨である。——その帰り、二人の男が相合傘で歩いている。いずれも、その逝去した老大家には、お義理一ぺん、話題は、女についての、極めて不きんしんな事。紋服の初老の大男は、文士。それよりずっと若いロイド眼鏡、縞ズボンの好男子は、編集者。「……あいつも」と文士は言う。「……女が好きだったらしいな。お前も、そろそろ年貢のおさめ時じゃねえのか。やつれたぜ」と言うのと、「……全部、やめるつもりでいるんです」と、その編集者は、顔を赤くして答えるのであった。

この文士、ひどく露骨で、下品な口をきくので、その好男子の編集者はかねがね敬遠していたのだが、きようは自身に傘の用意がなかったので、仕方なく、文士の蛇の目傘にいられてもらい、かくは油をしばらくられる結果となつた。——全部、やめるつもりでいるんです。しかし、それは、まんざら嘘でなかつた。……何かしら、変つて来ていたのである。終戦以来、三年経つて、どこやら、変つた。

三十四歳、雑誌「オベリスク」編集長、田島周二、言葉に少し関西なまりがあるようだが、自身の出生については、ほとんど語らぬ。もともと、抜け目のない男で、「オベリスク」の編集は世間へのお体裁、実はヤミ商売のお手伝いして、いつも、しこたま、もうけている。けれども、悪銭身につかぬ例えのとおり、酒はそれこそ、浴びるほど飲み、愛人を十人ちかく養つているという噂。

かれは、しかし、独身ではない。独身どころか、いまの細君は後妻である。先妻は、白痴の女兒ひとりを残して、肺炎で死に、それから彼は、東京の家を売り、埼玉県の友人の家に疎開し、疎開中に、いまの細君をものにして結婚した。細君のほうは、もちろん初婚で、その実家は、かなり内福の農家である。

終戦になり、細君と女兒を、細君のその実家にあずけ、かれは単身、東京に乗り込み、郊外のアパートの一部屋を借り、そこはもうただ、寝るだけのところ、抜け目なく四方八方を飛び歩いて、しこたま、もうけた。

けれども、それから三年経ち、何だか気持が變つて来た。世の中が、何かしら微妙に變つて来たせいかな、または、彼のからだだが、日頃の不節制のために最近めつきり痩せ細つて来たせいかな、いや、いや、単に「とし」のせいかな、色即是空、酒もつまらぬ、小さい家を一軒買い、田舎から女房子供を呼び寄せて、……という里心に似たものが、ふいと胸をかすめて通る事が多くなつた。(終戦から三年経ち、何だか気持が變つて来た。)

もう、この辺で、ヤミ商売からも足を洗い、雑誌の編集に専念しよう。それについて……。それについて、さし当てるの難関。まず、女たちと上手に別れなければならぬ。思いがそこに到ると、さすが、抜け目のない彼も、途方にくれて、溜息が出るのだ。「……全部、やめるつもり、……」と、大男の文士は口をゆがめて苦笑し、「……それは結構だが、いったい、お前には、女が幾人あるんだい？」と聞くのであった。(本文)

*

*

さて、主人公は、雑誌「オベリスク」の編集長、田島周二という人であり、彼は、三十

四歳、独身ではなく、終戦になり、細君と女兒を、細君のその実家にあずけ、かれは単身、東京に乗り込み、郊外のアパートの一部屋を借り、そこはもうただ、寝るだけのところ、抜け目なく四方八方を飛び歩いて、しこたま、もうけていたという。

けれども、それから三年経ち、何だか気持が変つて来た。世の中が、何かしら微妙に変わって来たせい、または、彼のからだだが、日頃の不節制のために最近めつきり痩せ細って来たせい、いや、いや、単に「とし」のせい、色即是空、酒もつまらぬ、小さい家を一軒買ひ、田舎から女房子供を呼び寄せて、……という里心に似たものが、ふいと胸をかすめて通る事が多くなつた。

もう、この辺で、ヤミ商売からも足を洗い、雑誌の編集に専念しよう。それについて、さし当つての難関は、まず、女たちと上手に別れなければならぬ。思いがそこに到ると、さすが、抜け目のない彼も、途方にくれて、溜息が出るのであつた。

二、変心(二) 或る妙案を授かる

田島は、泣きべその顔になる。思えば、思うほど、自分ひとりの力では、到底、処理の仕様がな。金ですむ事なら、わけないけれども、女たちが、それだけで引下るようにも思えない。「……いま考えると、まるで僕は狂つていたみたいなんですよ。とんでもなく、手をひろげすぎて……」と、この初老の不良文士にすべて打ち明け、相談してみようかしらと、ふと思う。「……案外、殊勝な事を言いやがる。もつとも、多情な奴に限つて奇妙にいやらしくらい道徳におびえて、そこがまた、女に好かれる所以でもあるのだがね。男振りがよくて、金があつて、若くて、おまけに道徳的で優しいと来たら、そりや、もてるよ。当り前の話だ。お前のほうでやめるつもりでも、先方が承知しないぜ、これは」と言うので、「……そこなんです」とハンケチで顔を拭く。「……泣いてるんじやねえだろうな」、「……いいえ、雨で眼鏡の玉が曇つて……」、「……いや、その声は泣いてる声だ。とんだ色男さ」と言うのであつた。

ヤミ商売の手伝いをして、道徳的でもないものだが、その文士の指摘したように、田島という男は、多情のくせに、また女にへんに律儀な一面も持つていて、女たちは、それ故、少しも心配せず田島に深くたよつてゐるらしい様子。「……何か、いい工夫がないものでしょうか」と聞くと、「……ないね。お前が五、六年、外国にでも行つて来たらしいだろうが、しかし、いまは簡単に洋行なんか出来ない。いっそ、その女たちを全部、一室に呼び集め、螢の光でも歌わせて、いや、仰げば尊し、のほうがいいかな、お前が一人々に卒業証書を授与してね、それからお前は、発狂の真似をして、まっばだかで表に飛び出し、逃げる。これなら、たしかだ。女たちも、さすがに呆れて、あきらめるだろうさ」と言うのであつた。

まるで相談にも何もならぬ。「……失礼します。僕は、あの、ここから電車で……」と言うと、「……まあ、いいじゃないか。つぎの停留場まで歩こう。何せ、これは、お前にとつて重大問題だろうからな。二人で、対策を研究してみようじゃないか」と言う。

文士は、その日、退屈していたものと見えて、なかなか田島を放さぬ。「……いいえ、もう、僕ひとり、何とか」と言う、「……いや、いや、お前ひとりでは解決できない。まさか、お前、死ぬ気じゃないだろうな。実に、心配になつて来た。女に惚れられて、死

ぬというのは、これは悲劇じゃない、喜劇だ。いや、ファース（茶番）というものだ。滑稽の極だね。誰も同情しやしない。死ぬのはやめたほうがよい。うむ、名案。すごい美人を、どこからか見つけて来てね、そのひとに事情を話し、お前の女房という形になつてもらつて、それを連れて、お前のその女たち一人々々を歴訪する。効果てきめん。女たちは、皆だまつて引下る。どうだ、やってみないか」と言うのであつた。（本文）

*

*

つまり、「……すごい美人を、どこからか一人見つけて来て、その人に事情を話し、自分の女房という形になつてもらつて、それを連れて、自分のその女たち一人々々を歴訪するという案であつた」が、おぼれる者のワラ。田島は少し気が動いたとある。

三、行進（一）すごい美人捜しに奔走する

田島は、やってみる気になつた。しかし、ここにも難関がある。——すごい美人。醜くすごい女なら、電車の停留場の一区間を歩く度ごとに、三十人くらいは発見できるが、すごいほど美しい、という女は、伝説以外に存在しているものかどうか、疑わしい。

もともと田島は器量自慢、おしやれで虚栄心が強いので、不美人と一緒に歩くと、にわか腹痛を覚えると称してこれを避け、かれの現在のいわゆる愛人たちも、それぞれかなりの美人ばかりではあつたが、しかし、すごいほどの美人、というほどのものは無いようであつた。

あの雨の日に、初老の不良文士の口から出まかせの「秘訣」をさずけられ、何のばからしいと内心一応は反撥してみたものの、しかし、自分にも、ちつとも名案らしいものは浮ばない。——まず、試みよ。ひよつとしたらどこかの人生の片すみに、そんなすごい美人がごろがつているかも知れない。眼鏡の奥のかれの眼は、にわかキヨロキヨロいやらしく動きはじめ。……ダンス・ホール。喫茶店。待合。いない、いない。醜くてすごいものばかり。オフィス、デパート、工場、映画館、はだかレヴェウ。いるはずがない。女子大の校庭のあさましい垣のぞきをしたり、ミス何とかの美人競争の会場にかけついたり、映画のニューフェースとやらの試験場に見学と称してまぎれ込んだり、やたらと歩き廻つてみたが、いない。

獲物は帰り道にあらわれる。かれはもう、絶望しかけて、夕暮の新宿駅裏のヤミ市をすこぶる憂鬱な顔をして歩いてた。彼のいわゆる愛人たちのところを訪問してみる気も起らぬ。思い出すさえ、ぞつとする。別れなければならぬ。「……田島さん！」と出し抜くに背後から呼ばれて、飛び上らんばかりに、ぎよつとした。「……ええつと、どなただったかな？」と聞くと、「……あら、いやだ」と、声が悪い。鴉声というやつだ。「……へえ？」と、見直した。まさに、お見それ申したわけであつた。

彼は、その女を知っていた。ヤミ屋、いや、かつぎ屋である。彼はこの女と、ほんの二、三度、ヤミの物資の取引きをした事があるだけだが、しかし、この女の鴉声と、それから、おどろくべき怪力によつて、この女を記憶している。やせた女ではあるが、十貫は楽に背負う。魚臭くて、ドロドロのものを着て、モンペにゴム長、男だか女だか、わけがわからず、ほとんど乞食の感じで、おしやれの彼は、その女と取引きしたあとで、いそいで手を洗つたくらいであつた。

とんでもないシンデレラ姫。洋装の好みも高雅。からだだが、ほっそりして、手足が可憐かれんに小さく、二十三、四、いや、五、六、顔は愁うれいを含んで、梨の花の如く幽かすかに青く、まさしく高貴、すごい美人、これがあの十貫を楽に背負うかつぎ屋とは。——声の悪いのは、傷だが、それは沈黙を固く守らせておればいい。使える（と思うのであった）。（本文）

*

*

さて、主人公は、いわゆる「すごい美人」を捜し求めて、あらゆる場所を歩き廻るが、なかなか想うような女性に巡り逢うこともできず、ほとんど諦めかけていたが、帰り道、たまたま夕暮の新宿駅裏のヤミ市をすこぶる憂鬱ゆううつな顔をして歩いていると、突然、背後から、「……田島さん！」と出し抜けに呼ばれて、飛び上らんばかりにぎよつとして、「……ええつと、どなただったかな？」と聞くと、「……あら、いやだ」と、声が悪い。鴉声からすこえというやつであった。

彼は、その女を知っていた。ヤミ屋、いや、かつぎ屋である。彼はこの女と、ほんの二、三度、ヤミの物資の取引きをした事があるだけだが、しかし、この女の鴉声からすこえと、それから、おどろくべき怪力によって、この女を記憶している。やせた女ではあるが、十貫かん（約三十七キロ）は楽に背負う。魚臭くさくて、ドロドロのものを着て、モンペにゴム長、男だか女だか、わけがわからず、ほとんど乞食こじきの感じで、おしやれの彼は、その女と取引きしたあとで、いそいで手を洗ったくらいであった。（この身なりの汚きたさは、恐らく、わが身《女の身》を守るためでもあるのだろう。）

とんでもないシンデレラ姫。洋装の好みも高雅こうが。からだだが、ほっそりして、手足が可憐かれんに小さく、二十三、四、いや、五、六、顔は愁うれいを含んで、梨の花の如く幽かすかに青く、まさしく高貴、すごい美人、これがあの十貫を楽に背負うかつぎ屋とは。——声の悪いのは、傷だが、それは沈黙を固く守らせておればいい。使える（と思うのであった）。

四、行進（二）彼女に話を持ちかける

馬子まこにも衣裳いしやうというが、ことに女は、その装よそおい一つで、何が何やらわけのわからぬくらゐに変わる。元来、化け物なのかも知れない。しかし、この女（永井キヌ子という）のように、こんなに見事に変身できる女も珍らしい。「……さては、相当ため込んだね。いやに、りゆうとしてるじゃないか」と言うのと、「……あら、いやだ」と、どうも、声が悪い。高貴こうき性も何も、一ぺんに吹き飛ばす。「……君に、たのみたい事があるのだがね」と言うのと、「……あなたは、ケチで値切ってばかりいるから」と言うので、「……いや、商売の話じゃない。ぼくはもう、そろそろ足を洗うつもりでいるんだ。君は、まだ相変らず、かついでいるのかい」と聞くと、「……あたりまえよ。かつがなきやおまんまが食べられませんかからね」と、言うことが、いちいちゲスである。

「……でも、そんな身なりでもないじゃないか」、「……そりや、女性ですもの。たまには、着飾って映画も見たいわ」、「……きょうは、映画か?」、「……そう。もう見て来たの。あれ、何ていったかしら、アシクリゲ……」、「……膝栗毛ひざぐりげだろう。ひとりでかい?」、「……あら、いやだ。男なんて、おかしくって」と言うので、「……そこを見込んで、頼みがあるんだ。一時間、いや、三十分でいい、顔を貸してくれ」と言うのと、「……いい話?」と聞くので、「……君に損はかけない」と言うのであった。

二人ならんで歩いてみると、すれ違うひとの十人のうち、八人は、振りかえって、見る。田島を見るのではなく、キヌ子を見るのだ。さすが好男子の田島も、それこそすごいほどのキヌ子の気品に押されて、ゴミっぽく、貧弱に見える。

田島はなじみのヤミの料理屋へキヌ子を案内する。「……ここ、何か、自慢の料理でもあるの?」、「……そうだな、トンカツが自慢らしいよ」、「……いたたくわ。私、おなかが空いているの。それから、何が出来るの?」、「……たいてい出来るだろうけど、いったい、どんなものを食べたいんだい」、「……この自慢のもの。トンカツの他に何かないの?」と聞くので、「……このトンカツは、大きいよ」と言うと、「……ケチねえ。あなたは、だめ。私奥へ行って聞いて来るわ」と言うのであった。

怪力、大食い、これが、しかし、全くのすごい美人なのだ。取り逃がしてはならぬ。田島はウイスキーを飲み、キヌ子のいくらでもいくらでも澄まして食べるのを、すこぶるいまいましい気持でながめながら、彼のいわゆる頼み事について語った。キヌ子は、ただ食べながら、聞いているのか、いないのか、ほとんど彼の物語りには興味を覚えぬ様子であった。「……引受けてくれるね?」と聞くと、「……バカだわ、あなたは。まるでなつてやしないじゃないの」と言うのであった。(本文)

*

*

つまり、女主人公は、驚くほどの怪力と大食いという特徴を持つ女性であり、声は鴉声からすこえで酷いものであるが、びっくりするほどのすごい美人という設定になっているのである。

五、行進 (三) 頼み事の内容 (条件) を説明する

田島は敵の意外の鋭鋒えいほうにたじろぎながらも、「……そうさ、全くなつてやしないから、君にこうして頼むんだ。往生おうじょうしているんだよ」、「……何もそんな、めんどろな事をしなくても、いやになったら、ふつとそれつきりあわなければいいじゃないの」、「……そんな乱暴な事は出来ない。相手の人たちだって、これから、結婚するかも知れないし、また、新しい愛人をつくるかも知れない。相手のひとたちの気持をちゃんときめさせるようにするの、男の責任さ」と言うと、「……ぶ! とんだ責任だ。別れ話だの何だのと言って、またイチャつきたいのでしょうか? ほんとに助平すけへいそうなツラをしている」と言うので、「……おいおい、あまり失敬な事を言ったら怒るぜ。失敬にも程度があるよ。食ってばかりいるじゃないか」、「……キントンが出来ないかしら」、「……まだ、何か食う気かい? 胃拡張とちがうか。病気だぜ、君は。いちど医者に見てもらったらどうだい。さつきから、ずいぶん食ったぜ。もういい加減によせ」と言うと、「……ケチねえ、あなたは。女は、たいてい、これくらい食うの普通だよ。もうたくさん、なんて断っているお嬢さんや何か、あれは、ただ、色気があるから体裁をとりつくるだけなのよ。私なら、いくらでも、食べられるわよ」と言うので、「……いや、もういいだろう。この店は、あまり安くないんだよ。君は、いつも、こんなにたくさん食べるのかね」と聞くと、「……じようだんじゃない。ひとのごちそうになる時だけよ」と言うのであった。

「……それじゃね、これから、いくらでも君に食べさせるから、ぼくの頼み事も聞いてくれ」と言うと、「……でも、私の仕事を休まなければならぬから、損よ」と言うので、「……それは別に支払う。君のれいの商売で、儲けるぶんくらいは、その都度つどきち

んと支払うよ」と言うのと、「……ただ、あなたについて歩いていたら、いいの？」と聞くので、「……まあ、そうだ。ただし、条件が二つある。よその女のひとの前では一言も、ものを言ってくれるな。たのむぜ。笑ったり、うなずいたり、首を振ったり、まあ、せいぜいそれくらいのところにしていただく。もう一つは、ひとの前で、ものを食べない事。ぼくと二人きりになったら、そりや、いくら食べてもかまわないけど、ひとの前では、まづお茶一ぱいくらいのところにしてもらいたい」と言うのと、「……その他、お金もくれるんでしよう？ あなたは、ケチで、ごまかすから」と言うので、「……心配するな。ぼくだって、いま一生懸命なんだ。これが失敗したら、身の破滅さ」、「……フクスイの陣つて、とこね」と言うので、「……フクスイ？ バカ野郎、ハイスイ（背水）の陣だよ」と言うのと、「……あら、そう？」と答えて、けるりとしている。田島は、いよいよ、にがにがしくなるばかり。しかし、美しい。りんとして、この世のものとも思えぬ気品がある。トンカツ。鶏（にわとり）のコロッケ。マグロの刺身（さしみ）。イカの刺身。支那そば。ウナギ。よせなべ。牛の串焼（くしやき）。にぎりずしの盛合せ。海老サラダ。イチゴミルク。その上、キントンを所望とは。まさか女は誰でも、こんなに食うまい。いや、それとも？（と驚くのである。）

* * *

さて、頼み事の内容（条件）は、次のようなものである。つまり、「……それじゃね、これから、いくらでも君に食べさせるから、ぼくの頼み事も聞いてくれ」、「……でも、私の仕事を休まなければならぬから、損よ」、「……それは別に支払う。君のれいの商売で、儲けるぶんくらいは、その都度（つど）きちんと支払うよ」、「……ただ、あなたについて歩いていたら、いいの？」、「……まあ、そうだ。ただし、条件が二つある。よその女のひとの前では一言も、ものを言ってくれるな。たのむぜ。笑ったり、うなずいたり、首を振ったり、まあ、せいぜいそれくらいのところにしていただく。もう一つは、ひとの前で、ものを食べない事。ぼくと二人きりになったら、そりや、いくら食べてもかまわないけど、ひとの前では、まづお茶一ぱいくらいのところにしてもらいたい」というものであった。

六、行進（四）最初は美容師を訪問

キヌ子のアパートは、世田谷方面にあって、朝はれいの、かつぎの商売に出るので、午後二時以後なら、たいていひまだという。田島は、そこへ、一週間にいちどくらい、みな都合のいいような日に、電話をかけて連絡をして、そうしてどこかで落ち合せ、二人そろって別離の相手の女のところへ向って行進することをキヌ子と約す。

そうして、数日後、二人の行進は、日本橋のあるデパート内の美容室に向って開始せられる事になる。——おしやれな田島は、一昨年の冬、ふらりとこの美容室に立ち寄って、パーマメントをしてもらった事がある。その「先生」は、青木さんといって三十歳前後の、いわゆる戦争未亡人である。ひっかけるなどというのではなく、むしろ女のほうから田島について来たような形であった。青木さんは、そのデパートの築地（つくじ）の寮から日本橋のお店にかよっているのであるが、収入は、女ひとりの生活にやっとなるところ。そこで、田島はその生活費の補助をするという事になり、いまでは、築地の寮でも、田島と青木さんとの仲は公認せられている。

けれども、田島は、青木さんの働いている日本橋のお店に顔を出す事はめつたにない。田島の如きあか抜けた好男子の出没は、やはり彼女の営業を妨げるに違いないと、田島自身が考えているのである。——それが、いきなり、すごい美人を連れて、彼女のお店にあらわれる。「……こんちは」というあいさつさえも、よそよそしく、「……きようは女房を連れて来ました。疎開先から、こんど呼び寄せたのです」と言う。それだけで十分。青木さんも、目もと涼しく、肌はだが白くやわらかで、愚かしいところのないかなりの美人ではあったが、キヌ子と並べると、まるで銀の靴くつと兵隊靴ぐんたいくつくらいの差があるように思われた。二人の美人は、無言で挨拶あいさつを交かわした。青木さんは、既に卑屈な泣きべそみたいな顔になっている。もはや、勝敗の数は明あきらかであった。

前にも言ったように、田島は女に対して律儀りちぎな一面も持っていて、いまだ女に、自分が独身だなどとウソをついた事がない。田舎に妻子を疎開させてあるという事は、はじめから皆に打明うちあけてある。それが、いよいよ夫の許もとに帰って来た。しかも、その奥さんたるや、若くて、高貴で、教養のゆたからしい絶世の美人。

さすがの青木さんも、泣きべそ以外、てがなかった。「……女房の髪をね、一つ、いじってやって下さい」と田島は調子に乗り、完全にとどめを刺そうとする。「……銀座にも、どこにも、あなたほどの腕前のひとはないってうわさですからね」と言うのであった。

それは、しかし、あながちお世辞せじでもなかった。事実、すばらしく腕のいい美容師であった。キヌ子は鏡に向って腰をおろす。青木さんは、キヌ子に白い肩掛けを当て、キヌ子の髪をときはじめ、その眼には、涙が、いまにもあふれ出るほど一ぱい。

キヌ子は平然。かえって、田島は席をはずした。(本文)

*

*

さて、最初は、日本橋のあるデパート内の美容室へと向かった。——おしゃれな田島は、一昨年の冬、ふらりとこの美容室に立ち寄って、パーマネットをしてもらった事がある。その「先生」は、青木さんといって三十歳前後の、いわゆる戦争未亡人であり、ひっかけるなどというのではなく、むしろ女のほうから田島について来たような形であり、その彼女の収入は、女ひとりの生活にやっとなるところがあり、そこで、田島はその生活費の補助をするという事になり、いまでは、築地つぎじの寮でも、田島と青木さんとの仲は公認のようになっていた。

けれども、田島は、青木さんの働いている日本橋のお店に顔を出す事はめつたになかった。それは、田島の如きあか抜けた好男子の出没は、やはり彼女の営業を妨げるに違いないと田島自身そう考えていたからである。——それが、いきなり、すごい美人を連れて、彼女のお店にあらわれた。「……こんちは」というあいさつさえも、よそよそしく、「……きようは女房を連れて来ました。疎開先から、こんど呼び寄せたのです」と言う、それだけで十分。青木さんも、目もと涼しく、肌はだが白くやわらかで、愚かしいところのないかなりの美人ではあったが、キヌ子と並べると、まるで銀の靴くつと兵隊靴ぐんたいくつくらいの差があるように思われた。——二人の美人は、無言で挨拶あいさつを交かわしたが、青木さんは、既に卑屈な泣きべそみたいな顔になっている。もはや、勝敗の行方は明あきらかであった。

七、行進(五) 帰り道での二人の会話

セットの終わったころ、田島は、そつとまた美容室にはいつて来て、一寸いっすんくらいの厚さの紙幣のたばを、美容師の白い上衣うわぎのポケットに滑りこませ、ほとんど祈るような気持で、「グッド・バイ」とささやき、その声が自分でも意外に思ったくらい、いたわるような、あやまるような、優しい、哀調に似たものを帯びていた。

キヌ子は無言で立ち上る。青木さんも無言で、キヌ子のスカートなど直してやる。田島は、一足先ひとあしに外に飛び出す。……ああ、別離は、くるしい。キヌ子は無表情で、あとからやって来て、「……そんなに、うまくもないじゃないの」と言うので、「……何が？」と聞くと、「……パーマ」と言うので、バカ野郎！ とキヌ子を怒鳴どなってやりたくなつたが、しかし、デパートの中なので、こらえた。青木という女は、他人の悪口など決して言わなかった。お金もほしがらなかつたし、よく洗濯もしてくれた。「……これで、もう、おしまい？」、「……そう」と、田島は、ただもう、やたらにわびしい。

「……あんな事で、もう、わかれてしまうなんて、あの子も、意気いけじ地がないね。ちよつと、べつぴんさんじゃないか。あのくらいの器量なら……」と言うので、「……やめろ！ あの子だなんて、失敬な呼び方は、よしてくれ。おとなしいひとなんだよ、あのひとは。君なんかとは、違うんだ。とにかく、黙もくっていてくれ。君のその鴉かみすの声みたいなのを聞いていると、気が狂いそうになる」、「……おやおや、おそれいりませぬ。わあ！ 何というゲスな駄じゃれ。全く、田島は気が狂いそう。

田島は妙な虚栄心から、女と一緒に歩く時には、彼の財布さいふを前まへ以もつて女に手渡し、もつぱら女に支払わせて、彼自身はまるで勘定などに無関心のような、おうような態度を装うのである。しかし、いままで、どの女も、彼に無断で勝手な買い物などはしなかつた。

けれども、おそれいりませぬ女史は、平気でそれをやった。デパートには、いくらでも高価なものがある。堂々と、ためらわず、いわゆる高級品を選び出し、しかも、それは不思議なくらい優雅で、趣味のよい品物ばかりである。

「……いい加減に、やめてくれねえかなあ」、「……ケチねえ」、「……これから、また何か、食うんだらう？」、「……そうね、きようは、我慢してあげるわ」、「……財布をかえしてくれ。これからは、五千円以上、使つてはならん」と、いまは、虚栄もクソもあつたものでない。「……そんなには、使わないわ」、「……いや、使つた。あとでぼくが残金を調べてみれば、わかる。一万円以上は、たしかに使つた。こないだの料理だつて安くなかつたんだぜ」、「……そんなら、よしたら、どう？ 私だつて何も、好き好んで、あなたについて歩いているんじゃないわよ」と言うのであつた。

脅迫にちかい。田島は、ため息をつくばかり。(本文)

*

*

さて、田島は、(セットの終わったころ)そつとまた美容室にはいつて来て、一寸いっすん(二三枚)くらいの厚さの紙幣のたばを、美容師の白い上衣うわぎのポケットに滑りこませ、ほとんど祈るような気持で、「グッド・バイ」とささやき、その声が自分でも意外に思ったくらい、いたわるような、あやまるような、優しい、哀調に似たものを帯びていたとある。

つまり、作品の『グッド・バイ』という題名は、人生への決別の「グッド・バイ」ではなくて、むしろ女と別れる時の「グッド・バイ」になつていたのである。

田島は妙な虚栄心から、女と一緒に歩く時には、彼の財布さいふを前まへ以もつて女に手渡し、もつぱら女に支払わせて、彼自身はまるで勘定などに無関心のような、おうような態度を装う

のである。しかし、いままで、どの女も、彼に無断で勝手な買い物などはしなかった。

けれども、おそれいりませぬ女史は、平気でそれをやった。デパートには、いくらでも高価なものがある。堂々と、ためらわず、いわゆる高級品を選び出し、しかも、それは不思議なくらい優雅で、趣味のよい品物ばかりであったとある。つまり、怪力で大食いそれに強欲でもあったということである

八、怪力（一）女性の部屋を訪ねる

しかし、田島だって、もともとただものではないのである。ヤミ商売の手伝いをして、一挙に数十万は楽にもうけるといふ、いわば目から鼻に抜けるほどの才物であった。

キヌ子にさんざんムダ使いされて、黙って海容の美德（大きな度量で人の罪や過ちを許す）を示しているなんて、とてもそんな事の出来る性格ではなかった。何か、それ相当のお返しをいただかなければ、どうしたって、気がすまない。

あんちきしょう！ 生意気だ。ものにしてやれ。——別離の行進は、それから後の事だ。まず、あいつを完全に征服し、あいつを遠慮深く従順で質素で小食の女に変化させ、しかるのちにまた行進を続行する。いまのままだと、とにかく金がかかって、行進の続行が不可能だ。……勝負の秘訣。敵をして近づかしむべからず、敵に近づくべし。

彼は、電話の番号帳により、キヌ子のアパートの所番地を調べ、ウイスキー一本とピエナツを二袋だけ買い求め、腹がへつたらキヌ子に何かおごらせてやろうという下心、そうしてウイスキーをがぶがぶ飲んで、酔いつぶれた振りをして寝てしまえば、あとは、こつちのものだ。だいいち、ひどく安上りである。部屋代も要らない。

女に対して常に自信満々の田島ともあるう者が、こんな乱暴な恥知らずの、エゲツない攻略の仕方を考えつくとは、よっぽど、かれ、どうかしている。あまりに、キヌ子にむだ使いされたので、狂うような気持になっているのかも知れない。色慾のつつしむべきも、さる事ながら、人間あんまり金銭に意地汚くこだわり、モトを取る事ばかりあせっているも、これもまた、結果がどうもよくないようだ。

田島は、キヌ子を憎むあまりに、ほとんど人間ばなれのしたケチな卑しい計画を立て、果して、死ぬほどの大難に逢うに到った。

夕方、田島は、世田谷のキヌ子のアパートを捜し当てた。古い木造の陰気くさい二階建のアパートである。キヌ子の部屋は、階段をのぼってすぐ突当りにあった。

ノックする。「……だれ？」と、中かららしいの鴉声。ドアをあけて、田島はおどろき、立ちすくむ。乱雑。悪臭。ああ、荒涼。四畳半。その畳の表は真黒く光り、波の如く高低があり、縁なんてその痕跡をさえとどめていない。部屋一ぱいに、れいのかつぎの商売道具らしい石油かんやら、りんご箱やら、一升ビンやら、何だか風呂敷に包んだものやら、鳥かごのようなものやら、紙くずやら、ほとんど足の踏み場もないくらいに、ぬらついで散らばっている。「……なんだ、あなたか。なぜ、来たの？」と聞くのであった。

そのまた、キヌ子の服装たるや、数年前に見た時の、あの乞食姿、ドロドロによごれたモンペをはき、まったく、男か女か、わからないような感じ。部屋の壁には、無尽会社の宣伝ポスター、たった一枚、他にはどこを見ても裝飾らしいものがない。カーテンさえない。これが、二十五、六の娘の部屋か。小さい電球が一つ暗くともって、ただ荒涼。（本

文)

さて、主人公の田島は、キヌ子にさんざんムダ使いされて、黙って海容の美德（大きな度量で人の罪や過ちを許す）を示しているなんて、とてもそんな事の出来る性格ではなかった。何か、それ相当のお返しをいただかなければ、どうしたって、気がすまない。

あんちきしょう！ 生意気だ。ものにしてやれ。——別離の行進は、それから後の事だ。まず、あいつを完全に征服し、あいつを遠慮深くて従順で質素で小食の女に変化させ、しかるのちにまた行進を続行する。今のままでは、とにかく金がかかって、行進の続行は不可能だと思ふのであった。

そこで、主人公は、電話の番号帳により、キヌ子のアパートの所番地を調べ、ウイスキー一本とピイナツを二袋だけ買い求め、腹がへたらキヌ子に何かおごらせてやろうという下心、そうしてウイスキーをがぶがぶ飲んで、酔いつぶれた振りをして寝てしまえば、あとは、こつちのものだ。だいいち、ひどく安上りである。部屋代も要らない。

そこで、夕方、世田谷のキヌ子のアパートを捜し当てるが、それは、古い木造の陰気くさい二階建のアパートであり、キヌ子の部屋は、階段をのぼってすぐ突当りにあった。

ノックすると、「……だれ？」と、中かららしいの鴉声。ドアをあけて、田島はおどろき、立ちすくむ。乱雑。悪臭。ああ、荒涼。四畳半。……部屋一ぱいに、れいのかつぎの商売道具らしい石油かんやら、りんご箱やら、一升ビンやら、何だか風呂敷に包んだものやら、鳥かごのようなものやら、紙くずやら、ほとんど足の踏み場もないくらいに、ぬらついで散らばっている。「……なんだ、あなたか。なぜ、来たの？」と聞くのであった。

そのまた、キヌ子の服装たるや、数年前に見た時の、あの乞食姿、ドロドロによごれたモンペをはき、まったく、男か女か、わからないような感じ。部屋の壁には、無尽会社の宣伝ポスター、たった一枚、他にはどこを見ても装飾らしいものがない。カーテンさえない。これが、二十五、六の娘の部屋か。小さい電球が一つ暗くともって、ただ荒涼であったとある。（この驚くほど汚い部屋も、当然、終戦直後≒三年目≒のヤミ市が立つ混乱期、綺麗な身なりや綺麗な金目の物がある部屋などに住んでいたら、若い女一人、何時「空き巣、強盗、強姦、その他」などに襲われるかも分からないのである。）

九、怪力（二）彼女の部屋での二人の会話

「……あそびに来ただけだね、」と田島は、むしろ恐怖におそわれ、キヌ子同様の鴉声になり、「……でも、また出直して来てもいいんだよ」と言う。「……何か、こんたがあるんだわ。むだには歩かないひとなんだから」、「……いや、きょうは、本当に……」、「……もっと、さっぱりなさいよ。あなた、少しニヤケ過ぎてよ」と言うのであった。

それにしても、ひどい部屋だ。ここで、あのウイスキーを飲まなければならぬのか。ああ、もっと安いウイスキーを買って来るべきであった。「……ニヤケているんじゃない。キレイというものなんだ。君は、きょうはまた、きたな過ぎるじゃないか」とにがり切つて言った。「……きょうはね、ちよつと重いものを背負ったから、少し疲れて、いままで昼寝をしていたの。ああ、そう、いいものがある。お部屋へあがったらどう？ 割に安いよ」と言うのであった。

どうやら商売の話らしい。もうけ口なら、部屋の汚なさなど問題でない。田島は、靴を脱ぎ、畳の比較的無難なところを選んで、外套がいとうのままあぐらをかいて坐る。「……あなた、カラスミなんか、好きでしょう？ 酒飲みだから」、「……大好物だ。ここにあるのかい？ ごちそうになるう」、「……冗談じゃない。お出しなさい」とキヌ子は、おくめんもなく、右の手のひらを田島の鼻先に突き出す。田島は、うんざりしたように口をゆがめて、「……君のする事なす事を見ていると、まったく、人生がはかなくなるよ。その手は、ひっこめてくれ。カラスミなんて、要らねえや。あれは、馬が食うもんだ」と言うと、「……安くしてあげるつたら、ばかねえ。おいしいのよ、本場ものだから。じたばたしないで、お出し」と、からだをゆすって、手のひらを引込めそうもない。

不幸にして、田島は、カラスミが実に全く大好物、ウイスキーのさかかなに、あれがあると、もう何も要らん。「……少し、もらおうか」と、田島はいまいましたように、キヌ子の手のひらに、大きい紙幣を三枚、載せてやる。「……もう四枚」と、キヌ子は平然という。田島はおどろき、「……バカ野郎、いい加減にしろ」と言うと、「……ケチねえ、一ハラ気前よく買いなさい。鯉節かつおぶしを半分に切って買うみたい。ケチねえ」と言うので、「……よし、一ハラ買う」と言う。さすが、ニヤケ男の田島も、ここに到って、しんから怒り、「……そら、一枚、二枚、三枚、四枚。これでいいだろう。手をひっこめる。君みたいな恥知らずを産んだ親の顔が見たいや」と言うと、「……私も見たいわ。そうして、ぶってやりたいわ。捨てりや、ネギでも、しおれて枯れる、つてき」と言うので、「……なんだ、身の上話つまらん。コップを借してくれ。これから、ウイスキーとカラスミだ。うん、ピイナツもある。これは、君にあげる」と言うのであった。(本文)

*

*

さて、田島は、「……あそびに来ただけだね」と、むしろ恐怖に襲おそわれ、キヌ子同様の鴉声からすこゑになり、「……でも、また出直して来てもいいんだよ」と言うと、「……何か、こんなところがあるんだわ。むだには歩かないひとなんだから」、「……いや、きょうは、本当に……」、「……もつと、さっぱりなさいよ。あなた、少しニヤケ過ぎてよ」と言うのであった。——それにしても、ひどい部屋だ。ここで、あのウイスキーを飲まなければならぬのか。ああ、もつと安いウイスキーを買って来るべきであった。「……ニヤケているんじゃない。キレイというものなんだ。君は、きょうはまた、きたな過ぎるじゃないか」とにがり切つて言う。「……きょうはね、ちよつと重いものを背負つたから、少し疲れて、いままで昼寝をしていたの。ああ、そう、いいものがある。お部屋へあがつたらどう？ 割に安いのよ」と言うのであった。

どうやら商売の話らしい。もうけ口なら、部屋の汚なさなど問題でない。田島は、靴を脱ぎ、畳の比較的無難なところを選んで、外套がいとうのままあぐらをかいて坐る。「……あなた、カラスミなんか、好きでしょう？ 酒飲みだから」、「……大好物だ。ここにあるのかい、ごちそうになるう」、「……冗談じゃない。お出しなさい」とキヌ子は、おくめんもなく、右の手のひらを田島の鼻先に突き出す。——不幸にして、田島は、カラスミが実に全く大好物、ウイスキーのさかかなに、あれがあると、もう何も要らん。「……少し、もらおうか」と、田島はいまいましたように、キヌ子の手のひらに、大きい紙幣を三枚、載せてやる。「……もう四枚」と、キヌ子は平然という。田島は驚き、「……バカ野郎、いい加減にしろ」と言うと、「……ケチねえ、一ハラ気前よく買いなさい。鯉節かつおぶしを半分に切って買うみ

たい。ケチねえ」と言うので、「……よし、一ハラ買う」と言うが、さすが、ニヤケ男の田島も、ここに到って、しんから怒り、「……君みたいな恥知らずを産んだ親の顔が見たいや」と言うと、「……私も見たいわ。そうして、ぶってやりたいわ。捨てりや、ネギでも、しおれて枯れる、つてき」と言うので、「……なんだ、身の上話はつまらん。コップを借してくれ。これから、ウイスキーとカラスミだ。うん、ピイナツもある。これは、君にあげる」と言うのであった。

さて、ここに彼女の身の上話が少し出てくるが、話の進行とともに、次第に明るみになるという手法なのかも知れない。例えば、乞食のような汚らしい恰好や部屋に住んでいるのも、結局、男性その他などから身を守るための手段にもなっているのだろう。というのも、びっくりするような美人であれば、それこそ、すぐにも襲われてしまうだろう。：

十、怪力(三) 高いカラスミを買わされる

田島は、ウイスキーを大きいコップで、ぐい、ぐい、と二挙動で飲みます。きょうこそは、何とかしてキヌ子におごらせてやろうという下心で来たのに、逆にいわゆる「本場もの」のおそろしく高いカラスミを買わされ、しかも、キヌ子は惜しげもなくその一ハラのカラスミを全部、あつと思うまもなくざくざく切ってしまったて汚いドンブリに山盛りにして、それに代用味の素をどっさり振りかけ、「……召し上れ。味の素は、サーヴィスよ。気にしなくていいわよ」と言う。

カラスミ、こんなにたくさん、とても食べられるものでない。それにまた、味の素を振りかけるとは滅茶苦茶だ。田島は悲痛な顔つきになる。七枚の紙幣をろうそくの火でもやしたって、これほど痛烈な損失感を覚えないだろう。実に、ムダだ。意味無い。

山盛りの底のほうの、代用味の素の振りかかっていない一片のカラスミを、田島は、泣きたいような気持で、つまみ上げて食べながら、「……君は、自分でお料理した事ある？」と今は、おっかなびっくりで尋ねる。「……やれば出来るわよ。めんどうくさいからしなだけで」と言う。「……お洗濯は？」と聞くと、「……バカにしないでよ。私は、どつちかと言えは、きれいすぎなほうだわ」と言うので、「……きれいすぎ？」と、田島はぼう然と、荒涼、悪臭の部屋を見廻す。「……この部屋は、もとから汚くて、手がつけられないのよ。それに私の商売が商売だから、どうしたって、部屋の中がちらかってね。見せましょうか、押入れの中を」と、立って押入れを、さつとあけて見せる。

田島は眼をみはる。清潔、整然、金色の光を放ち、ふくいくたる香気が発するくらい。タンス、鏡台、トランク、下駄箱の上には、可憐に小さい靴が三足、つまりその押入れこそ、鴉声のシンデレラ姫の、秘密の楽屋であったわけである。

すぐにまた、ぴしゃりと押入れをしめて、キヌ子は、田島から少し離れて居汚く坐り、「……おしゃれなんか、一週間にいちどくらいでたくさん。べつに男に好かれようとも思わないし、ふだん着は、これくらいで、ちょうどいいのよ」と言うので、「……でも、そのモンペは、ひどすぎるんじゃないか？ 非衛生的だ」と言うと、「……なぜ？」と聞くので、「……くさい」と言うと、「……上品ぶったって、ダメよ。あなただって、いつも酒くさいじゃないの。いやな、におい」と言うので、「……くさい仲、というものさね」

と言うのであった。

酔うにつれて、荒涼たる部屋の有様も、またキヌ子の乞食こじきの如き姿も、あまり気にならなくなり、ひとつこれは、当初のあのプランを実行して見ようかという悪心がむらむら起る。「……ケンカするほど深い仲つてね」とはまた、下手へたな口説くどきよう。しかし、男は、こんな場合、たとい大人物、大学者と言われているほどのひとでも、かくの如きアホーらしい口説くどき方をして、しかも案外に成功しているものである。(本文)

*

*

さて、田島は、ウイスキーを大きいコップで、ぐい、ぐい、と二挙動で飲みほす。きょうこそは、何とかしてキヌ子におごらせてやろうという下心で来たのに、逆にいわゆる「本場もの」の恐ろしく高いカラスミを買わされ、しかもそのカラスミに味の素を振りかけるとは滅茶めぢやくちや苦茶くちやであり、田島は悲痛な顔つきになったとある。

そして、「……君は、自分でお料理した事ある？」と今は、おっかなびつくりで尋ねると、「……やれば出来るわよ。めんどろくさいからしないで」と言う。「……お洗濯は？」と聞くと、「……バカにしないでよ。私は、どつちかと言えば、きれいすぎなほうだわ」と言うので、「……きれいすぎ？」と、田島はぼう然と、荒涼、悪臭の部屋を見廻す。「……この部屋は、もとから汚くて、手がつけれられないのよ。それに私の商売が商売だから、どうしたって、部屋の中がちらかってね。見せましようか、押入れの中を」と、立って押入れを、さつとあけて見せるのであった。

田島は眼をみはる。清潔、整然、金色の光を放ち、ふくいくたる香気かうきが発するくらい。タンス、鏡台、トランク、下駄箱げたばこの上には、可憐かれんに小さい靴が三足、つまりその押入れこそ、鴉声からすこゑのシンデレラ姫の、秘密の楽屋であったわけである。(ここにこそ、彼女の本来の「姿」が現われているのかも知れない。……)

すぐにまた、ぴしやりと押入れをしめて、キヌ子は、田島から少し離れて居汚く坐り、「……おしやれなんか、一週間にいちどくらいでたくさん。べつに男に好かれようとも思わないし、ふだん着は、これくらいで、ちょうどいいのよ」と言うので、「……でも、そのモンペは、ひどすぎるんじゃないか？ 非衛生的だ」と言うと、「……なぜ？」と聞くので、「……くさい」と言うと、「……上品ぶったって、ダメよ。あなただって、いつも酒くさいじゃないの。いやな、におい」と言うので、「……くさい仲、というものさね」と田島は言い、そして、酔うにつれて、ひとつこれは、当初のあのプランを実行して見ようかという悪心がむらむら起き上がるのであった。

十一、怪力(四)抱きつ、こうとして怪力で殴られる

「……ピアノが聞えるね」と、彼は、いよいよキザになる。眼を細めて、遠くのラジオに耳を傾ける。「……あなたにも音楽がわかるの？ 音痴おんちみたいな顔をしているけど」と言うので、「……ばか、僕の音楽通を知らんな、君は。名曲ならば、一日一ぱいでも聞いていたい」と言うと、「……あの曲は、何？」と言うので、「……シヨパン」とでたらめを言う。「……へえ？ 私は越後獅子えちごじしかと思った」と言うのである。

音痴同志のトンチンカンな会話。どうも、気持が浮き立たぬので、田島は、すばやく話頭を転ずる。「……君も、しかし、いままで誰かと恋愛した事は、あるだろうね」と聞く

と、「……ばからしい。あなたみたいな淫乱いんらんじゃありませんよ」と言うので、「……言葉をつつしんだら、どうだい。ゲスなやつだ」と言うのであった。

急に不快になって、さらにウイスキーをがぶりと飲む。こりや、もう駄目だめかも知れない。しかし、ここで敗退しては、色男としての名誉にかかわる。どうしても、ねばって成功しなければならぬ。「……恋愛と淫乱いんらんとは、根本的にちがいますよ。君は、なんにも知らんらしいね。教えてあげましょうかね」と、自分で言っただけで、自分でそのいやらしい口調に寒気さむけを覚えた。これは、いかん。少し時刻が早いけど、もう酔いつぶれた振りをして寝てしまおう。「……ああ、酔った。すきつばらに飲んだので、ひどく酔った。ちよつとここへ寝かせてもらおうか」と言うと、「……だめよ！」と、鴉声からすこえが蛮声ばんせいに変わった。

「……ばかにしないで！ 見えすいていますよ。泊りたかったら、五十万、いや百万円お出し」と、すべて、失敗である。「……何も、君、そんなに怒る事は無いじゃないか。酔ったから、ここへ、ちよつと……」と言うと、「……だめ、だめ、お帰り」と言い、キヌ子は立って、ドアを開け放す。

田島は窮して、最もぶざまで拙劣な手段、立っていきなりキヌ子に抱きつこうとした。グワンと、こぶしで頬ほおを殴なぐられ、田島は、ぎゃつという甚はなはだ奇怪な悲鳴を挙げた。その瞬間、田島は、十貫を楽々とかつぐキヌ子のあの怪力を思い出し、慄然りつぜんとして、「……ゆるしてくれえ。どろぼう！」とわけのわからぬ事を叫んで、はだしで廊下に飛び出した。

キヌ子は落ちついて、ドアをしめる。しばらくして、ドアの外で、「……あう、僕の靴を、すまないけど。……それから、ひものようなものがありましたら、お願いします。眼鏡のツルがこわれましたから」と言うのであった。

色男としての歴史において、かつてなかった大屈辱にはわたの煮えくりかえるのを覚えて、彼はキヌ子から恵まれた赤いテープで、眼鏡をつくろい、その赤いテープを両耳にかけ、「……ありがとう！」と、ヤケみたいにわめいて、階段を降り、途中、階段を踏みはずして、また、ぎゃつと言った。(本文)

*

*

さて、主人公の田島は、「……君も、しかし、いままで誰かと恋愛した事は、あるだろうね」と聞くと、「……ばからしい。あなたみたいな淫乱いんらんじゃありませんよ」と言うので、「……言葉をつつしんだら、どうだい。ゲスなやつだ」と言うのであった。

急に不快になって、さらにウイスキーをがぶりと飲む。こりや、もう駄目だめかも知れない。しかし、どうしても、ねばって成功しなければならぬ。「……恋愛と淫乱いんらんとは、根本的にちがいますよ。君は、なんにも知らんらしいね。教えてあげましょうかね」と、自分で言っただけで、自分でそのいやらしい口調に寒気さむけを覚えた。これは、いかん。少し時刻が早いけど、もう酔いつぶれた振りをして寝てしまおう。「……ああ、酔った。すきつばらに飲んだので、ひどく酔った。ちよつとここへ寝かせてもらおうか」と言うと、「……だめよ！」と、鴉声からすこえが蛮声ばんせいに変わった。

「……ばかにしないで！ 見えすいていますよ。泊りたかったら、五十万、いや百万円お出し」と、すべて、失敗である。「……何も、君、そんなに怒る事は無いじゃないか。酔ったから、ここへ、ちよつと……」と言うと、「……だめ、だめ、お帰り」と言い、キヌ子は立って、ドアを開け放す。

田島は窮して、最もぶざまで拙劣な手段、立っていきなりキヌ子に抱きつこうとした。

グワンと、こぶしで頬を殴られ、田島は、ぎゃつという甚だ奇怪な悲鳴を挙げた。その瞬間、田島は、十貫を楽々とかつぐキヌ子のあの怪力を思い出し、慄然として、「……ゆるしてくれえ。どろぼう！」とわけのわからぬ事を叫んで、はだして廊下に飛び出した。キヌ子は落ちついて、ドアをしめる。しばらくして、ドアの外で、「……あのう、僕の靴を、すまないけど。……それから、ひものようなものがありましたら、お願いします。眼鏡のツルがこわれましたから」と言うのであった。（ここで彼女の怪力が実証されたことになり、次の展開へと繋がっていくのである。）

十二、コールド・ウォー（一）再び彼女に電話する

田島は、しかし、永井キヌ子に投じた資本が、惜しくてならぬ。こんな、割の合わない商売をした事がない。何とかして、彼女を利用し活用し、モトをとらなければ、ウソだ。しかし、あの怪力、あの大食い、あの強慾。

あたたかになり、さまざまの花が咲きはじめてが、田島ひとりには、頗る憂鬱。あの大失敗の夜から、四、五日経ち、眼鏡も新調し、頬のはれも引いてから、彼は、とにかくキヌ子のアパートに電話をかけた。ひとつ、思想戦に訴えて見ようと考えたのである。「……もし、もし。田島ですがね、こないだは、酔っぱらいすぎて、あはははは」と言う。「……女がひとりしているとね、いろんな事があるわ。気にしてやしません」と言うので、「……いや、僕もあれからいろいろ深く考えましたがね、結局、ですね、僕が女たちと別れて、小さい家を買って、田舎から妻子を呼び寄せ、幸福な家庭をつくる、という事ですね、これは、道徳上、悪い事でしょうか」と聞くと、「……あなたの言う事、何だか、わけがわからないけど、男のひとは誰でも、お金が、うんとたまると、そんなケチくさい事を考えるようになるらしいわ」と言うのであった。

「……それが、だから、悪い事でしょうか」と聞くと、「……けっこうな事じゃないの。どうも、よっぽどあなたは、ためたな？」と言うので、「……お金の事ばかり言っていないで、……道徳のね、つまり、思想上のね、その問題なんですがね、君はどう考えますか？」と聞くと、「……何も考えないわ。あなたの事なんか」と言う。「……それは、まあ、無論そういうものですが、僕はね、これはね、いい事だと思っんです」と言う。「……そんなら、それで、いいじゃないの？ 電話を切るわよ。そんな無駄話は、いや」と言う。「……しかし、僕にとつては、本当に死活の大問題なんです。僕は、道徳は、やはり重んじなければならぬ、と思っっているんです。たすけて下さい、僕を、たすけて下さい。僕は、いい事をしたんです」と言う。「……へんねえ。また酔った振りなんかして、ばかな真似をしようとしているんじゃないでしょうね。あれは、ごめんですよ」と言うので、「……からかっちゃいけません。人間には皆、善事を行おうとする本能がある」と言う。「……電話を切ってもいいんでしょう？ 他にもう用なんか無いんでしょう？ さつきから、おしっこが出なくて、足踏みしているのよ」と言うので、「……ちよつと待って下さい、ちよつと。一日、三千元でどうです」と、思想戦にわかに変じて金の話になった。「……ごちそうが、つくの？」と聞くので、「……いや、そこを、たすけて下さい。僕もこの頃どうも収入が少なくてね」と言うので、「……一本（一万円）でなくちゃ、いや」と言うので、「……それじゃ、五千元。そうして下さい。これは、道徳の問題ですからね」

と言うと、「……おしっこが出たいのよ。もう、かんにんして」と言うので、「……五千円で、たのみます」と言うと、「……ばかねえ、あなたは」とくつくつ笑う声が聞える。承知の気配だ(本文)

*

*

さて、主人公の田島は、永井キヌ子に投じた資本が、惜しくてならぬ。こんな、割の合わない商売をした事がない。何とかして、彼女を利用し活用し、モトをとらなければ、ウソだ。しかし、あの怪力、あの大食い、あの強慾。

そこで、あの大失敗の夜から、四、五日経ち、眼鏡も新調し、頬のはれも引いてから、彼は、とにかくキヌ子のアパートに電話をかけたが、ひとつ、思想戦に訴えて見ようと考えたのである。「……もし、もし。田島ですがね、こないだは、酔っぱらいすぎて、あははは」と言うと、「……女がひとりでいるとね、いろんな事があるわ。気にしてやしません」と言うので、「……いや、僕もあれからいろいろ深く考えましたがね、結局、ですね、僕が女たちと別れて、小さい家を買って、田舎から妻子を呼び寄せ、幸福な家庭をつくる、という事ですね、これは、道徳上、悪い事でしょうか」と聞く。(中略)

そして、「……しかし、僕にとつては、本当に死活の大問題なんです。僕は、道徳は、やはり重んじなけりゃならん、と思っっているんです。たすけて下さい、僕を、たすけて下さい。僕は、いい事をしたいんです」と言うと、「……へんねえ。また酔った振りなんかして、ばかな真似をしようとしているんじゃないでしょうね。あれは、ごめんですよ」と言うので、「……からかっちゃいけません。人間には皆、善事を行おうとする本能がある」と言う。「……電話を切ってもいいんでしよう？ 他にもう用なんか無いんでしよう？ さつきから、おしっこが出たくて、足踏みしているのよ」と言うので、「……ちよつと待って下さい、ちよつと。一日、三千円でどうです」と言うと、「……ちよつと、つくの？」と聞くので、「……いや、そこを、たすけて下さい。僕もこの頃どうも収入が少なくてね」と言うので、「……(指)一本(二万円)でなくちゃ、いや」と言うので、「……それじゃ、五千円。そうして下さい。これは、道徳の問題ですからね」と言うと、「……おしっこが出たいのよ。もう、かんにんして」と言うので、「……五千円で、たのみます」と言うのと、「……ばかねえ、あなたは」とくつくつ笑う声が聞える。承知の気配である。(この「……ばかねえ、あなたは」とくつくつ笑う声が聞えた」というのは、「……女と別れるのに、こんな回りくどいことをして」と、「……彼女に完全に足下を見られている」ということで、「……ばかねえ、あなたは」ということになるのである。)

十三、コールド・ウォー(二) 次は洋画家の女性

こうなったら、とにかく、キヌ子を最大限に利用し活用し、一日五千円を与える他は、パン一かけら、水一ぱいも饗応せず、思い切り酷使しなければ、損だ。温情は大の禁物、わが身の破滅。——キヌ子に殴られ、ぎゃつという奇妙な悲鳴を挙げて、田島は、しかし、そのキヌ子の怪力を逆に利用する術を発見した。

彼のいわゆる愛人たちの中のひとりに、水原ケイ子という、まだ三十前の、あまり上手でない洋画家がいた。田園調布のアパートの二部屋を借りて、一つは居間、一つはアトリエに使っていて、田島は、その水原さんが或る画家の紹介状を持って、「オベリスク」に、

さし画でもカットでも何でも描かせてほしいと顔を赤らめ、おどおどしながら申し出たのを可愛く思い、わずかずつ彼女の生計を助けてやる事にしたのである。物腰がやわらかで、無口で、そうして、ひどい泣き虫の女であった。けれども、吠え狂うような、はしたない泣き方などは決してしない。童女のような可憐な泣き方なので、まんざらでない。

しかし、たった一つ非常な難点があった。彼女には、兄があった。永く満洲で軍隊生活をして、小さい時からの乱暴者の由で、骨組もなかなか頑丈の大男らしく、彼は、はじめてその話をケイ子から聞かされた時には、実に、いやあな気持がした。どうも、この、恋人の兄の軍曹とか伍長とかいうものは、ファウストの昔から、色男にとつて甚だ不吉な存在だという事になっている。

その兄が、最近、シベリヤ方面から引揚げて来て、そうして、ケイ子の居間に、頑張っているらしいのである。——田島は、その兄と顔を合せるのがイヤなので、ケイ子をどこかへ引っぱり出そうとして、そのアパートに電話をかけたなら、いけない、「……自分は、ケイ子の兄であります」という、いかにも力のありそうな男の強い声。はたして、いたのだ。「……雑誌社のものですけど、水原先生に、ちよつと、画の相談」と、語尾が震えている。「……ダメです。風邪をひいて寝ています。仕事は、当分ダメでしょう」と言うのであった。……運が悪い。ケイ子を引っぱり出す事は、まず不可能らしい。

しかし、ただ兄をこわがって、いつまでもケイ子との別離をためらっているのは、ケイ子に対しても失礼みたいなものだ。それに、ケイ子が風邪で寝ていて、おまけに引揚者の兄が寄宿しているのでは、お金にも、きつと不自由しているだろう。かえって、いまは、チャンスというものかも知れない。病人に優しい見舞いの言葉をかけ、そうしてお金をそつと差し出す。兵隊の兄も、まさか殴りやしないだろう。或いは、ケイ子以上に、感激し握手など求めるかも知れない。もし万一、自分に乱暴を働くようだったら、……その時こそ、永井キヌ子の怪力のかげに隠れるといい。

まさに百パーセントの利用、活用である。「……いいかい？ たぶん大丈夫だと思っけどね、そこに乱暴な男がひとりいてね、もしそいつが腕を振り上げたら、君は軽くこう、取りおさえて下さい。なあに、弱いやつらしいんですがね」と、彼は、めっきりキヌ子に、ていねいな言葉でものを言うようになっていた。(未完)

*

*

さて、主人公の田島は、こうなったら、とにかく、キヌ子を最大限に利用し活用し、一日五千円を与える他は、パン一かけら、水一ぱいも饗応せず、思い切り酷使しなければ、損だと想うのであった。

彼のいわゆる愛人たちのひとりに、水原ケイ子という、まだ三十前の、あまり上手でない洋画家がいた。田園調布のアパートの二部屋を借りて、一つは居間、一つはアトリエに使っていて、田島は、その水原さんが或る画家の紹介状を持って、「オベリスク」に、さし画でもカットでも何でも描かせてほしいと顔を赤らめ、おどおどしながら申し出たのを可愛く思い、わずかずつ彼女の生計を助けてやる事にしたのである。物腰がやわらかで、無口で、そうして、ひどい泣き虫の女であった。けれども、吠え狂うような、はしたない泣き方などは決してしない。童女のような可憐な泣き方なので、まんざらでない。

しかし、たった一つ非常な難点があった。彼女には、兄があった。永く満洲で軍隊生活をして、小さい時からの乱暴者の由で、骨組もなかなか頑丈の大男らしく、彼は、はじ

めてその話をケイ子から聞かされた時には、実に、いやあな気持がした。

この恋人の兄の軍曹とか伍長とかいいう人は、最近、シベリヤ方面から引揚げて来て、そうして、ケイ子の居間に、頑張っているらしく、——田島は、その兄と顔を合せるのがイヤなので、ケイ子をどこかへ引っぱり出そうとして、そのアパートに電話をかけたなら、「……自分は、ケイ子の兄であります」という、いかにも力のありそうな男の強い声。はたして、いたのである。「……雑誌社のものですけど、水原先生に、ちよつと、画の相談」と、語尾が震えている。「……ダメです。風邪をひいて寝ています。仕事は、当分ダメでしょう」と言う。……運が悪い。ケイ子を引っぱり出す事は、まず不可能らしい。

しかし、ただ兄をこわがって、いつまでもケイ子との別離をためらっているのは、ケイ子に対しても失礼みたいなものだ。それに、ケイ子が風邪で寝ていて、おまけに引揚者の兄が寄宿しているのでは、お金にも、きつと不自由しているだろう。かえって、いまは、チャンスというものかも知れない。病人に優しい見舞いの言葉をかけ、そうしてお金をそつと差し出す。兵隊の兄も、まさか殴りやしないだろう。或いは、ケイ子以上に、感激し握手など求めるかも知れない。もし万一、自分に乱暴を働くようだったら、……その時こそ、永井キヌ子の怪力のかげに隠れるといい。

まさに百パーセントの利用、活用である。「……いいかい？ たぶん大丈夫だと思っただね、そこに乱暴な男がひとりいてね、もしそいつが腕を振り上げたら、君は軽くこう、取りおさえて下さい。なあに、弱いやつらしいんですがね」と、彼は、めつきりキヌ子に、ていねいな言葉でものを言うようになっていた。

* *

さて、この後、どのような展開になっていくのか？ 作者（太宰）自身は、朝日新聞に八十回の連載を予定しており、最後には、自分の妻に逆に「グッド・バイ」されてしまふとい構想になっていたようですが、しかし、その時はそう思っている、実際に書き進んで行くうちには、最初の構想とは違った思いがけない方向へと進んでしまう場合も多く、それゆえ、作者（太宰治）自身にもよく分かっていなかったかも知れない。しかし、これがともかく「最後の作品」であり、この時には、すでに自殺を考えていたはずであるが、それにしても軽いタッチの作品になっている。これは、一体、何故なのかと敢えて問えば、それは、次のようなことではないかと思う。つまり、太宰治という人は、恐らく、自分の人生の総括として『人間失格』という作品を自殺する一ヶ月前までに書き上げている。（これだけは何か何でも完成させねばならないと）そこに全精力を注いでいたと考えてもよく、その後の作品であり、それゆえ、いわば「肩の荷」も少しは下りていたのかも知れない。

つまり、太宰治が玉川上水に無理心中を遂行するのは、昭和二十三年（一九四八年）の六月十三日の夜半である。この年の一月月上旬、肺結核が悪化し咯血している。その後、しばしば咯血している。三月には、「新潮」に連載随想「如是我聞」を発表。また、熱海市の起雲閣別館にこもり「人間失格」を執筆する。五月に、「新潮」に「桜桃」を発表。大宮で「人間失格」を脱稿（原稿を書き終える）。そのあと、「朝日新聞」の連載小説「グッド・バイ」の執筆を始める。これは、朝日新聞社との契約（約束）を果たしたということになるのだろう。そして、六月十三日夜半、山崎富栄と「赤い糸」でからだを縛りつけ、玉川上水に入水し、遺体は、十九日早朝に発見されている。……

もちろん、太宰治の「頭の中」（或いは「心の中」）では、一体、どのような「思いや

考え」などがあつたかは誰にも分かりようもないが、ただ「自殺」（ここで自分の人生を終わらせる）と決心したとすれば、恐らく、太宰治の「頭の中」（或いは「心の中」）では、恐らく、「……自分の書きたいこと言いたいことは、ほど書き尽くしたという思いがあつた」かも知れない。そして、太宰治の最晩年の「心境」をよくあらわしているものに、例えば、最晩年の『如是我聞』という作品があり、その中で次のように書いている。

つまり、「……自分は、この十年間、腹が立っても、抑えに抑えていたことを、これから毎月、この雑誌（新潮）に、どんなに人からそのために、不愉快がられても、書いて行かなければならぬ。そのような、自分の意思によらぬ『時期』（死期）がよいよ来たよ」なので、（中略）、自分の抗議を書いてみるつもりなのである」と。

例えば、或る「老大家」は、私の作品をとぼけていていやだといっているとか、また、或る「文豪」は、太宰は、東京の言葉を知らぬ、と言っているとか、また、志賀直哉という人は、二、三日前に太宰君の『犯人』とかいうのを読んだけれども、実につまらないと思つたね。とか、太宰は気違ひになつたか、その他、実にいろいろな人たちから実にいろいろな「批判や非難」などを浴びているのであり、それが、まさに富栄の日記の「みんな、いじめ殺すのです」という「言葉の真意」であり、それらに対して、今度は、太宰治自身が、その『如是我聞』のなかで、志賀直哉やその他の人たちを批判するような文章を書いたら、自分のこれまで付き合っていた先輩友人たちと、全部、気まずくなつてしまつたのであり、その一人に「井伏鱒二」もいて、その「井伏鱒二」から、まさに「志賀直哉やその他の人たちを批判するような文章を書くのはヤメロ」と言われているのであり、それに対するいわば「返答」が、まさに「執筆メモ」というものになるのである。

そして、太宰治の公表されている三つの「遺書」（これこれ太宰治の最後の言葉）であるが、それは、次のようなものである。一つは、「……美知様、誰よりもお前を愛していました」と、毛筆で書いた自筆の手紙であり、一つは、太宰治の「妻宛の遺書」の二つ目の抜粋の前に、次の「未公開部分」であり、それは、「……（太田という女あり、なんにも金銭の約束なし。山崎という女あり、仕事の上にも病気の上でも世話になりたり）」という文章があるという。それは、まさに「未公開」で確かめようがない。そして、二つ目の公開抜粋文章は、前文に続くものであり、「……長居するだけみんなを苦しめこちらも苦しい、堪忍して下されたく」というものである。そして、三つ目の抜粋は、「……皆、子供はあまり出来ないようですけど陽気に育てて下さい。あなたが嫌いになつたから死ぬのでは無いのです。小説を書くのがいやになつたからです。みんな、いやらしい欲張りばかり。井伏さんは悪人です。……」となるのである。（完）

*

*

五、駁込み訴え

駈込み訴え

一、なぜイエスを裏切ったか

申し上げます。申し上げます。旦那さま。あの人は、酷い。酷い。はい。厭な奴です。悪い人です。ああ。我慢ならない。生かして置けねえ。

はい、はい。落ちついて申し上げます。あの人を、生かして置いてはなりません。世の中の仇です。はい、何もかも、すっかり、全部、申し上げます。私は、あの人を居所を知っています。すぐに御案内申します。ずたずたに切りさいなんで、殺して下さい。あの人は、私の師です。主です。けれども私と同じ年です。三十四であります。私は、あの人よりたった二月おそく生れただけなのです。たいした違いが無い筈だ。人と人との間に、そんなにひどい差別は無い筈だ。それなのに私はきよう迄あの人に、どれほど意地悪くこき使われて来たことか。どんなに嘲弄されて来たことか。ああ、もう、いやだ。堪えられないところ迄は、堪えて来たのだ。怒る時に怒らなければ、人間の甲斐がありません。私は今まであの人を、どんなにこっそり庇ってあげたか。誰も、ご存じ無いです。あの人ご自身だって、それに気がついていないのだ。いや、あの方は知っているのだ。ちゃんと知っています。知っているからこそ、尚更あの方は私を意地悪く軽蔑するのだ。あの方は傲慢だ。私から大きに世話を受けているので、それがご自身に口惜しいのだ。あの方は、阿呆なくらいに自惚れ屋だ。私などから世話を受けている、ということ、何かご自身の、ひどい引目でもあるかのように思い込んでいなさるのです。あの方は、なんでもご自身で出来るかのように、ひとから見られたくてたまらないのだ。ばかな話だ。世の中はそんなものじゃ無いんだ。この世に暮して行くからには、どうしても誰かに、ぺこ。こ頭を下げなければいけないのだし、そうして一步一步、苦勞して人を抑えてゆくより他に仕様が無いのだ。あの人に一体、何が出来ましょう。なんにも出来やしないのです。私から見れば青二才だ。私もし居らなかつたらあの方は、もう、とうの昔、あの無能でとんまの弟子たちと、どこかの野原でのたれ死していたに違いない。

「……狐には穴あり、鳥には罅、されども人の子には枕するところ無し」、それ、それ、それだ。ちゃんと白状していやがるのだ。ペテロに何が出来ますか。ヤコブ、ヨハネ、アンデレ、トマス、痴の集り、ぞろぞろあの人について歩いて、脊筋が寒くなるような、甘ったるいお世辞を申し、天国だなんて馬鹿げたことを夢中で信じて熱狂し、その天国が近づいたなら、あいつらみんな右大臣、左大臣にでもなるつもりなのか、馬鹿な奴らだ。その日のパンにも困っていて、私がやりくりしてあげないことには、みんな飢え死してしまうだけじゃないのか。私はあの人に説教させ、群集からこっそり賽銭を巻き上げ、また、村の物持ちから供物を取り立て、宿舎の世話から日常衣食の購求まで、煩をいとわず、してあげていたのに、あの方はもとより弟子の馬鹿どもまで、私に一言のお礼も言わない。お礼を言わぬどころか、あの方は、私のこんな隠れた日々の苦勞をも知らぬ振りして、いつでも大変な贅沢を言い、五つのパンと魚が二つ在るきりの時でさえ、目前の大群集みなに食物を与えよ、などと無理難題を言いつけなかって、私は陰で実に苦しいやり繰りをして、どうやら、その命じられた食いのを、まあ、買い調えることが出来るのです。謂わば、私はあの方の奇蹟の手伝いを、危い手品の助手を、これまで幾度となく勤めて来た

のだ。私はこう見えても、決して吝嗇りんしょくの男じゃ無い。それどころか私は、よっぽど高い趣味家なのです。私はあの人を、美しい人だと思っている。私から見れば、子供のようには慾が無く、私が日々のパンを得るために、お金をせつせと貯ためたって、すぐにそれを一厘残さず、むだな事に使わせてしまつて。けれども私は、それを恨みに思いません。あの方は美しい人なのだ。私は、もともと貧しい商人ではありますが、それでも精神家というものを理解していると思つています。だから、あの方が、私の辛苦しんくして貯めて置いた粒々の小金を、どんなに馬鹿らしくむだ使いしても、私は、なんとも思いません。思いませんけれども、それならば、たまには私にも、優しい言葉の一つ位は掛けてくれてもよさそうなのに、あの方は、いつでも私に意地悪くしむけるのです。

一度、あの方が、春の海辺をぶらぶら歩きながら、ふと、私の名を呼び、「……おまえにも、お世話になるね。おまえの寂しさは、わかつている。けれども、そんなにいつも不機嫌な顔をしていては、いけない。寂しいときに、寂しそうな面容おももちをするのは、それは偽善者のすることなのだ。寂しさを人にわかつて貰おうとして、ことさらに顔色を変えて見せているだけなのだ。まことに神を信じているならば、おまえは、寂しい時でも素知らぬ振りして顔を綺麗に洗い、頭に膏あぶらを塗り、微笑ほほえんでいなさるがよい。わからないかね。寂しさを、人にわかつて貰わなくても、どこか眼に見えないところにいるお前の誠の父だけが、わかつていて下さつたなら、それでよいではないか。そうではないかね。寂しさは、誰にだつて在るのだよ」と、そうおっしゃつてくれて、私はそれを聞いてなぜだか声出して泣きたくなり、いいえ、私は天の父にわかつて戴いたかなくても、また世間の者に知られなくても、ただ、あなたお一人さえ、おわかりになつていて下さつたら、それでもよいのです。

私はあなたを愛しています。ほかの弟子たちが、どんなに深くあなたを愛していたつて、それとは較べものにならないほどに愛しています。誰よりも愛しています。ペテロやヤコブたちは、ただ、あなたについて歩いて、何かいいこともあるかと、そればかりを考えているのです。けれども、私だけは知っています。あなたについて歩いたつて、なんの得るところも無いということを知っています。それでいながら、私はあなたから離れることが出来ません。どうしたのでしょうか。あなたが此の世にいななくなつたら、私もすぐに死にます。生きていることが出来ません。私には、いつでも一人でこつそり考えていることが在るんです。それはあなたが、くだらない弟子たち全部から離れて、また天の父の御教えとやらを説かれることもお止よしになり、つつましい民のひとりとして、お母のマリヤ様と、私と、それだけで静かな一生を、永く暮して行くことであります。私の村には、まだ私の小さい家が残つて在ります。年老いた父も母も居おります。ずいぶん広い桃島ももはまもあります。春、いまごろは、桃の花が咲いて見事であります。一生、安樂にお暮しできます。私がいつでもお傍そばについて、御奉公申し上げたく思います。よい奥さまをおもらいなさいまし。そう私が言つたら、あの方は、薄くお笑いになり、「……ペテロやシモンは漁人すなどりだ。美しい桃の島も無い。ヤコブもヨハネも赤貧の漁人だ。あの一とたちには、そんな、一生を安樂に暮せるような土地が、どこにも無いのだ」と低く独りごつのように呟つぶやいて、また海辺を静かに歩きつづけたのでしたが、後にもさきにも、あの人と、しんみりお話できたのは、そのとき一度だけで、あとは、決して私に打ち解けて下さつたことが無かつた。

私はあの人を愛している。あの方が死ねば、私も一緒に死ぬのだ。あの方は、誰のもの

でもない。私のものだ。あの人を他人に手渡すくらいなら、手渡すまえに、私はあの人を殺してあげる。父を捨て、母を捨て、生れた土地を捨てて、私はきよう迄、あの人について歩いて来たのだ。私は天国を信じない。神も信じない。あの人を復活も信じない。なんでもあの人、イスラエルの王なものか。馬鹿な弟子どもは、あの人を神の御子だと信じていて、そうして神の国の福音とかいうものを、あの人から伝え聞いては、浅間しくも、欣喜雀躍している。今にがっかりするのが、私にはわかっていきます。おのれを高うする者は卑うせられ、おのれを卑うする者は高うせられると、あの方は約束なさったが、世の中、そんなに甘くいつてたまるものか。あの方は嘘つきだ。言うこと言うこと、一から十まで出鱈目だ。私はてんで信じていない。けれども私は、あの方の美しさだけは信じている。あんな美しい人はこの世に無い。私はあの方の美しさを、純粹に愛している。それだけだ。私は、なんの報酬も考えていない。あの方について歩いて、やがて天国が近づき、その時こそは、あつぱれ右大臣、左大臣になってやろうなどと、そんなさもしい根性は持っていない。私は、ただ、あの人から離れたくないのだ。ただ、あの方の傍にいて、あの方の声を聞き、あの方の姿を眺めて居ればそれでよいのだ。そうして、出来ればあの方に説教などを止してもらい、私とたった二人きりで一生永く生きてもらいたいのだ。あああ、そうならたら！ 私はどんなに仕合せだろう。私は今の、此の、現世の喜びだけを信じる。次の世の審判など、私は少しも怖れていない。あの方は、私の此の無報酬の、純粹の愛情を、どうして受け取って下さらぬのか。ああ、あの方を殺して下さい。旦那さま。私はあの方の居所を知って居ります。御案内申し上げます。あの方は私を賤しめ、憎悪して居ります。私は、きらわれて居ります。私はあの方や、弟子たちのパンのお世話を申し、日日の飢渴から救ってあげているのに、どうして私を、あんなに意地悪く軽蔑するのでしょうか。(本文)

*

*

さて、これは、ユダはなぜイエスを裏切ったのかという大問題を、太宰治という作家ならではの「頭の中」(或いは「心の中」)で想い描いた「ユダの心理状態」を巧みに描写している作品であるが、それを要約すると、次のようになるかと思う。まず、「……あの方は、私の師です。主です。けれども私と同じ年です。三十四であります。私は、あの方よりたった二月おそく生れただけなのです。たいした違いが無い筈だ。人と人との間に、そんなにひどい差別は無い筈だ。それなのに私はきよう迄あの方に、どれほど意地悪くこき使われて来たことか。どんなに嘲弄されて来たことか。ああ、もう、いやだ。堪えられないところ迄は、堪えて来たのだ。怒る時に怒らなければ、人間の甲斐がありません。私は今まであの方を、どんなにこつそり庇ってあげたか。誰も、ご存じ無いのです。あの方ご自身だって、それに気がついていないのだ。いや、あの方は知っていますのだ。ちゃんと知っています。知っているからこそ、尚更あの方は私を意地悪く軽蔑するのだ。あの方は傲慢だ。私から大きに世話を受けているので、それがご自身に口惜しいのだ。あの方は、阿呆なくらいに自惚れ屋だ。私などから世話を受けている、ということを、何かご自身の、ひどい引目でもあるかのように思い込んでいなさるのです。あの方は、なんでもご自身で出来るかのように、ひとから見られたくてたまらないのだ。ばかな話だ。世の中はそんなものじゃ無いんだ。この世に暮して行くからには、どうしても誰かに、ぺこぺこ頭を下げなければいけないのだし、そうして一歩一歩、苦勞して人を抑えてゆくより他に仕様がな

いのだ。あの人に一体、何が出来ましよう。なんにも出来やしないのです。私から見れば青二才だ。私がおもし居らなかつたらあの人は、もう、とうの昔、あの無能でとんまの弟子たちと、どこかの野原でのたれ死していたに違いない。ヤコブ、ヨハネ、アンデレ、トマス、痴の集り、ぞろぞろあの人について歩いて、脊筋が寒くなるような、甘ったるいお世辞を申し、天国だなんて馬鹿げたことを夢中で信じて熱狂し、その天国が近づいたなら、あいつらみんな右大臣、左大臣にでもなるつもりなのか、馬鹿な奴らだ。その日のパンにも困っていて、私がやりくりしてあげないことには、みんな飢え死してしまうだけじゃないのか。私はあの人に説教させ、群集からこっそり賽銭を巻き上げ、また、村の物持ちから供物を取り立て、宿舎の世話から日常衣食の購求まで、煩をいとわず、してあげていたのに、あの人はもとより弟子の馬鹿どもまで、私に一言のお礼も言わない。お礼を言わぬどころか、あの人は、私のこんな隠れた日々の苦勞をも知らぬ振りして、いつでも大変な贅沢を言い、五つのパンと魚が二つ在るきりの時でさえ、目前の大群集みなに食物を与えよ、などと無理難題を言いつけなさつて、私は陰で実に苦しいやり繰りをして、どうやら、その命じられた食いものを、まあ、買い調えることが出来るのです。謂わば、私はあの人の奇蹟の手伝いを、危い手品の助手を、これまで幾度となく勤めて来たので」ある。

これらが、まさにユダという人がイエスに対して「大きな不満」を抱いていた大きな要、困の一つであろうと太宰治という作家は、そのように捉えているのである。

*

*

それでは、なぜユダは「イエスの弟子」になったのだろうか？ それに対しては、次のように語っている。つまり、「……私はこう見えても、決して吝嗇（けち）な男じゃ無い。それどころか私は、よっぽど高い趣味家なのです。私はあの人を、美しい人だと思っている。私から見れば、子供のように慾が無く、私が日々のパンを得るために、お金をせつせと貯めたつて、すぐにそれを一厘残さず、むだな事に使わせてしまつて。けれども私は、それを恨みに思いません。あの人は美しい人なのだ。私は、もともと貧しい商人ではありますが、それでも精神家というものを理解していると思つています。だから、あの人が、私の辛苦して貯めて置いた粒々の小金を、どんなに馬鹿らしくむだ使しても、私は、なんとも思いません。思いませんけれども、それならば、たまには私にも、優しい言葉の一つ位は掛けてくれてもよさそうなのに、あの人は、いつでも私に意地悪くしむけるのです。一度、あの人が、春の海辺をぶらぶら歩きながら、ふと、私の名を呼び、「……おまえにも、お世話になるね。おまえの寂しさは、わかつている。けれども、そんなにいつも不機嫌な顔をしていては、いけない。寂しいときに、寂しそうな面容をするのは、それは偽善者のすることなのだ。寂しさを人にわかつて貰おうとして、ことさらに顔色を変えて見せているだけなのだ。まことに神を信じているならば、おまえは、寂しい時でも素知らぬ振りして顔を綺麗に洗い、頭に膏を塗り、微笑んでいなさるがよい。わからないかね。寂しさを、人にわかつて貰わなくても、どこか眼に見えないところにいるお前の誠の父だけが、わかつていて下さつたなら、それでよいではないか。そうではないかね。寂しさは、誰にだつて在るのだよ」と、そうおっしゃつてくれて、私はそれを聞いてなぜだか声出して泣きたくなり、いいえ、私は天の父にわかつて戴かなくても、また世間の者に知られなくても、ただ、あなたお一人さえ、おわかりになつて下さつたら、それでも、よいのです。私はあなたを愛しています。ほかの弟子たちが、どんなに深くあなたを愛して

いたって、それとは較べものにならないほどに愛しています。誰よりも愛しています。ペテロやヤコブたちは、ただ、あなたについて歩いて、何かいいこともあるかと、そればかりを考えているのです。けれども、私だけは知っています。あなたについて歩いたって、なんの得するところも無いということを知っています。それでいながら、私はあなたから離れることが出来ません。どうしたのでしょうか。あなたが此の世にいなくなったら、私もすぐに死にます。生きていることが出来ません。私には、いつでも一人でこつそり考えていることが在るんです。それはあなたが、くだらない弟子たち全部から離れて、また天の父の御教えとやらを説かれることもお止しになり、つつましい民のひとりとして、お母のマリヤ様と、私と、それだけで静かな一生を、永く暮して行くことであります。

私の村には、まだ私の小さい家が残って在ります。年老いた父も母も居ります。ずいぶん広い桃島もあります。春、いまごろは、桃の花が咲いて見事であります。一生、安楽にお暮しできます。私がいつでもお傍について、御奉公申し上げたく思います。よい奥さまをおもらいなさいまし。そう私が言ったら、あの人は、薄くお笑いになり、「……ペテロやシモンは漁人だ。美しい桃の島も無い。ヤコブもヨハネも赤貧の漁人だ。あのひとたちには、そんな、一生を安楽に暮せるような土地が、どこにも無いのだ」と低く独りごとのように呟いて、また海辺を静かに歩きつづけたのでしたが、後にもさきにも、あの人と、しみみりお話できたのは、そのとき一度だけで、あとは、決して私に打ち解けて下さったことが無かった。私はあの人を愛している。あの人死ねば、私も一緒に死ぬのだ。あの人は、誰のものでもない。私のものだ。あの人を他人に手渡すくらいなら、手渡すまえに、私はあの人を殺してあげる。父を捨て、母を捨て、生れた土地を捨てて、私はきょう迄、あの人について歩いて来たのだ。私は天国を信じない。神も信じない。あの人復活も信じない。なんであの人、イスラエルの王なもののか。馬鹿な弟子どもは、あの人を神の御子だと信じていて、そうして神の国の福音とかいうものを、あの人から伝え聞いては、浅間しくも、欣喜雀躍している。今にがっかりするのが、私にはわかっています。おのれを高うする者は卑うせられ、おのれを卑うする者は高うせられると、あの方は約束なさったが、世の中、そんなに甘くないってたまるものか」とある。……

*

*

つまり、ユダという人は、「……あの方は嘘つきだ。言うこと言うこと、一から十まで出鱈目だ。私はてんで信じていない。けれども私は、あの人美しさだけは信じている。あんな美しい人はこの世に無い。私はあの人美しさを、純粹に愛している。それだけだ。（これは太宰治の本心に近いかも知れない）。私は、なんの報酬も考えていない。あの人について歩いて、やがて天国が近づき、その時こそは、あっぱれ右大臣、左大臣になつてやろうなどと、そんなさもしい根性は持っていない。私は、ただ、あの人から離れたくないのだ。ただ、あの人傍にいて、あの人声を聞き、あの人姿を眺めて居ればそれでよいのだ。そうして、出来ればあの人に説教などを止してもらい、私とたった二人きりで一生永く生きてもらいたいのだ。ああ、そうなったら！ 私はどんなに仕合せだろう……」。〔それなのに〕、「……あの方は、私の此の無報酬の、純粹の愛情を、どうして受け取って下さらぬのか。（それならいっそのこと）、ああ、あの人を殺して下さい。旦那さま。私はあの人居所を知って居ります。御案内申し上げます。あの方は私を賤しめ、憎悪して居ります。私は、きらわれて居ります。私はあの人や、弟子たちのパンのお世話

を申し、日日の飢渴から救ってあげているのに、どうして私を、あんなに意地悪く軽蔑するのでしょうか」となっているが、それでは、ユダはなぜ嫌われていると感じているのかと問えば、それは、ユダはやはり「商人」であり、それゆえ、どうしても「俗世や金銭」その他などへの執着がより強いだろうと思われるからである。

二、女性に心動かす

お聞き下さい。六日まえのことでした。あの人はベタニヤのシモンの家で食事をなさっていたとき、あの村のマルタ奴の妹のマリヤが、ナルドの香油をいっぱい満たして在る石膏の壺をかかえて饗宴の室にこっそり這入って来て、だしぬけに、その油をあの人の頭にぎぶと注いで御足まで濡らしてしまつて、それでも、その失礼を詫びるどころか、落ちついてしゃがみ、マリヤ自身の髪の毛で、あの人の濡れた両足をていねいに拭いてあげて、香油の匂いが室に立ちこもり、まことに異様な風景でありましたので、私は、なんだか無性に腹が立つて来て、失礼なことをするな！ と、その妹娘に怒鳴つてやりました。これ、このようにお着物が濡れてしまつたではないか、それに、こんな高価な油をぶちまけてしまつて、もつたいたいと思わないか、なんというお前は馬鹿な奴だ。これだけの油だつたら、三百デナリもするではないか、この油を売つて、三百デナリ儲けて、その金をば貧乏人に施してやつたら、どんなに貧乏人が喜ぶか知れない。無駄なことをしては困るね、と私は、さんざ叱つてやりました。すると、あの人は、私のほうを屹つと見て、「……この女を叱つてはいけない。この女のひとは、大変いいことをしてくれたのだ。貧しい人にお金を施すのは、おまえたちには、これからあとあと、いくらでも出来ることではないか。私には、もう施しが出来なくなつてきているのだ。そのわけは言うまい。この女のひとだけは知っている。この女が私のからだに香油を注いだのは、私の葬いの備えをしてくれたのだ。おまえたちも覚えて置くがよい。全世界、どここの土地でも、私の短い一生を言い伝えられる処には、必ず、この女の今日の仕草も記念として語り伝えられるであろう」と、そう言い結んだ時に、あの人の青白い頬は幾分、上気して赤くなつていました。

私は、あの人の言葉を信じません。れいに依つて大袈裟なお芝居であると思ひ、平気で聞き流すことが出来ましたが、それよりも、その時、あの人の声に、また、あの人の瞳の色に、いままで嘗て無かつた程の異様なものが感じられ、私は瞬時戸惑ひして、更にあの人の幽かに赤らんだ頬と、うすく涙に潤んでいる瞳とを、つくづく見直し、はつと思ひ当ることがありました。ああ、いまわしい、口に出すさえ無念至極のことです。あの人は、こんな貧しい百姓女に恋、では無いが、まさか、そんな事は絶対に無いのですが、でも、危い、それに似たあやしい感情を抱いたのではないか？ あの人もあろうものか。あんな無智な百姓女ふぜいに、そよとでも特殊な愛を感じたとあれば、それは、なんという失態。取りかえしの出来ぬ大醜聞。私は、ひとの恥辱となるような感情を嗅ぎわけるのが、生れつき巧みな男であります。自分でもそれを下品な嗅覚だと思ひ、いやであります。ちらと一目見ただけで、人の弱点を、あやまたず見届けてしまう鋭敏の才能を持つて居ります。あの人が、たとえ微弱にでも、あの無学の百姓女に、特別の感情を動かしたということは、やつぱり間違ひありません。私の眼には狂いが無い筈だ。たしかにそうだ。ああ、我慢ならない。堪忍ならない。私は、あの人も、こんな体たらくでは、もはや駄目

だと思いました。醜態の極だと思えました。あの人はこれまで、どんなに女に好かれても、いつでも美しく、水のように静かであった。いささかも取り乱すことが無かったのだ。ヤキがまわった。だらしが無え。あの人だつてまだ若いのだし、それは無理もないと言えるかも知れぬけれど、そんなら私だつて同じ年だ。しかも、あの人より二月おそく生れているのだ。若さに変りは無い筈だ。それでも私は堪えている。あの人ひとりに心を捧げ、これ迄どんな女にも心を動かしたことは無いのだ。

マルタの妹のマリヤは、姉のマルタが骨組頑丈で牛のように大きく、気象も荒く、どたばた立ち働くのだけが取柄で、なんの見どころも無い百姓女であります。あれは違つて骨も細く、皮膚は透きとおる程の青白さで、手足もふつくらして小さく、湖水のように深く澄んだ大きい眼が、いつも夢みるように、うっとり遠くを眺めていて、あの村では皆、不思議がつているほどの気高い娘でありました。私だつて思つていたので。町へ出たとき、何か白絹でも、こつそり買つて来てやろうと思つていたので。ああ、もう、わからなくなりました。私は何を言つているのだ。そうだ、私は口惜しいのです。なんのわけだか、わからない。地団駄踏むほど無念なのです。あの人が若いなら、私だつて若い。私は才能ある、家も畠もある立派な青年です。それでも私は、あの人のために私の特権全部を捨てて来たのです。だまされた。あの人は、嘘つきだ。旦那さま。あの人は、私の女をとつたのだ。いや、ちがつた！ あの女が、私からあの人を奪つたのだ。ああ、それもちがう。私の言うことは、みんな出鱈目だ。一言も信じないで下さい。わからなくなりました。ごめん下さいまし。ついつい根も葉も無いことを申しました。そんな浅墓な事実など、みじんも無いのです。醜いことを口走りました。だけれども、私は、口惜しいのです。胸を掻きむしりたいほど、口惜しかつたのです。なんのわけだか、わかりませぬ。ああ、ジェラシイというのは、なんてやりきれない悪徳だ。私がこんなに、命を捨てるほどの思いであの人を慕い、きょうまでつき随つて来たのに、私には一つの優しい言葉も下さらず、かえつてあんな賤しい百姓女の身の上を、御頬を染めて迄かばつておやりなかつた。ああ、やっぱり、あの人はだらし無い。ヤキがまわつた。もう、あの人には見込みがない。凡夫だ。ただの人だ。死んだつて惜しくはない。そう思つたら私は、ふいと恐ろしいことを考えるようになりました。悪魔に魅こまれたのかも知れませぬ。そのとき以来、あの人を、いつそ私の手で殺してあげようと思ひました。いずれは殺されるお方にちがいない。またあの人だつて、無理に自分を殺させるように仕向けているみたいな様子が、ちらちら見える。私の手で殺してあげる。他人の手で殺させたくはない。あの人を殺して私も死ぬ。旦那さま、泣いたりしてお恥ずかしゅう思います。はい、もう泣きませぬ。はい、はい。落ちついて申し上げます。(本文)

*

*

さて、今度は、女性に微妙でも心動かしたのではないかという疑念から、ユダはイエスに対して不信を抱きかけるという内容であり、その概要は、次のようなものである。つまり、「……お聞き下さい。六日まえのことでした。あの人はベタニヤのシモン家で食事をなさつていたとき、あの村のマルタ奴の妹のマリヤが、ナルドの香油をいっぱい満たして在る石膏の壺をかかえて饗宴の室にこつそり這入つて来て、だしぬけに、その油をあの人頭にざぶと注いで御足まで濡らしてしまつて、それでも、その失礼を詫びるどころか、落ちついてしやがみ、マリヤ自身の髪の毛で、あの人を濡れた両足をていねいに拭いてあ

げて、香油の匂いが室に立ちこもり、まことに異様な風景でありましたので、私は、なんだか無性に腹が立つて来て、失礼なことをするな！ と、その妹に怒鳴ってやりました。

すると、あの人は、私のほうを屹きっと見て、「……この女を叱なってはいけない。この女のひとは、大変いいことをしてくれたのだ。貧しい人にお金を施すのは、おまえたちには、これからあとあと、いくらでも出来ることではないか。私には、もう施しが出来なくなっているのだ。そのわけは言うまい。この女のひとだけは知っている。この女が私のからだに香油を注いだのは、私の葬いの備えをしてくれたのだ。おまえたちも覚えて置くがよい。全世界、どここの土地でも、私の短い一生を言い伝えられる処には、必ず、この女の今日の仕草も記念として語り伝えられるであろう」と、そう言い結んだ時に、あの人の青白い頬は幾分、上気して赤くなっていました。私は、あの人の言葉を信じません。れいに依よつて大袈裟おおげさなお芝居であると思ひ、平気で聞き流すことが出来ましたが、それよりも、その時、あの人の声に、また、あの人の瞳の色に、いままで嘗かつて無かつた程の異様なものが感じられ、私は瞬時戸惑いして、更にあの人の幽かかに赤らんだ頬と、うすく涙に潤んでいる瞳とを、つくづく見直し、はッと思ひ当ることがありました。ああ、いまわしい、口に出すさえ無念至極のことでありませぬ。あの人は、こんな貧しい百姓女に恋、では無いが、まさか、そんな事は絶対に無いのですが、でも、危い、それに似たあやしい感情を抱いたのではなにか？ あの人もあろうものが。あんな無智な百姓女ふぜいに、そよとでも特殊な愛を感じたとあれば、それは、なんという失態。取りかえしの出来ぬ大醜聞。私は、ひとの恥辱となるような感情を嗅かぎわけるのが、生れつき巧みな男であります。自分でもそれを下品な嗅覚きゆうかくだと思ひ、いやであります。ちらと一目見ただけで、人の弱点を、あやまたず見届けてしまう鋭敏の才能を持って居ります。あの人が、たとえ微弱にでも、あの無学の百姓女に、特別の感情を動かしたということは、やっぱり間違ひありません。私の眼には狂いが無い筈だ。たしかにそうだ。ああ、我慢ならない。堪忍かんにんならない。私は、あの人も、こんな体ていたらくでは、もはや駄目だと思ひました。醜態しうたいの極だと思ひました。あの人はこれまで、どんなに女に好かれても、いつでも美しく、水のように静かであった。いささかも取り乱すことが無かつたのだ。ヤキがまわつた。だらしが無なえ。あの人がだつてまだ若いのだし、それは無理もないと言えるかも知れぬけれど、そんなら私だつて同じ年だ。しかも、あの人より二月ふたつきおそく生れているのだ。若さに変りは無い筈だ。それでも私は堪えている。あの人ひとりに心を捧げ、これ迄どんな女にも心を動かしたことは無いのだ。

マルタの妹のマリヤは、姉とは違って骨も細く、皮膚は透きとおる程の青白さで、手足もふつくらして小さく、湖水のように深く澄んだ大きい眼が、いつも夢みるように、うつとり遠くを眺めていて、あの村では皆、不思議がつているほどの気高い娘でありました。私だつて思っていたのだ。町へ出たとき、何か白絹でも、こっそり買って来てやろうと思っていたのだ。ああ、もう、わからなくなりました。私は何を言っているのだ。そうだ、私は口惜くししいのです。なんのわけだか、わからない。地団駄踏むほど無念なのです。あの人が若いなら、私だつて若い。私は才能ある、家も畠もある立派な青年です。それでも私は、あの人のために私の特権全部を捨てて来たのです。だまされた。あの人は、嘘うそつきだ。旦那さま。あの人は、私の女をとつたのだ。いや、ちがつた！ あの女が、私からあの人を奪つたのだ。ああ、それもちがう。私の言うことは、みんな出鱈目だ。一言も信じないで下さい。わからなくなりました。ごめん下さいまし。ついつい根も葉も無いことを申し

ました。そんな浅墓な事実なぞ、みじんも無いのです。醜いことを口走りました。だけれども、私は、口惜しいのです。胸を掻きむしりたいほど、口惜しかったのです。なんのわけだか、わかりませぬ。ああ、ジェラ、シ、インというのは、なんてやりきれない悪徳だ。私がいかに、命を捨てるほどの思いであの人を慕い、きょうまでつき随って来たのに、私には一つの優しい言葉も下さらず、かえってあんな賤しい百姓女の身の上を、御頬を染めて迄かばっておやりなされた。「……ああ、やっぱり、あの人にはだらしがない。ヤキがまわった。もう、あの人には見込みがない。凡夫だ。ただの人だ。死んだって惜しくはない」と、そう思ったら私は、ふいと恐ろしいことを考えるようになりました。悪魔に魅こまれたのかも知れませぬ。そのとき以来、「……あの人を、いつそ私の手で殺してあげようと思いました。いずれは殺されるお方にちがいない」と。またあの人だって、無理に自分を殺させるように仕向けているみたいなきさま、ちらちら見える。私の手で殺してあげる。他人の手で殺させたくはない。あの人を殺して私も死ぬ。旦那さま、泣いたりしてお恥ずかしゅう思います。はい、もう泣きませぬ。はい、はい。落ちついて申し上げます。

さて、この「……私の手で殺してあげる。他人の手で殺させたくはない。あの人を殺して私も死ぬ」というようなせりふは、まさに「愛情の裏返し」になっているのだろう。

エルサレムの宮へと向かう

そのあくる日、私たちは愈々あこがれのエルサレムに向い、出発いたしました。大群集、老いも若きも、あの人のもとにつき従い、やがて、エルサレムの宮が間近になったころ、あの方は、一匹の老いぼれた驢馬を道ばたで見つけて、微笑してそれに打ち乗り、これこそは、「……シオンの娘よ、懼るな、視よ、なんじの王は驢馬の子に乗りて来り給う」と予言されてある通りの形なのだ、弟子たちに晴れがましい顔をして教えました。私ひとりには、なんだか浮かぬ気持ちでありました。なんと、あわれな姿であったでしょう。待ちに待った過越の祭、エルサレム宮に乗り込む、これが、あのダビデの御子の姿であったのか。あの方の一生の念願とした晴れの姿は、この老いぼれた驢馬に跨り、とぼとぼ進むあわれな景観であったのか。私には、もはや、憐憫以外のものは感じられなくなりました。実に悲惨な、愚かしい茶番狂言を見ているような気がして、ああ、もう、この人も落目だ。一日生き延びれば、生き延びただけ、あさはかな醜態をさらすだけだ。花は、しばまぬうちこそ、花である。美しい間に、剪らなければならぬ。あの人を、一ばん愛しているのは私だ。どのように人から憎まれてもいい。一日も早くあの人を殺してあげなければならぬと、私は、いよいよ此のつらい決心を固めるだけでありました。群集は、刻一刻とその数を増し、あの方の通る道々に、赤、青、黄、色とりどりの彼等の着物をほうり投げ、あるいは棕櫚の枝を伐って、その行く道に敷きつめてあげて、歓呼にどよめき迎えるのでした。かつ前にゆき、あとに従い、右から、左から、まつわりつくようにして果ては大浪の如く、驢馬とあの人をゆさぶり、ゆさぶり、「……ダビデの子にホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて来る者、いと高き処にて、ホサナ」と熱狂して口々に歌うのでした。ペテロやヨハネやバルトロマイ、そのほか全部の弟子共は、ばかなやつ、すでに天国を目のまえに見たかのように、まるで凱旋の將軍につき従っているかのように、有頂天の歓喜で互いに抱き合い、涙に濡れた接吻を交し、一徹者のペテロなど、ヨハネを抱きかか

えたまま、わあわあ大声で嬉し泣きに泣き崩れていました。(この時がイエスを始め弟子たちの最も晴れがましい時期だったのかも知れない。)……

その有様を見ているうちに、さすがに私も、この弟子たちと一緒に艱難を冒して布教に歩いて来た、その忍苦困窮の日々を思い出し、不覚にも、目がしらが熱くなつて来ました。かくしてあの人は宮に入り、驢馬から降りて、何思つたか、縄を拾い之を振りまわし、宮の境内の、両替する者の台やら、鳩売る者の腰掛けやらを打ち倒し、また、売り物に出ている牛、羊をも、その縄の鞭でもって全部、宮から追い出して、境内にいる大勢の商人たちに向い、「……おまえたち、みな出て失せる、私の父の家を、商いの家にしてはならぬ」と甲高い声で怒鳴るのでした。あの優しいお方が、こんな酔っぱらいのような、つまらぬ乱暴を働くとはい、どうしても少し気がふれているとしか、私には思われませんでした。傍の人もみな驚いて、これはどうしたことですか、とあの人に訊ねると、あの人の息切つて答えるには、「……おまえたち、この宮をこわしてしまえ、私は三日の間に、また建て直してあげるから」ということだったので、さすが愚直の弟子たちも、あまりに無鉄砲なその言葉には、信じかねて、ぼかんとしてしまいました。けれども私は知っていました。所詮はあの人の、幼い強がりにはちがいない。あの人の信仰とやらでもって、万事成らざるは無しという気概のほどを、人々に見せたかったのに違いないのです。それにしても、縄の鞭を振りあげて、無力な商人を追い廻したりなんかして、なんて、まあ、けちな強がりなんですよ。あなたに出来る精一ぱいの反抗は、たつたそれだけのですか、鳩売りの腰掛けを蹴散らすだけのことなのですか、と私は憫笑しておたずねしてみたいとさえ思いました。もはやこの人は駄目なのです。破れかぶれなのです。自重自愛を忘れてしまった。自分の力では、この上もう何も出来ぬということを此の頃そろそろ知り始めた様子ゆえ、あまりボロの出ぬうちに、わざと祭司長に捕えられ、この世からおさらばしたくなつて来たのであります。……

私は、それを思った時、はっきりあの人を諦めることが出来ました。そうして、あんな気取り屋の坊ちゃんを、これまで一途に愛して来た私自身の愚かさをも、容易に笑うことが出来ました。やがてあの人は宮に集る大群の民の前にして、これまで述べた言葉のうちで一ばんひどい、無礼傲慢の暴言を、滅茶苦茶に、わめき散らしてしまつたのです。左様、たしかに、やけくそです。私はその姿を薄汚くさえ思いました。殺されたがつて、うずうずしていやがる。「……禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは酒杯と皿との外を潔くす、然れども内は貪慾と放縦とにて満つるなり。禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども、内は死人の骨とさまざまの穢とに満つ。斯のごとく汝らも外は正しく見ゆれども、内は偽善と不法とにて満つるなり。蛇よ、蝮の裔よ、なんじら争いかで、ゲヘナの刑罰を避け得んや。ああエルサレム、エルサレム、予言者たちを殺し、遣された人々を石にて撃つ者よ、牝鶏のその雛を翼の下に集むるごとく、我の子らを集めんと為しこと幾度ぞや、然れど、汝らは好まざりき」と、馬鹿なことです。噴飯ものだ。口真似するのさえ、いまわしい。たいへんな事を言う奴だ。あの人は、狂つたのです。まだそのほかに、饑饉があるの、地震が起るの、星は空より墮ち、月は光を放たず、地に満つ人の死骸のまわりに、それをついばむ鷲が集るの、人はそのとき哀哭、切齒することがあるうだの、実に、とんでも無い暴言を口から出まかせに言い放つたのです。なんとという思慮のないことを、言うのでしょうか。

思い上りも甚しい。ばかだ。身のほど知らぬ。いい気なものだ。もはや、あの人の罪は、まぬかれぬ。必ず十字架。それにきまった。(この本文全体は、まさに書いてある通りであり、特に説明も要らないかと思うが、大事なものは、次の最後の本文からである。)

三、最後の晩餐で……

祭司長や民の長老たちが、大祭司カヤパの中庭にこっそり集って、あの人を殺すことを決議したとか、私はそれを、きのう町の物売りから聞きました。もし群集の目前であの人を捕えたならば、あるいは群集が暴動を起すかも知れないから、あの人と弟子たちとだけ居るところを見つけて役所に知らせた者には銀三十を与えるということをも、耳にしました。もはや猶予の時ではない。あの方は、どうせ死ぬのだ。ほかの人の手で、下役たちに引き渡すよりは、私が、それを為そう。きょうまで私の、あの人に捧げた一すじなる愛情の、これが最後の挨拶だ。私の義務です。私があの人を売ってやる。つらい立場だ。誰がこの私のひたむきの愛の行為を、正當に理解してくれることか。いや、誰に理解されなくてもいいのだ。私の愛は純粹の愛だ。人に理解してもらおう為の愛では無い。そんなさもしい愛では無いのだ。私は永遠に、人の憎しみを買うだろう。けれども、この純粹の愛の貪慾のまえには、どんな刑罰も、どんな地獄の業火も問題でない。私は私の生き方を生き抜く。身震いするほどに固く決意しました。私は、ひそかによき折を、うかがっていたのであります。いよいよ、お祭りの当日になりました。

私たち師弟十三人は丘の上の古い料理屋の、薄暗い二階座敷を借りてお祭りの宴会を開くことにいたしました。みんな食卓に着いて、いざお祭りの夕餐を始めようとしたとき、あの人は、つと立ち上り、黙って上衣を脱いだので、私たちは一体なにをお始めなさるのだろうと不審に思っているうちに、あの人は卓の上の水甕を手にとり、その水甕の水を、部屋の隅に在った小さい盥に注ぎ入れ、それから純白の手巾をご自身の腰にまとい、盥の水で弟子たちの足を順々に洗って下さったのであります。弟子たちには、その理由がわからず、度を失って、うろろろするばかりでありましたけれど、私には何やら、あの人の秘めた思いがわかるような気持でありました。あの人は、寂しいのだ。極度に気が弱って、いまは、無智な頑迷の弟子たちにさえ縋りつきたい気持になっているのにちがいない。可哀想に。あの人は自分の逃れ難い運命を知っていたのだ。その有様を見ているうちに、私は、突然、強力な嗚咽が喉につき上げて来るのを覚えた。矢庭にあの人を抱きしめ、共に泣きたく思いました。おう可哀想に、あなたを罪してなるものか。あなたは、いつでも優しくかった。あなたは、いつでも正しかった。あなたも、いつでも貧しい者の味方だった。そうしてあなたは、いつでも光るばかりに美しかった。あなたは、まさしく神の御子だ。私はそれを知っています。おゆるし下さい。私はあなたを売ろうとして此の二、三日、機会をねらっていたのです。もう今はいやだ。あなたを売るなんて、なんとという私は無法なことを考えていたのでしょうか。御安心なさいまし。もう今からは、五百の役人、千の兵隊が来たとても、あなたのおからだに指一本ふれさせることは無い。あなたは、いま、つけねらわれているのです。危い。いますぐ、ここから逃げましょう。ペテロも来い、ヤコブも来い、ヨハネも来い、みんな来い。われらの優しい主を護り、一生永く暮して行こう、と心の底からの愛の言葉が、口に出しては言えなかったけれど、胸に沸きかえって居りま

した。きょうまで感じたことの無かった一種崇高な靈感に打たれ、熱いお詫びの涙が気持ちよく頬を伝って流れて、やがてあの人は私の足をも静かに、ていねいに洗って下され、腰にまどつて在った手巾で柔かく拭いて、ああ、そのときの感触は。そうだ、私はあのとき、天国を見たのかも知れない。

私の次には、ピリポの足を、その次にはアンデレの足を、そうして、次に、ペテロの足を洗って下さる順番になったのですが、ペテロは、あのように愚かな正直者でありますから、不審の気持を隠して置くことが出来ず、主よ、あなたはどうして私の足などお洗になるのです。と多少不満げに口を尖らして尋ねました。あの人は、「……ああ、私のすることは、おまえには、わかるまい。あとで、思い当ることもあるだろう」と穏かに言いさとし、ペテロの足もとにしやがんだのだが、ペテロは尚も頑強にそれを拒んで、いいえ、いけません。永遠に私の足などお洗いになつてはなりません。もつたいない、とその足をひっこめて言い張りしました。すると、あの人は少し声を張り上げて、「……私がもし、おまえの足を洗わないなら、おまえと私とは、もう何の関係も無いことになるのだ」と随分、思い切った強いことを言いましたので、ペテロは大あわてにあわて、ああ、ごめんさい、それならば、私の足だけでなく、手も頭も思う存分に洗って下さい、と平身低頭して頼みいりましたので、私は思わず噴き出してしまい、ほかの弟子たちも、そつと微笑み、なんだか部屋が明るくなったようでした。あの人も少し笑いながら、「……ペテロよ、足だけ洗えば、もうそれで、おまえの全身は潔いのだ、ああ、おまえだけでなく、ヤコブも、ヨハネも、みんな汚れの無い、潔いからだになったのだ。けれども」と言いかけてすつと腰を伸ばし、瞬時、苦痛に耐えかねるような、とても悲しい眼つきをなされ、すぐにその眼をぎゅつと固くつぶり、つぶつたままで言いました。「……みんなが潔ければいいのだが」はつと思つた。やられた！ 私のことを言っているのだ。私があの人を売ろうとたくらんでいた寸刻以前までの暗い気持を見抜いていたのだ。……

けれども、その時は、ちがつていたのだ。断然、私は、ちがつていたのだ！ 私は潔くなつていたので。私の心は変つていたので。ああ、あの人はそれを知らない。それを知らない。ちがう！ ちがいます、と喉まで出かかった絶叫を、私の弱い卑屈な心が、唾を呑みこむように、呑みくだしてしまつた。言えない。何も言えない。あの人からそう言われてみれば、私はやはり潔くなつていないのかも知れないと気弱く肯定する僻んだ気持が頭をもたげ、とみるみるその卑屈の反省が、醜く、黒くふくれあがり、私の五臓六腑を駆けめぐつて、逆にむらむら憤怒の念が炎を挙げて噴出したのだ。ええっ、だめだ。私は、だめだ。あの人に心の底から、さらわれている。売ろう。売ろう。あの人を、殺そう。そうして私も共に死ぬのだ、と前からの決意に再び眼覚め、私はいま完全に、復讐の鬼になりました。あの人は、私の内心の、ふたたび三たび、どんでん返して変化した大動乱には、お気づきなさいことの無かつた様子で、やがて上衣をまとい服装を正し、ゆつたりと席に坐り、実に蒼ざめた顔をして、「……私がおまえたちの足を洗ってやったわけを知っているか。おまえたちは私を主と称え、また師と称えているようだが、それは間違いないことだ。私はおまえたちの主、または師なのに、それでもなお、おまえたちの足を洗つてやったのだから、おまえたちもこれからは互いに仲好く足を洗い合つてやるように心がけなければなるまい。」「このユダの気持ちが二転三転するという心理描写は、例えば、走れメロスの作品の中でも、メロスの気持ちがその時々状況に応じて変化していく心理を巧

みに描いているが、太宰治という人は、その時々^{じつじつ}の状況に^{おと}応じて多様に^く刻々と揺れ動く人間の「心理状態」を巧みに描くのが得意（或いは「好き」）だったのかも知れない。」

私は、おまえたちと、いつ迄も一緒にいることが出来ないかも知れぬから、いま、この機会に、おまえたちに模範を示してやったのだ。私のやったとおりに、おまえたちも行うように心がけなければならぬ。師は必ず弟子より優れたものなのだから、よく私の言うことを聞いて忘れぬようになさい」と、ひどく物憂そうな口調で言つて、音無し^{おと}く食事^をを始め、ふつと、「……おまえたちのうちの、一人が、私を売る」と顔を伏せ、呻く^{うめ}ような、歎^{なげ}息^をなさるような苦しげの声で言い出したので、弟子たちすべて、のけぞらんばかりに驚き、一斉に席を蹴つて立ち、あの人のまわりに集つておのおの、主よ、私のことですか、主よ、それは私のことですかと、罵^{のの}り騒^わぎ、あの人は死ぬる人のように幽かに首を振り、「……私がいま、その人に一つまみのパンを与えます。その人は、ずいぶん不仕合せな男なのです。ほんとうに、その人は、生れて来なかつたほうが、よかつた」と意外にはつきりした語調で言つて、一つまみのパンをとり腕をのぼし、あやまたず私の口にひたと押し当てました。私も、もうすでに度胸がついていたのだ。恥じるよりは憎んだ。あの人の今更ながらの意地悪さを憎んだ。このように弟子たち皆の前で公然と私を辱か^こしめるのが、あの人の之までの仕来りなのだ。火と水と。永遠に解け合う事の無い宿命が、私とあいつとの間に在るのだ。犬か猫に与えるように、一つまみのパン屑を私の口に押し入れて、それがあいつのせめてもの腹いせだったのか。ははん。ばかな奴だ。旦那さま、あいつは私に、おまえの為^なすことを速かに為せと言いました。……

私はすぐに料亭から走り出て、夕闇の道をひた走りに走り、ただいまここに参りました。そうして急ぎ、このとおりに訴え申し上げました。さあ、あの人を罰して下さい。どうとも勝手に、罰して下さい。捕えて、棒で殴つて素裸にして殺すがよい。もう、もう私は我慢ならない。あれは、いやな奴です。ひどい人だ。私を今まで、あんなにいじめた。はははは、ちきしょうめ。あの人はいま、ケデロンの小川の彼方、ゲッセマネの園にいます。もうはや、あの二階座敷の夕餐もすみ、弟子たちと共にゲッセマネの園に行き、いまごろは、きつと天へお祈りを捧げている時刻です。弟子たちのほかには誰も居りません。今なら難なくあの人を捕えることが出来ます。ああ、小鳥が啼^ないて、うるさい。今夜はどうしてこんなに夜鳥の声が耳につくのでしょうか。私がここへ駆け込む途中の森でも、小鳥がパイチク啼いて居りました。夜に囀^{さえず}る小鳥は、めずらしい。私は子供のような好奇心でもって、その小鳥の正体を一目見^{ひと}たいと思ひました。立ちどまって首をかしげ、樹々の梢^{こずえ}をすかして見ました。ああ、私はつまらないことを言っています。ごめん下さい。旦那さま、お仕度は出来ましたか。ああ楽しい。いい気持。今夜は私にとつても最後の夜だ。旦那さま、旦那さま、今夜これから私とあの人と立派に肩を接して立ち並ぶ光景を、よく見て置いて下さいまし。私は今夜あのひと、ちゃんと肩を並べて立ってみせます。あの人を怖^{おそ}れることとは無いんだ。卑下することは無いんだ。私はあのひとと同じ年だ。同じ、すぐれた若いものだ。ああ、小鳥の声が、うるさい。耳についてうるさい。どうして、こんなに小鳥が騒ぎまわっているのだろう。パイチクパイチク、何を騒いでいるのでしょうか。おや、そのお金は？ 私に下さるのですか、あの、私に、三十銀。なる程、はははは。いや、お断り申しましょう。殴られぬうちに、その金ひっこめたらいいでしょう。金が欲しくて訴え出たのでは無いんだ。ひっこめろ！ いいえ、ごめんなさい、いただきましょう。そうだ、私

は商人だったのだ。金銭ゆえに、私は優美なあの人から、いつも軽蔑されて来たのだった。いただきましよう。私は所詮、商人だ。いやしめられている金銭で、あの人に見事、復讐してやるのだ。これが私に、一ばんふさわしい復讐の手段だ。ざまあみろ！ 銀三十で、あいつは売られる。私は、ちつとも泣いてやしない。私は、あの人を愛していない。はじめから、みじんも愛していなかった。はい、旦那さま。私は嘘ばかり申し上げました。私は、金が欲しさにあの人について歩いていたのです。おお、それにちがいない。あの人が、ちつとも私に儲けさせてくれないと今夜見極めがついたから、そこは商人、素速く寝返りを打ったのだ。金。世の中は金だけだ。銀三十、なんと素晴らしい。いただきましよう。私は、けちな商人です。欲しくてならぬ。はい、有難う存じます。はい、はい。申しおくれました。私の名は、商人のユダ。へっへ。イスカリオテのユダ。(完)

*

*

さて、太宰治という人は、当然のことながら、所謂『新約聖書』の次の「幾つかの章」などを読んで、この『駆け込み』という作品の着想を得たかと思うが、その部分を『新約聖書』の中から抜粋して、その「幾つかの章」を検証してみたいと思うが、それは、次のようなものである。

二十六章 (マタイ伝)

イエスはこれらの話をことごとく終えた時、弟子たちに言われた、「知っているとおり、あさつては過越の祭である。その日、(人の子) 私は十字架に磔られるために引き渡される」。一方、その頃、大祭司連と国の長老たちは、カヤバという大祭司の官邸に集まり、「計略でイエスを捕えて殺そうと決議した。しかし、「祭りの時に手を下してはいけない。人民どもの間で騒動がおこると困る」と言っていた。」(つまり「……ユダの裏切りとは関係なく、イエスは、遅かれ早かれ、十字架にかけられる運命であったのである。」)

*

*

イエスがベタニヤで癩病人シモンのおられるとき、一人の女が非常に値の高い香油の石膏の壺を持って近寄り、食卓についておられるイエスの頭に香油をすっかり注ぎかけた。弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。「なぜこんなもったいないことをするのだろう。これは高く売れて、貧乏な人に施しが出来たのに」。それと知ってイエスは言われた、「なぜこの婦人をいじめるのか。わたしに良いことをしてくれたではないか。貧乏の人はいつもあなた達と一しよにいるが、わたしはいつも一しよにいるわけではない。この夫人がわたしの体に香油をかけてくれたのは、わたしを葬るためである。アーメン、わたしは言う、世界中どこでも今後福音の説かれる所では、この婦人のしたことも、その記念のために一しよに語りつたえられるであろう」。

そのあと、イスカリオテのユダという十二人の弟子の一人が大祭司連の所に行つて、「いくらくれますか、あの男をあなた達に売ってもいいが」と言った。かれらはシケル銀貨三十枚を払い渡した。この時からユダは、イエスを引き渡すよい機会をねらっていた。

最後の晩餐

種なしパンの祭の初めの日の朝、弟子たちがイエスの所に来て言った、「どこで過越のお食事の支度をしましょうか」。イエスは言われた、「都のだれその所まで行って、『わたしの時は近づいた。あなたの所で弟子たちと一しよに過越の食事をまもる、と先生が言われる』と言いなさいと。弟子たちはイエスに命じられたとおりにして、過越の支度をした」。……

夕方になると、イエスは十二人の弟子をつれて席につかれた。彼らが食事をしてるとき、言われた。「アーメン、わたしは言う、あなた達のうちの一人が、わたしを敵に売ろうとしている！」、(この場面が、まさにダビンの『最後の晩餐』であり)、これを聞く弟子たちはすっかり悲しくなって、「主よ、わたしではないでしょう！」、「わたしではないでしょう！」と、ひとりびひとりイエスに言い始めた。イエスは答えられた。「わたしと一しよに同じ鉢から食べているもの、それがわたしを売る。人の子わたしは聖書に書いてあるとおりに死んでゆく。だが人の子を売るその人は、あかかわいそうだ！ 生まれなかつた方がよっぽど幸せであつた」。イエスを売るユダが口を出して、「先生、わたしではないでしょう」。彼(ユダ)に言われる。「いや、そうかも知れない」と。(つまり、イエスは、ユダの裏切りを漠然と感じていたのかも知れない。)

ユダが立ち去つたあと、彼らが食事をしてるとき、イエスはいつものようにパンを手に取り、神を賛美して裂き、弟子たちに渡して言われた、「取って食べなさい、これはわたしの体である」。また杯を取り、神に感謝したのち、彼らに渡して言われた、「皆この杯から飲みなさい。これは多くの人の罪を赦されるために流す、わたしの《約束の血》であるから。しかしわたしは言う、わたしの父上の国で、あなた達と一しよに新しいのを飲むその日まで、わたしは今後決してこの葡萄の木から出来たものを飲まない」。ここで最も大事な言葉は、「……これは多くの人の罪が赦されるために流す、わたしの《約束の血》であるから」。つまり、イエスが十字架にかけられ死んでいくのは、多くの人の罪が赦されるためであることになる。)

ペテロのつまずきの預言

食事がすむと、みなで賛美歌をうたつたのち、オリブ山へ出かけた。もう真夜中すぎであつた。その時イエスは弟子たちに言われる。「今夜あなた達は一人のこらずわたしにつまずくであろう」。聖書に「……わたしは羊飼いを打つ。羊の群はちりぢりになるであろう」と書いてあるからである。(羊飼いはわたし、羊はあなた達である)。しかしわたしは復活した後、あなた達より先にガリラヤに行く。そこでまた逢おう。するとペテロは答えた。「仰せのとおり皆があなたにつまずいても、このわたしは断じてつまずきません」。イエスはペテロに言われた。「アーメン、わたしは言う、今夜、鶏が鳴く前に、三度、あなたはわたしを知らないと言う」。ペテルが言う、「たとえご一しよに死なねばならなくても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」。ほかの弟子たちも皆、口をそろえてそう言った」とある。(これは、いわばイエスの預言であるが、実際、そのようになつて行くのである。)

ゲツセマネ

ほどなくイエスは弟子たちと一しよにオリブ山の麓のゲッセマネという地所に着くと、弟子たちに言われる。「わたしがあちらへ行つて祈っている間、ここに坐つて待つておれ」。そしてペテルとゼベダイの子二人だけを連れて奥の方へゆかされると、急に悲しみおのき始められた。それから彼らに言われる。「こころがめいて、死にたいくらいだ。ここをはなれずに、わたしと一しよに目を覚ましていてくれ」。そしてな少し奥に進んでいって、俯げに倒れ、祈つて言われた、「お父様、出来ることなら、どうかこの杯がわたしの前を通りすぎますように。しかし、わたしの願いどおりでなく、お心のとおりになればよいのです」。やがて弟子たちの所に来て、彼らが眠っているのを見ると、ペテロに言われる、「あなた達、そんなに、たった一時間もわたしと一しよに目を覚ましておられないのか。目を覚まして、誘惑に陥らないように祈つていなさい。心ははやっても、体が弱いのだから」。また二度目に向こうへ行つて、祈られた、「お父様、どうしてもわたしは飲まねば通りすぎない杯ならば、どうかお心のままになさってください」。また来て見られると、彼らはまたもや眠っていた。悲しみのために疲れて、瞼が重かつたのである。イエスは彼らをのこして、もう一度向こうに行き、また同じ言葉で、三度目に祈られた。それから弟子たちの所に来て、また眠っているのを見ると言われる、「もつと眠りたいのか。休みたいのか。そら、人の子が罪人どもの手に渡される時が近づいた。立て。行こう。身よ、わたしを売るものが近づいてきた！」とある。

*

*

さて、この場面は、イエスは弟子たちと一しよにオリブ山の麓のゲッセマネという地所に着くと、「……わたしがあちら（奥）へ行つて（神に）祈っている間、ここに坐つて待つておれ」と言い、それを「三度」繰り返して、「三度」戻つて来ると、弟子たちは、そのたびにみな眠っていたとあるが、（それは、弟子たちは疲れていたとともに、深夜一時〜四時頃のことでもあるからであり）、大事なものは、そこではなく、イエスはたった一人で神（お父様）に何を祈ったかという問題であり、それは、「……人の身であるイエスは、結局、十字架にかけられて死ななければならぬのでしようか？」、それを本文で見ると、「……お父様、出来ることなら、どうかこの杯がわたしの前を通りすぎますように。しかし、わたしの願いどおりでなく、お心のとおりになればよいのです」。つまり、「……神（お父様）がわたしの死をお望みならば、そのお心どおりになされば、それでよいのです」となるのである。それでは、イエスはなぜ死ななければならないのか？ それは、「……人の身であるイエスは、その人の身を脱ぎ捨てて、初めて「聖霊イエス・キリスト」になれるのである。それがまさに「イエスの復活」になるのである。

捕縛

イエスの言葉がまだ終らぬうちに、見よ、十二人の一人ユダが来た。大祭司連、国の長老から派遣された大勢の人の群が、剣や棍棒を持ってついで来た。イエスを売る者は、「わたしが接吻するのがその人だ。それを捕えよ」と、あらかじめ合図をきめておいた。そこでききなりイエスに近寄つて、「先生、御機嫌よう」と言つて接吻した。イエスはユダに言われた、「友よ、そのために来たのではあるまいが！」、その時人々が進み寄つて、イ

エスに手をかけて捕えた。すると、見よ、イエスと一しよにいたひとりの手をのぼして剣を抜き、大祭司の下男に切りかかって片耳をそぎ落としてしまった。その時イエスが言われる。「剣を鞘におさめよ。剣による者は皆、剣によつて滅びる。それとも、父上にお願いで十二軍団以上の天使を今すぐ送っていたことが、わたしに出来ないと思うのか。しかしそれでは、かならずこうなる（これは救世主は罪人のようにあつかわれる）、とある聖書の言葉は、どうして成就するのか」。その時イエスは群の人々に言われた。「強盗にでも向かうように、剣や棍棒を持つてつかまえて来たのか。しかしこれはみな、救世主は罪人のようにあつかわれるという預言者たちの聖書の言葉が成就するために起こったのである」。その時弟子たちは皆イエスをすてて逃げた。（この場面は、歴史上、実際イエスはどのように捕縛され、そして、弟子たちはどうしたが記述されている部分である。）

最高法院の審問

人々はイエスを捕えると、大祭司カヤバの所に引いていった。そこには前もって最高法院の役人、すなわち大祭司連、聖書学者、長老たちが集まっていた。ペテロは見えがくれにイエスについて大祭司の官邸まで行き、中庭へ入つて下役らと一しよに坐っていた。成り行きを見ようとしたのである。大祭司連をはじめ最高法院は、イエスを死刑にしようとしてしきりにイエスに不利な偽証をさがした。しかし偽証者は多く出たが、証拠は見つからなかった。最後に二人のものが出て言った。「この人は『上の宮をこわして、三日のうちを立てて見せる』といった」。そこで大祭司は立ち上がってイエスに言った。「何も答えないのか。この人たちはあんなにお前に不利益な証言をしているが、あれはどうだ」。しかしイエスは黙つておられた。大祭司が言った。「生ける神に誓つてわれわれにこたえよ。お前が、神の子救世主か」。イエスははじめて口を開いて彼に言われる、「そう言われるなら御意見に任せる。だが、わたしは言う。あなた方は今後（人の子わたしが大能の神の右に座り、雲に乗って来るのを）見るであろう」。そこで大祭司は自分の上着を引き裂いて言った、「冒瀆だ！ これ以上、なんで証人の必要があるう。諸君は今ここにおのれを神の子とする許しがたい冒瀆を聞かれた。このものの処分について、お考えを承りたい」。「死罪を相当とする」と彼らが答えた。それから法院の役人のある者はイエスの顔に唾をかけ、拳でうち、ある者は目隠しをして棒でたたきながら、「おい救世主、だれがぶつたか、当ててみる」と言った。

ペテロの否認

ペテロは外で中庭に坐っていた。するとひとりの女中が寄つてきて、「あなたもあのガリヤ人イエスと一しよだった」と言った。しかしペテロは皆の前で、「何をあなたが言っているのかわからない」と言つて打ち消した。そして玄関に出てゆくと、ほかの女中がペテロを見て、そこにいる人たちに「この人はあのナザレ人イエスと一しよだった」と言う。ペテロは誓いまで立てて、「そんな男は知らない」と、また打ち消した。しばらくすると、そこに立っていた人たちが寄つてきてペテロに言った。「確かにあなたもあの仲間だ。あなたの国訛りでもそれがわかる」。そこでペテロは、「そんな男は知らない。これが嘘な

ら、呪われてよい」と、幾たびも呪いをかけて誓った。するとすぐ、鶏が鳴いた。ペテロは、「鶏がなく前に、三度、わたしを知らないと言う」と言われたイエスの言葉を思い出し、外に出て行って、さめざめと泣いた。

第二十七章

一夜が明けると、大祭司連、国の長老たち全最高法院は満場一致でイエスを死刑にする決議をした。それから彼を縛り、引いて行って総督ピラスに渡した。

ユダくびれる

その時イエスを売ったユダは、イエスの判決がきまったのを見て後悔し、受け取ったシケル銀貨三十枚を大祭司連、長老たちに返して、「罪もない人の血を売って、悪いことをした」と言った。彼らがこたえた、「われわれの知ったことではない。お前が自分で始末しろ!」。ユダは銀貨を宮に投げ込んで去り、行って首をくくった。(以下省略)

*

*

さて、太宰治という人は、まさに『新約聖書』のこの場面の「この記述」を読んで、まさに『駆込み訴え』という作品の着想を得たに違いない。というのも、ユダという人は、もし百パーセント「金欲しさ」だけで「イエスを売った」のであれば、そのまま銀貨三十枚を持って、どこか遠くへ逃げてしまえばそれでよかったです。自殺などする必要はどこにもなかったのである。ところが、ユダという人は、「……イエスの判決がきまったのを見て後悔し、受け取ったシケル銀貨三十枚を大祭司連、長老たちに返して、『罪もない人の血を売って、悪いことをした』と言い、そして、ユダは銀貨を宮に投げ込んで去り、行って首をくくった」とある。つまり、「……ユダにはユダなりの『イエスへの思い』があったということであり、だからこそ、ユダはイエスと一しよに行動していたということでもあるのである。それでは、なぜ「……ユダは、イエスを裏切ったのか?」という大問題にぶつかることになるが、それを「太宰治という作家なりに読み解いたもの」が、まさに太宰治の『駆込み訴え』という作品になるのである。

それでは、歴史上のユダという人は、一体、なぜ「イエス」を裏切るようなことをしたのだろうか? それは、「……本人以外誰にも分かりようがないもの」であり、それがまさに「最も正しい答え」になるのである。(完)

*

*

五、東京八景

東京八景

序（冒頭部分）

伊豆の南、温泉が湧き出ているというだけで、他には何一つとるところの無い、つまらぬ山村である。戸数三十という感じである。こんなところは、宿泊料も安いであろうという、理由だけで、私はその索寞たる山村を選んだ。昭和十五年、七月三日の事である。その頃は、私にも、少しお金の余裕があったのである。けれども、それから先の事は、やはり真暗であった。小説が少しも書けなくなる事だつてあるかも知れない。二箇月間、小説が全く書けなかったら、私は、もとの無一文になる筈である。思えば、心細い余裕であったが、私にとつては、それだけの余裕でも、この十年間、はじめての事であつたのである。私が東京で生活をはじめたのは、昭和五年の春である。そのころ既に私は、Hという女と共同の家を持っていた。田舎の長兄から、月々充分の金を送ってもらつていたのだが、ばかな二人は、贅沢を戒め合つていながらも、月末には必ず質屋へ一品二品を持運んで行かなければならなかった。とうとう六年目に、Hとわかれた。私には、蒲団と、机と、電気スタンドと、行李一つだけが残つた。多額の負債も不気味に残つた。それから二年経つて、私は或る先輩のお世話で、平凡な見合い結婚をした。さらに二年を経て、はじめて私は一息ついた。貧しい創作集も既に十冊近く出版せられている。むこうから注文が来なくても、こちらで懸命に書いて持つて行けば、三つに二つは買ってもらえるような気がして来た。これからが、愛嬌も何も無い大人の仕事である。書きたいものだけを、書いて行きたい。甚だ心細い、不安な余裕ではあつたが、私は真底から嬉しく思つた。少くとも、もう一箇月間は、お金の心配をせずに好きなものを書いて行ける。私は自分の、その時の身の upper、嘘みたいな気がした。恍惚と不安の交錯した異様な胸騒ぎで、かえつて仕事に手が附かず、いたたまらなくなつた。

一、東京八景の構想

東京八景。私は、その短篇を、いつかゆつくり、骨折つて書いてみたいと思つていた。十年間の私の東京生活を、その時々々の風景に託して書いてみたいと思つていた。私は、ことし三十二歳である。日本の倫理に於ても、この年齢は、既に中年の域にはいりかけたことを意味している。また私が、自分の肉体、情熱に尋ねてみても、悲しい哉それを否定できない。覚えて置くがよい。おまえは、もう青春を失つたのだ。もつともらしい顔の三十男である。東京八景。私はそれを、青春への訣別の辞として、誰にも媚びずに書きたかつた。

あいつも、だんだん俗物になつて来たね。そのような無智な陰口が、微風と共に、ひそひそ私の耳にはいつて来る。私は、その度毎に心の中で、強く答える。僕は、はじめから俗物だつた。君には、気がつかなかったのかね。逆なのである。文学を一生の業として気構えた時、愚人は、かえつて私を粗し易しと見てとつた。私は、幽かに笑うばかりだ。万年若衆は、役者の世界である。文学には無い。

東京八景。私は、いまの此の期間にこそ、それを書くべきであると思つた。いまは、差

し迫った約束の仕事も無い。百円以上の余裕もある。いたずらに恍惚と不安の複雑な溜息をもらして狭い部屋の中を、うろろ歩き廻っている場合では無い。私は絶えず、昇らなければならぬ。

東京市の大地図を一枚買って、東京駅から、米原行の汽車に乗った。遊びに行くのではないんだぞ。一生涯の、重大な記念碑を、骨折って造りに行くのだぞ、と繰返し繰返し、自分に教えた。熱海で、伊東行の汽車に乗りかえ、伊東から下田行のバスに乗り、伊豆半島の東海岸に沿うて三時間、バスにゆられて南下し、その戸数三十の見る影も無い山村に降り立った。ここなら、一泊三円を越えることは無かるうと思つた。憂鬱堪えがたいばかりの粗末な、小さい宿屋が四軒だけ並んでいる。私は、Fという宿屋を選んだ。四軒の中では、まだしも、少しましなところが、あるように思われたからである。意地の悪そうな、下品な女中に案内されて二階に上り、部屋に通されて見ると、私は、いい年をして、泣きそうな気がした。三年まえに、私が借りていた荻窪の下宿屋の一室を思い出した。その下宿屋は、荻窪でも、最下等の代物であつたのである。けれども、この蒲団部屋の隣りの六畳間は、その下宿の部屋よりも、もっと安っぽく、侘しいのである。

「……他に部屋が無いのですか」、「……ええ。みんな、ふさがって居ります。ここは涼しいですよ」、「……そうですか」と、私は、馬鹿にされていたようである。服装が悪かつたせいかも知れない。「……お泊りは、三円五十銭と四円です。御中食は、また、別にいただきます。どういたしましょうか」、「……三円五十銭のほうにして下さい。中食は、たべたい時に、そう言います。十日ばかり、ここで勉強したいと思つて来たのですが」、「……ちよつと、お待ち下さい」と、女中は、階下へ行って、しばらくして、また部屋にやつて来て、「……あの、永い御滞在でしたら、前に、ただ置いて置く事になって居りまされど」、「……そうですか。いくら差し上げたら、いいでしょう」、「……さあ、いくらでも」と口ごもっている。

「……五十円あげましょうか」、「……はあ、私は机の上に、紙幣を並べた。たまらなくなつて来た。「……みんな、あげましょう。九十円あります。煙草錢だけは、僕は、こちらの財布に残してあります」、なぜ、こんなところに来たのだろうと思つた。「……相済みません。おあずかり致します」と言うのであつた。

女中は、去つた。怒つてはならない。大事な仕事がある。いまの私の中には、これ位の待遇が、相応しているのかも知れない、と無理矢理、自分に思い込ませて、トランクの底からペン、インク、原稿用紙などを取り出した。

十年ぶりの余裕は、このような結果であつた。けれども、この悲しさも、私の宿命の中に規定されて在つたのだと、もつともらしく自分に言い聞かせ、憶えてここで仕事をはじめた。――遊びに来たのでは無い。骨折りの仕事をしに来たのだ。私はその夜、暗い電燈の下で、東京市の大地図を机いっぱいに拡げた。

幾年振りで、こんな、東京全図というものを拡げて見る事か。十年以前、はじめて東京に住んだ時には、この地図を買い求める事さえ恥ずかしく、人に、田舎者と笑われはせぬかと幾度となく躊躇した後、とうとう一部、うむと決意し、ことさらに乱暴な自嘲の口調で買い求め、それを懐中し荒んだ歩きかたで下宿へ帰つた。夜、部屋を閉め切り、こっそり、その地図を開いた。赤、緑、黄の美しい絵模様。私は、呼吸を止めてそれに見入つた。隅田川。浅草。牛込。赤坂。ああなんでも在る。行こうと思えば、いつでも、すぐに

行けるのだ。私は、奇蹟を見るような気さえした。

今では、此の蚕かいこに食われた桑の葉のような東京市の全形を眺めても、そこに住む人、各々の生活の姿ばかりが思われる。こんな趣きの無い原っぱに、日本全国から、ぞろぞろ人が押し寄せ、汗だくで押し合いへし合い、一寸の土地を争って一喜一憂し、互に嫉視し、反目して、雌は雄を呼び、雄は、ただ半狂乱で歩きまわる。頗る唐突ずいぶに、何の前後の関聯かんれんも無く「埋木」という小説の中の哀しい一行が、胸に浮かんだ。「恋とは」「美しき事を夢みて、穢きたなき業わざをするものぞ」東京とは直接に何の縁も無い言葉である。

戸塚。——私は、はじめ、ここにいたのだ。私のすぐ上の兄が、この地に、ひとりで一軒の家を借りて、彫刻を勉強していたのである。私は昭和五年に弘前ひろのまきの高等学校を卒業し、東京帝大の仏蘭西文科に入学した。仏蘭西語を一字も解し得なかつたけれども、それでも仏蘭西文学の講義を聞きたかつた。辰野隆先生たつのゆたかを、ぼんやり畏敬いけいしていた。私は、兄の家から三町ほど離れた新築の下宿屋の、奥の一室を借りて住んだ。たとい親身の兄弟でも、同じ屋根の下に住んで居れば、気まずい事も起るものだ、と二人とも口に出しては言わないうが、そんなお互の遠慮が無言の裡うちに首肯せられて、私たちは同じ町内ではあつたが、三町だけ離れて住む事にしたのである。それから三箇月経って、この兄は病死した。二十七歳であつた。兄の死後も、私は、その戸塚の下宿にいた。二期期からは、学校へは、ほとんど出なかつた。世人の最も恐怖していたあの日蔭ひかげの仕事に、平気で手助けしていた。その仕事の一翼と自称する大袈裟おおげさな身振りの文学には、輕蔑けいべつを以て接していた。私は、その一期間、純粹な政治家であつた。

二、H（小川初代）との東京での生活

その年（昭和五年）の秋に、女が田舎からやって来た。私が呼んだのである。Hである。Hとは、私が高等学校へはいったとしの初秋に知り合つて、それから三年間あそんだ。無心の芸妓である。私は、この女の為に、本所区東駒形こまがたに一室を借りてやつた。大工さんの二階である。肉体的の關係は、そのとき迄いちども無かつた。故郷から、長兄がその女の事でやって来た。七年前に父を喪うしなつた兄弟は、戸塚の下宿の、あの薄暗い部屋で相会うた。兄は、急激に変化している弟の兇惡な態度に接して、涙を流した。必ず夫婦にしていただく条件で、私は兄に女を手渡す事にした。手渡す驕慢きょうまんの弟より、受け取る兄のほうが、数層倍苦しかつたに違いない。手渡すその前夜、私は、はじめて女を抱いた。兄は、女を連れて、ひとまず田舎へ歸つた。女は、始終ぼんやりしていた。ただいま無事に家に着きました、という事務的な堅い口調の手紙が一通来たきりで、その後は、女から、何の便りもなかつた。女は、ひどく安心してしまつていらしがつた。私には、それが不平であつた。こちらが、すべての肉親を仰天させ、母には地獄の苦しみを嘗なめさせて迄まで、戦つているのに、おまえ一人、無智な自信でぐつたりしているのは、みつとも無い事である、と思つた。毎日でも私に手紙を寄こすべきである、と思つた。私を、もつともつと好いてくれてもいい、と思つた。けれども女は、手紙を書きたがらないひとであつた。私は、絶望した。朝早くから、夜おそく迄、れいの仕事の手助けに奔走した。人から頼まれて、拒否した事は無かつた。自分の其の方面に於ける能力の限度が、少しずつ見えて来た。私は、二重に絶望した。銀座裏のバアの女が、私を好いた。好かれる時期が、誰にだつて一度あ

る。不潔な時期だ。私は、この女を誘って一緒に鎌倉の海へはいった。破れた時は、死ぬ時だと思っていたのである。れいの反神的な仕事にも破れかけた。肉体的にさえ、とても不可能なほどの仕事を、私は卑怯ひきょうと言われたくないばかりに、引受けてしまっていたのである。Hは、自分ひとりの幸福の事しか考えていない。おまえだけが、女じゃ無いんだ。おまえは、私の苦しみを知ってくれなかったから、こういう報いを受けるのだ。ざまを見る。私には、すべての肉親と離れてしまった事が一ばん、つらかった。Hとの事で、母にも、兄にも、叔母にも呆あきれられてしまったという自覚が、私の投身の最も直接的な一因であった。女は死んで、私は生きた。死んだひとの事に就いては、以前に何度も書いた。私の生涯の、黒点である。私は、留置場に入れられた。取調べの末、起訴猶予になった。昭和五年の歳末の事である。兄たちは、死にぞこないの弟に優しくしてくれた。

長兄はHを、芸妓の職から解放し、その翌あぐるとしの二月に、私の手許に送って寄こした。言約を潔癖けつぺきに守る兄である。Hはのんきな顔をしてやって来た。五反田ごたんだの、島津公分譲地の傍に三十円の家を借りて住んだ。Hは甲斐かい甲斐かいしく立ち働いた。私は、二十三歳、Hは、二十歳である。

三、反社会的な活動

五反田は、阿呆の時代である。私は完全に、無意志であった。再出発の希望は、みじんも無かった。たまに訪ねて来る友人達の、御機嫌ばかりをとって暮していた。自分の醜態の前科を、恥じるどころか、幽かに誇ってさえいた。実に、破廉恥な、低能の時期であった。学校へもやはり、ほとんど出なかった。すべての努力を嫌い、のほん顔でHを眺めて暮していた。馬鹿である。何も、しなかった。ずるずるまた、れいの仕事の手伝いなどを、はじめていた。けれども、こんどは、なんの情熱も無かった。遊民ニヒンの虚無。それが、東京の一隅にはじめて家を持った時の、私の姿だ。

そのとしの夏に移転した。神田・同朋町どうぼうちよう。さらに晩秋には、神田・和泉町いずみちよう。その翌年の早春に、淀橋よどばし・柏木かしわぎ。なんの語るべき事も無い。朱麟堂しゆりんどうと号して俳句に凝ったりしていた。老人である。例の仕事の手助けの為に、二度も留置場に入れられた。留置場から出る度に私は友人達の言いつけに従って、別な土地に移転するのである。何の感激も、また何の嫌悪も無かった。それが皆の為に善いならば、そうしましょう、という無気力きわまる態度であった。ぼんやり、Hと二人で、雌雄の穴居の一日一日を迎え送っているのである。Hは快活であった。一日に二、三度は私を口汚く吠鳴どなるのだが、あとをはけりとして英語の勉強をはじめるのである。私が時間割を作ってやって勉強させていたのである。あまり覚えなかったようである。英語はローマ字をやと読めるくらいになって、いつのまにか、止めてしまった。手紙は、やはり下手であった。書きたがらなかった。私が下書を作ってやった。あねご気取りが好きなようであった。私が警察に連れて行かれても、そんなに取乱すような事は無かった。れいの思想を、任侠にんきやう的なものと解して愉快がっていた日さえあった。同朋町、和泉町、柏木、私は二十四歳になっていた。

そのとしの晩春に、私は、またまた移転しなければならなくなった。またもや警察に呼ばれそうになって、私は、逃げたのである。こんどのは、少し複雑な問題であった。田舎の長兄に、出鱈目でたらめな事を言ってやって、二箇月分の生活費を一度に送ってもらい、それを

持つて柏木を引揚げた。家財道具を、あちこちの友人に少しずつ分けて預かってもらい、身のまわりの物だけを持つて、日本橋・八丁堀の材木屋の二階、八畳間に移った。私は北海道生まれ、落合一雄という男になった。流石さすがに心細かった。所持のお金を大事にした。どうにかならうという無能な思念で、自分の不安を誤魔化していた。明日に就いての心構えは何も無かった。何も出来なかった。時たま、学校へ出て、講堂の前の芝生に、何時間でも黙って寝ころんでいた。

四、H（小川初代）の男性遍歴を知る

或る日の事、同じ高等学校を出た経済学部の一学生から、いやな話を聞かされた。煮え湯を飲むような気がした。まさか、と思った。知らせてくれた学生を、かえって憎んだ。Hに聞いてみたら、わかる事だと思った。いそいで八丁堀、材木屋の二階に帰って来たのだが、なかなか言い出しにくかった。初夏の午後である。西日が部屋にはいつて、暑かった。私は、オラガビールを一本、Hに買わせた。当時、オラガビールは、二十五銭であった。その一本を飲んで、もう一本、と言ったら、Hに呶どな鳴られた。呶どな鳴られて私も、気持ちに張りが出て来て、きよう学生から聞いて来た事を、努めてさりげない口調で、Hに告げることが出来た。Hは半可はんか臭くさ、と田舎の言葉で言つて、怒つたように、ちらと眉をひそめた。それだけで、静かに縫い物をつづけていた。濁つた気配は、どこにも無かった。私は、Hを信じた。

その夜私は悪いものを読んだ。ルソオの懺悔録ざんげろくであった。ルソオが、やはり細君の以前の事で、苦汁を嘗めた箇所突き当り、たまらなくなつて来た。私は、Hを信じられなくなつたのである。その夜、とうとう吐き出させた。学生から聞かされた事は、すべて本当であった。もつと、ひどかった。掘り下げて行くと、際限が無いような気配さえ感ぜられた。私は中途で止めてしまった。

私だとして、その方面では、人を責める資格が無い。鎌倉の事件は、どうしたことだ。けれども私は、その夜は煮えくりかえつた。私はその日までHを、謂いわば掌中の玉のように大事にして、誇つていたのだということに氣附いた。こいつの為に生きていたのだ。私は女を、無垢むくのまままで救つたとはかり思つていたのである。Hの言うまを、勇者の如く單純に合点していたのである。友人達にも、私は、それを誇つて語つていた。Hは、このように氣象が強いから、僕の所へ来る迄は、守りとおす事が出来たのだと。目出度いとも、何とも、形容の言葉が無かつた。馬鹿息子である。女とは、どんなものか知らなかつた。私はHの欺瞞きまんを憎む気は、少しも起らなかつた。告白するHを可愛いとさえ思つた。背中を、さすつてやりたく思つた。私は、ただ、残念であつたのである。私は、いやになつた。自分の生活の姿を、棍棒で粉碎くわんぼうしたく思つた。要するに、やり切れなくなつてしまつたのである。私は、自首して出た。

五、「思い出」を遺書として綴る

検事の取調べが一段落して、死にもせず私は再び東京の街を歩いて来た。帰るところは、Hの部屋より他に無い。私はHのところへ、急いで行つた。侘しい再会である。共に卑屈

に笑いながら、私たちは力弱く握手した。八丁堀を引き上げて、芝区・白金三光町。大きい空家の、離れの一室を借りて住んだ。故郷の兄たちは、呆れ果てながらも、そつとお金を送つてよこすのである。Hは、何事も無かつたように元氣になつていた。けれども私は、少しずつ、どうやら阿呆から眼ざめていた。遺書を綴つた。「思い出」百枚である。今では、この「思い出」が私の処女作という事になつてゐる。自分の幼時からの悪を、飾らずに書いて置きたいと思つたのである。二十四歳の秋の事である。草蓬々の広い廃園を眺めながら、私は離れの一室に坐つて、めつきり笑を失つてゐた。私は、再び死ぬつもりでいた。きざと言へば、きざである。いい気なものであつた。私は、やはり、人生をドラマと見做してゐた。いや、ドラマを人生と見做してゐた。もう今は、誰の役にも立たぬ。唯一のHにも、他人の手垢が附いてゐた。生きて行く張合いが全然、一つも無かつた。ばかな、滅亡の民の一人として、死んで行こうと、覚悟をきめてゐた。時潮が私に振り当てた役割を、忠実に演じてやろうと思つた。必ず人に負けてやる、という悲しい卑屈な役割を。

六、「晩年」を書き上げる

けれども人生は、ドラマでなかつた。二幕目は誰も知らない。「滅び」の役割を以て登場しながら、最後まで退場しない男もいる。小さい遺書のもりで、こんな穢きたない子供もいましたという幼年及び少年時代の私の告白を、書き綴つたのであるが、その遺書が、逆に猛烈に気がかりになつて、私の虚無に幽かな燭燈ともがともつた。死に切れなかつた。その「思い出」一篇だけでは、なんとしても、不満になつて来たのである。どうせ、ここまで書いたのだ。全部を書いて置きたい。きょう迄の生活の全部を、ぶちまけてみたい。あれも、これも。書いて置きたい事が一ぱい出て来た。まず、鎌倉の事件を書いて、駄目。どこかに手落がある。さらに又、一作書いて、やはり不満である。溜息ついて、また次の一作にとりかかる。ピリオドを打ち得ず、小さいコンマの連続だけである。永遠においででの、あの悪魔デモンに、私はそろそろ食われかけていた。蠅螂とんちゆうの斧おのである。

私は二十五歳になつてゐた。昭和八年である。私は、このとしの三月に大学を卒業しなければならなかつた。けれども私は、卒業どころか、てんで試験にさえ出てゐない。故郷の兄たちは、それを知らない。ばかな事ばかり、やらかしたがそのお詫びに、学校だけは卒業して見せてくれるだろう。それくらいの誠実は持つてゐる奴だと、ひそかに期待してゐた様子であつた。私は見事に裏切つた。卒業する気は無いのである。信頼してゐる者を欺くことは、狂せんばかりの地獄である。それからの二年間、私は、その地獄の中に住んでゐた。来年は、必ず卒業します。どうか、もう一年、おゆるし下さい、と長兄に泣訴しては裏切る。そのとしも、そうであつた。その翌るとしも、そうであつた。死ぬるばかりの猛省と自嘲と恐怖の中で、死にもせず私は、身勝手な、遺書と称する一聯の作品に凝つてゐた。これが出来たならば。そいつは所詮しよせん、青くさい気取つた感傷に過ぎなかつたのかも知れない。けれども私は、その感傷に、命を懸けてゐた。私は書き上げた作品を、大きい紙袋に、三つ四つと貯蔵した。次第に作品の数も殖えて来た。私は、その紙袋に毛筆で、「晩年」と書いた。その一聯の遺書の、銘題のつもりであつた。もう、これで、おしまいだという意味なのである。芝の空家に買手が附いたとやらで、私たちは、そのとしの早春に、そこを引き上げなければならなかつた。学校を卒業できなかつたので、故郷からの仕

送りも、相当減額されていた。一層儉約をしなければならぬ。杉並区・天沼三丁目。知人の家の一部屋を借りて住んだ。その人は、新聞社に勤めて居られて、立派な市民であった。それから二年間、共に住み、実に心配をおかけした。私には、学校を卒業する気は、さらに無かった。馬鹿のように、ただ、あの著作集の完成にのみ、気を奪われていた。何か言われるのが恐しくて、私は、その知人にも、またHにさえ、来年は卒業出来るという、一時のがれの嘘をついていた。一週間に一度くらいは、ちゃんと制服を着て家を出た。学校の図書館で、いい加減にあれこれ本を借り出して読み散らし、やがて居眠りしたり、また作品の下書をつくったりして、夕方には図書館を出て、天沼へ帰った。Hも、またその知人も、私を少しも疑わなかった。表面は、全く無事であったが、私は、ひそかに、あせっていた。刻一刻、気がせいた。故郷からの仕送りが、切れないうちに書き終えたかった。けれども、なかなか骨が折れた。書いては破った。私は、ぶざまにもあの悪魔に、骨の髄まで食い尽されていた。

一年経った。私は卒業しなかった。兄たちは激怒したが、私はれいの泣訴した。来年は必ず卒業しますと、はつきり嘘を言った。それ以外に、送金を願う口実は無かった。実情はとても誰にも、言えたものではなかった。私は共犯者を作りたくなかったのである。私ひとり、完全に野良息子にして置きたかった。すると、周囲の人の立場も、はつきりして、いささかも私に巻添え食うような事がないだろうと信じた。遺書を作るために、もう一年などと、そんな突飛な事は言いつけるものでない。私は、ひとりよがりの謂わば詩的な夢想家と思われるのが、何よりいやだった。兄たちだって、私がそんな非現実的な事を言い出したら、送金したくても、送金を中止するより他は無かったろう。実情を知りながら送金したとなれば、兄たちは、後々世間の人から、私の共犯者のように思われるだろう。それは、いやだ。私はあくまで狡智佞弁の弟になって兄たちを欺いていなければならぬ、と盗賊の三分の理窟に似ていたが、そんなふうで大真面目に考えていた。私は、やはり一週間にいちどは、制服を着て登校した。Hも、またその新聞社の知人も、来年の卒業を、美しく信じていた。私は、せっぱ詰まった。来る日も来る日も、真黒だった。私は、悪人でない！人を欺く事は、地獄である。やがて、天沼一丁目。三丁目は通勤に不便のゆえを以て、知人は、そのとしの春に、一丁目の市場の裏に居を移した。荻窪駅の近くである。誘われて私たちも一緒に歩いて行き、その家の二階の部屋を借りた。私は毎夜、眠られなかった。安い酒を飲んだ。痰が、やたらに出た。病気かも知れぬと思うのだが、私は、それどころでは無かった。早く、あの、紙袋の中の作品集を纏めあげたかった。身勝手な、いい気な考えであろうが、私はそれを、皆へのお詫びとして残したかった。私に出来る精一ぱいの事であった。そのとしの晩秋に、私は、どうやら書き上げた。二十数篇の中、十四篇だけを選び出し、あとの作品は、書き損じの原稿と共に焼き捨てた。行李一杯ぶんは充分にあった。庭に持ち出して、きれいに燃やした。「……ね、なぜ焼いたの」と、Hは、その夜、ふつと言いつけた。「……要らなくなったから」と、私は微笑して答えた。「……なぜ焼いたの」と、同じ言葉を繰り返した。泣いていた。

七、鎌倉の山で縊死を企てる

私は身のまわりの整理をはじめた。人から借りていた書籍はそれぞれ返却し、手紙やノ

オトも、屑屋に売った。「晩年」の袋の中には、別に書状を二通こっそり入れて置いた。準備が出来た様子である。私は毎夜、安い酒を飲みに出かけた。Hと顔を合わせて居るのが、恐しかったのである。そのころ、或る学友から、同人雑誌を出さぬかという相談を受けた。私は、半ばは、いい加減であった。「青い花」という名前だったら、やってもいいと答えた。冗談から駒が出た。諸方から同志が名乗って出たのである。その中の二人と、私は急激に親しくなった。私は謂わば青春の最後の情熱を、そこで燃やした。死ぬる前夜の乱舞である。共に酔って、低能の学生たちを殴打した。穢れた女たちを肉親のように愛した。Hの筆筒は、Hの知らぬ間に、からっぽになつていた。純文芸冊子「青い花」は、そのとしの十二月に出来た。たった一冊出て仲間が四散した。目的の無い異様な熱狂に呆れたのである。あとには、私たち三人だけが残った。三馬鹿と言われた。けれども此の三人は生涯の友人であった。私には、二人に教えられたものが多く在る。

あくる年、三月、そろそろまた卒業の季節である。私は、某新聞社の入社試験を受けた。りしていた。同居の知人にも、またHにも、私は近づく卒業にいそいそしているように見せ掛けたかった。新聞記者になつて、一生平凡に暮すのだ、と言つて一家を明るく笑わせていた。どうせ露見する事なのに、一日でも一刻でも永く平和を持続させたくて、人を驚愕させるのが何としても恐しくて、私は懸命に其の場かぎりの嘘をついたのである。私は、いつでも、そうであつた。そうして、せっぱつまつて、死ぬ事を考える。結局は露見して、人を幾層倍も強く驚愕させ、激怒させるばかりであるのに、どうしても、その興覚めの現実を言い出し得ず、もう一刻、もう一刻と自ら虚偽の地獄を深めている。もちろん新聞社などへ、はいるつもりも無かつたし、また試験にパスする筈も無かつた。完璧の瞞着の陣地も、今は破れかけた。死ぬ時が来た、と思つた。私は三月中旬、ひとりで鎌倉へ行った。昭和十年である。私は鎌倉の山で縊死を企てた。

やはり鎌倉の、海に飛び込んで騒ぎを起してから、五年目の事である。私は泳げるので、海で死ぬのは、むずかしかった。私は、かねて確実と聞いていた縊死を選んだ。けれども私は、再び、ぶざまな失敗をした。息を、吹き返したのである。私の首は、人並はずれて太いのかも知れない。首筋が赤く爛れたままの姿で、私は、ぼんやり天沼の家に帰つた。自分の運命を自分で規定しようとして失敗した。ふらふら帰宅すると、見知らぬ不思議な世界が開かれていた。Hは、玄関で私の背筋をそつと撫でた。他の人も皆、よかつた、よかつたと言つて、私を、いたわつてくれた。人生の優しさに私は呆然とした。長兄も、田舎から駆けつけて来ていた。私は、長兄に厳しく罵倒されたけれども、その兄が懐しくて、慕わしくて、ならなかつた。私は、生まれてはじめてと言つていくくらいの不思議な感情ばかりを味わつた。

八、盲腸炎入院と薬物の乱用

思いも設けなかつた運命が、すぐ続いて展開した。それから数日後、私は劇烈な腹痛に襲われたのである。私は一昼夜眠らずに怵えた。湯たんぽで腹部を温めた。気が遠くなりかけて、医者呼んだ。私は蒲団のまま寝台車に乗せられ、阿佐ヶ谷の外科病院に運ばれた。すぐに手術された。盲腸炎である。医者に見せるのが遅かつた上に、湯たんぽで温めたのが悪かつた。腹膜に膿が流出していて、困難な手術になつた。手術して二日目に、咽喉

から血塊がいくらでも出た。前からの胸部の病気が、急に表面にあらわれて来たのであった。私は、虫の息になった。医者にさえはつきり見放されたけれども、悪業の深い私は、少しずつ恢復して来た。一箇月たつて腹部の傷口だけは癒着した。けれども私は伝染病患者として、世田谷区・経堂の内科病院に移された。Hは、絶えず私の傍に附いていた。ベエゼしてもならぬと、お医者に言われました、と笑つて私に教えた。その病院の院長は、長兄の友人であった。私は特別に大事にされた。広い病室を二つ借りて家財道具全部を持ち込み、病院に移住してしまつた。五月、六月、七月、そろそろ藪蚊が出て来て病室に白い蚊帳を吊りはじめたころ、私は院長の指図で、千葉県船橋町に転地した。海岸である。町はずれに、新築の家を借りて住んだ。転地保養の意味であつたのだが、これも、私の為に悪かつた。地獄の大動乱がはじまつた。私は、阿佐ヶ谷の外科病院にいた時から、いまわしい悪癖に馴染んでいた。麻痺剤の使用である。はじめは医者も私の患部の苦痛を鎮める為に、朝夕ガアゼの詰めかえの時にそれを使用したのであつたが、やがて私は、その薬品に抛らなければ眠れなくなつた。私は不眠の苦痛には極度にもろかつた。私は毎夜、医者にたのんだ。この医者は、私のからだを見放していた。私の願いを、いつでも優しく聞き容れてくれた。内科病院に移つてからも、私は院長に執拗にたのんだ。院長は三度に一度くらいは渋々応じた。もはや、肉体の為では無くて、自分の慚愧、焦躁を消す為に、医者に求めるようになっていたのである。私には佻しさを泳ぐる力が無かつた。船橋に移つてからは町の医院に行き、自分の不眠と中毒症状を訴えて、その薬品を強要した。のちには、その気の弱い町医者に無理矢理、証明書を書かせて、町の薬屋から直接に薬品を購入した。気が附くと、私は陰惨な中毒患者になつていた。たちまち、金につまつた。私は、その頃、毎月九十円的生活費を、長兄から貰つていた。それ以上の臨時の入費に就いては、長兄も流石に拒否した。当然の事であつた。私は、兄の愛情に報いようとする努力を何一つ、していない。身勝手に、命をいじくり廻してばかりいる。そのとしの秋以来、時たま東京の街に現れる私の姿は、既に薄穢い半狂人であつた。その時期の、様々の情ない自分の姿を、私は、みんな知つてゐる。忘れられない。私は、日本一の陋劣な青年になつていた。十円、二十円の金を借りて、東京へ出て来るのである。雑誌社の編輯員の面前で、泣いてしまつた事もある。あまり執拗たのんで編輯員に呶鳴られた事もある。その頃は、私の原稿も、少しは金になる可能性があつたのである。私が阿佐ヶ谷の病院や、経堂の病院に寝ている間に、友人達の奔走に依り、私の、あの紙袋の中の「遺書」は二つ三つ、いい雑誌に発表せられ、その反響として起つた罵倒の言葉も、また支持の言葉も、共に私には強烈すぎて狼狽、不安の為に逆上して、薬品中毒は一層すすみ、あれこれ苦しみの余り、のこのこ雑誌社に出掛けては編輯員または社長にまで面会を求めて、原稿料の前借をねだるのである。自分の苦悩に狂いすぎて、他の人もまた精一ぱいで生きているのだという当然の事実に気附かなかつた。あの紙袋の中の作品も、一篇残さず売り払つてしまつた。もう何も売れるものが無い。すぐには作品も出来なかつた。既に材料が枯渇して、何も書けなくなつていた。その頃の文壇は私を指さして、「才あつて徳なし」と評していたが、私自身は、「徳の芽あれども才なし」であると信じていた。私には所謂、文才というものは無い。からだごと、ぶつつけて行くより、てを知らなかつた。野暮天である。一宿一飯の恩義などという固苦しい道徳に悪くこだわつて、やり切れなくなり、逆にやけくそに破廉恥ばかり働く類である。私は厳しい保守的な家に育つた。借銭は、最悪の罪であつた。借

銭から、のがれようとして、更に大きい借銭を作った。あの薬品の中毒をも、借銭の慚愧ざんきを消すために、もつともつと、と自ら強くした。薬屋への支払いは、増大する一方である。私は白昼の銀座をめめそ泣きながら歩いた事もある。金が欲しかった。私は二十人ちかくの人から、まるで奪い取るように金を借りてしまった。死ねなかった。その借銭を、きれいに返してしまつてから、死にたく思っていた。

九、武蔵野病院に入院

私は、人から相手にされなくなった。船橋へ転地して一箇年経つて、昭和十一年の秋に私は自動車に乗せられ、東京、板橋区の或る病院に運び込まれた。一夜眠つて、眼が覚めてみると、私は脳病院の一室にいた。

一箇月そこで暮して、秋晴れの日の午後、やつと退院を許された。私は、迎えに来ていたHと二人で自動車に乗った。一箇月振りで逢つたわけだが、二人とも、黙っていた。自動車走り出して、しばらくしてからHが口を開いた。

「……もう薬は、やめるんだね」と、怒っている口調であった。「……僕は、これから信じないんだ」と、私は病院で覚えて来た唯一の事を言った。「そう」と現実家のHは、私の言葉を何か金銭的な意味に解したらしく、深く首肯うなずいて、「人は、あてになりませんよ」と言うので、「……おまえの事も信じないんだよ」と言うと、Hは気まずそうな顔をした。

船橋の家は、私の入院中に廃止せられて、Hは杉並区・天沼三丁目のアパートの一室に住んでいた。私は、そこに落ちついた。二つの雑誌社から、原稿の注文が来ていた。すぐに、その退院の夜から、私は書きはじめた。二つの小説を書き上げ、その原稿料を持って、熱海に出かけ、一箇月間、節度も無く酒を飲んだ。この後どうしていいか、わからなかった。長兄からは、もう三年間、月々の生活費をもらえる事になっていたが、入院前の山ほどの負債は、そのままに残っていた。熱海で、いい小説を書き、それで出来たお金でもって、目前の最も気がかりな負債だけでも返そうという計画も、私には在ったのであるが、小説を書くどころか、私は自分の周囲の荒涼に堪えかねて、ただ、酒を飲んでばかりいた。つくづく自分を、駄目な男だと思つた。熱海では、かえつて私は、さらに借銭を、ふやしてしまつた。何をしても、だめである。私は、完全に敗れた様子であつた。

私は天沼のアパートに帰り、あらゆる望みを放棄した薄よごれた肉体を、ごろりと横たえた。私は、はや二十九歳であつた。何も無かつた。私には、どてら一枚。Hも、着たきりであつた。もう、この辺が、どん底というものであるうと思つた。長兄からの月々の仕送りに縋すがつて、虫のように黙つて暮した。

十、妻の不倫を知る

けれども、まだまだ、それは、どん底ではなかつた。そのとしの早春に、私は或る洋画家から思いも設けなかつた意外の相談を受けたのである。ごく親しい友人であつた。私は話を聞いて、窒息しそうになつた。Hが既に、哀しい間違いを、していたのである。あの、不吉な病院から出た時、自動車の中で、私の何でも無い抽象的な放言に、ひどくどぎまぎ

したHの様子がふつと思ひ出された。私はHに苦勞をかけて来たが、けれども、生きて在る限りはHと共に暮して行くつもりでいたのだ。私の愛情の表現は拙いから、Hも、また洋画家も、それに気が附いてくれなかつたのである。相談を受けても、私には、どうする事も出来なかつた。私は、誰にも傷をつけたく無いと思つた。三人の中では、私が一番の年長者であつた。私だけでも落ちついて、立派な指図をしたいと思いますのだが、やはり私は、あまりの事に顛倒し、狼狽し、おろおろしてしまつて、かえつてHたちに輕蔑されたくらいであつた。何も出来なかつた。そのうちに洋画家は、だんだん逃腰になつた。私は、苦しい中でも、Hを不憫に思つた。Hは、もう、死ぬるつもりでいるらしかつた。どうにも、やり切れなくなつた時に、私も死ぬ事を考える。二人で一緒に死のう。神さまだつて、ゆるしてくれる。私たちは、仲の良い兄妹のように、旅に出た。水上温泉。その夜、二人は山で自殺を行った。Hを死なせては、ならぬと思つた。私は、その事に努力した。Hは、生きた。私も見事に失敗した。薬品を用いたのである。

十一、妻との別れと世間の酷評

私たちは、とうとう別れた。Hを此の上ひきとめる勇氣が私に無かつた。捨てたと言われてもよい。人道主義とやらの虚勢で、我慢を装つてみても、その後の日々の醜惡な地獄が明確に見えているような気がした。Hは、ひとりで田舎の母親の許へ歸つて行つた。洋画家の消息は、わからなかつた。私は、ひとりアパートに残つて自炊の生活をはじめた。焼酎を飲む事を覚えた。齒がぼろぼろに欠けて来た。私は、いやしい顔になつた。私は、アパートの近くの下宿に移つた。最下等の下宿屋であつた。私は、それが自分に、ふさわしいと思つた。これが、この世の見おさまと、門辺に立てば月かげや、枯野は走り、松は佇む。私は、下宿の四畳半で、ひとりで酒を飲み、酔つては下宿を出て、下宿の門柱に寄りかかり、そんな出鱈目な歌を、小声で呟いてゐる事が多かつた。二、三の共に離れがたい親友の他には、誰も私を相手にしなかつた。私が世の中から、どんなに見られているのか、少しづつ私にもわかつて来た。「……私は無智驕慢の無頼漢、または白痴、または下等狡猾の好色漢、にせ天才の詐欺師、ぜいたく三昧の暮しをして、金につまると狂言自殺をして田舎の親たちを、おどかす。貞淑の妻を、犬か猫のように虐待して、とうとう之を追い出した。その他、様々の伝説が嘲笑、嫌悪憤怒を以て世人に語られ、私は全く葬り去られ、廢人の待遇を受けていたのである」。私は、それに気が付き、下宿から一步も外に出たくなかつた。酒の無い夜は、塩せんべいを齧りながら探偵小説を読むのが、幽かに楽しかつた。雑誌社からも新聞社からも、原稿の注文は何も無い。また何も書きたくなくなつた。書けなかつた。けれども、あの病氣中の借錢に就いては、誰もそれを催促する人は無かつたが、私は夜の夢の中でさえ苦しんだ。私は、もう三十歳になつていた。

何の転機で、そうなつたらう。私は、生きなければならぬと思つた。故郷の家の不幸が、私にその当然の力を与えたのか。長兄が代議士に當選して、その直後に選挙違反で起訴された。私は、長兄の厳しい人格を畏敬している。周囲に悪い者がいたのに違ひない。姉が死んだ。甥が死んだ。従弟が死んだ。私は、それらを風聞に依つて知つた。早くから、故郷の人たちとは、すべて音信不通になつていたのである。相続く故郷の不幸が、寝そべつてゐる私の上半身を、少しづつ起してくれた。私は、故郷の家の大きさに、はにかんでい

たのだ。金持の子というハンデキャップに、やけくそを起していたのだ。不当に恵まれているという、いやな恐怖感が、幼時から、私を卑屈にし、厭世的えんせきにしていた。金持の子供は金持の子供らしく大地獄に落ちなければならぬという信仰を持っていた。逃げるのは卑怯だ。立派に、悪業の子として死にたいと努めた。けれども、一夜、気が附いてみると、私は金持の子供どころか、着て出る着物さえ無い賤民せんみんであった。故郷からの仕送りの金も、ことし一年で切れる筈だ。既に戸籍は、分けられて在る。しかも私の生まれて育った故郷の家も、いまは不仕合わせの底にある。もはや、私には人に恐縮しなければならぬような生得の特権が、何も無い。かえって、マイナスだけである。その自覚と、もう一つ。下宿の一室に、死ぬる気魄きはくも失って寝ころんでいる間に、私のからだが無思議にめきめき頑健になって来たという事実をも、大いに重要な一因として挙げなければならぬ。なお又、年齢、戦争、歴史観の動揺、怠惰への嫌悪、文学への謙虚、神は在る、などといういろいろ挙げる事も出来るであろうが、人の転機の説明は、どうも何だか空々しい。その説明が、ぎりぎりに正確を期したものであっても、それでも必ずどこかに嘘の間隙かんげきが匂っているものだ。人は、いつも、こう考えたり、そう思ったりして行路を選んでいるものではないからでもある。多くの場合、人はいつのまにか、ちがう野原を歩いている。

十二、本気で文筆生活を志願す

私は、その三十歳の初夏、はじめて本気に、文筆生活を志願した。思えば、晩い志願であった。私は下宿の、何一つ道具らしい物の無い四畳半の部屋で、懸命に書いた。下宿の夕飯がお櫃ひつに残れば、それでこっそり握りめしを作って置いて深夜の仕事の空腹に備えた。こんどは、遺書として書くのではなかった。生きて行く為に、書いたのだ。一先輩は、私を励ましてくれた。世人がこぞって私を憎み嘲笑していても、その先輩作家だけは、始終かわらず私の人間をひそかに支持して下さった。私は、その貴い信頼にも報いなければならぬ。やがて、「姥捨うばすて」という作品が出来た。Hと水上温泉へ死に行つた時の事を、正直に書いた。之は、すぐに売れた。忘れずに、私の作品を待っていてくれた編輯者が一人あつたのである。私はその原稿料を、むだに使わず、まず質屋から、よそ行きの着物を一まい受け出し、着飾って旅に出た。甲州の山である。さらに思いをあらたにして、長い小説にとりかかるつもりであった。

十三、甲州への旅と石原美和子との結婚

甲州には、満一箇年いた。長い小説は完成しなかったが、短篇は十以上、発表した。諸方から支持の声を聞いた。文壇を有りたい所だと思つた。一生そこで暮し得る者は、さいわいなる哉かなと思つた。翌年、昭和十四年の正月に、私は、あの先輩のお世話で平凡な見合い結婚をした。いや、平凡では無かった。私は無一文で婚礼の式を挙げたのである。甲府市のまちはずれに、二部屋だけの小さい家を借りて、私たちは住んだ。その家の家賃は、一箇月六円五十銭であった。私は創作集を、つづけて二冊出版した。わずかに余裕が出来た。私は気がかりの借金を少しずつ整理したが、之は中々の事業であった。そのとしの初秋に東京市外、三鷹町みたかに移住した。もはや、ここは東京市ではない。私の東京市の生活は、

荻窪の下宿から、かばん一つ持って甲州に出かけた時に、もう中断されてしまっていたのである。

私は、いまは一箇の原稿生活者である。旅に出ても宿帳には、こだわらず、文筆業と書いている。苦しさは在っても、めったに言わない。以前にまさる苦しさは在っても私は微笑を装っている。ばか共は、私を俗化したと言っている。毎日、武蔵野の夕陽は、大きい。ぶるぶる煮えたぎって落ちていく。私は、夕陽の見える三畳間にあぐらをかいて、恠しい食事をしながら妻に言った。「……僕は、こんな男だから出世も出来ないし、お金持にもならない。けれども、この家一つは何とかして守って行くつもりだ」と、その時に、ふと東京八景を思いついたのである。過去が、走馬燈のように胸の中で廻った。

十四、東京八景

ここは東京市外ではあるが、すぐ近くの井の頭公園も、東京名所の一つに数えられているのだから、此の武蔵野の夕陽を東京八景の中に加えたって、差支え無い。あと七景を決定しようと、私は自分の、胸の中のアルバムを繰ってみた。併しこの場合、芸術になるのは、東京の風景ではなかった。風景の中の私であった。芸術が私を欺いたのか。私が芸術を欺いたのか。結論。芸術は、私である。

戸塚の梅雨。本郷の黄昏たそがれ。神田の祭礼。柏木の初雪。八丁堀の花火。芝の満月あまねま。天沼の蝸ひぐらし。銀座の稲妻。板橋脳病院のコスモス。荻窪の朝霧。武蔵野の夕陽。思い出の暗い花が、ぱらぱら躍って、整理は至難であった。また、無理にこさえて八景にまとめるのも、げびた事だと思った。そのうちに私は、この春と夏、更に二景を見つけてしまったのである。

ことし四月四日に私は小石川の大先輩、Sさんを訪れた。Sさんには、私は五年前の病気の時に、ずいぶん御心配をおかけした。ついには、ひどく叱られ、破門のようになっていたのであるが、ことしの正月には御年始に行き、お詫わびとお礼を申し上げた。それから、ずっとまた御無沙汰して、その日は、親友の著書の出版記念会の発起人になってもらいに、あがったのである。御在宅であった。願いを聞きいていただき、それから画のお話や、芥川龍之介の文学に就いてのお話などを伺った。「……僕は君には意地悪くして来たような気もするが、今になってみると、かえってそれが良い結果になったようで、僕は嬉しいと思っているのだ」と、れいの重い口調で、そうも言われた。自動車と一緒に上野に出かけた。美術館で洋画の展覧会を見た。つまらない画が多かった。私は一枚の画の前に立ちどまった。やがてSさんも傍へ来られて、その画に、ずっと顔を近づけ、

「……あまいね」と無心に言われた。「……だめです」と、私も、はつきり言った。Hの、あの洋画家の画であった。

美術館を出て、それから茅場町かやばちようで「美しき争い」という映画の試写を一緒に見せていただき、後に銀座へ出てお茶を飲み一日あそんだ。夕方になって、Sさんは新橋駅からバスで帰ると言われるので、私も新橋駅まで一緒に歩いた。途中で私は、東京八景の計画をSさんにお聞かせした。

「……さすがに、武蔵野の夕陽は大きいですよ」と、Sさんは新橋駅前の橋の上で立ちどまり、「……画になるね」と低い声で言って、銀座の橋のほうを指さした。「はあ」と私も立ちどまって、眺めた。「……画になるね」と重ねて、ひとりごとのようにして、お

っしやった。眺められている風景よりも、眺めているSさんと、その破門の悪い弟子の姿を、私は東京八景の一つに編入しようと思った。

十五、妻の妹の婚約者の戦地への出兵

それから、ふたつきほど経って私は、更に明るい一景を得た。某日、妻の妹から、「……いよいよTが明日出発する事になりました。芝公園で、ちよつと面会出来るそうです。明朝九時に、芝公園へ来て下さい。兄上からTへ、私の気持を、うまく伝えてやって下さい。私は、ばかですから、Tには何も言っていないのです」という速達が来たのである。妹は二十二歳であるが、柄が小さいから子供のように見える。昨年、T君と見合いをして約婚したけれども、結納の直後にT君は応召になって東京の或る聯隊れんたいにはいった。私も、いちど軍服のT君と逢って三十分ほど話をした事がある。はきはきした、上品な青年であった。明日いよいよ戦地へ出発する事になった様子である。その速達が来てから、二時間も経たぬうちに、また妹から速達が来た。それには、「……よく考えてみましたら、先刻のお願いは、蓮葉はすはな事だと気が付きました。Tには何もおっしゃらなくてもいいのです。ただ、お見送りだけ、して下さい」と書いてあったので私も、妻も嘖き出した。ひとりであつてこ舞いしている様が、よくわかるのである。妹は、その二、三日前から、T君の両親の家に手伝いに行っていたのである。

翌朝、私たちは早く起きて芝公園に出かけた。増上寺の境内に、大勢の見送り人が集っていた。カアキ色の団服を着ていそがしげに群集を掻きわけて歩き廻っている老人を、つかまえて尋ねると、T君の部隊は、山門の前にちよつと立ち寄り、五分間休憩して、すぐにまた出発、という答えであつた。私たちは境内から出て、山門の前に立ち、T君の部隊の到着を待った。やがて妹も小さい旗を持って、T君の両親と一緒にやって来た。私は、T君の両親とは初対面である。まだはつきり親戚しんせきになつたわけでもなし、社交下手の私は、ろくに挨拶もしなかつた。軽く目礼しただけで、「……どうだ、落ちついてるのか？」と妹のほうに話しかけた。「……なんでもないさ」と妹は、陽気に笑つて見せた。「……どうして、こうなんでしょう」と、妻は顔をしかめた。「……そんなに、げらげら笑つて」。

T君の見送り人は、ひどく多かつた。T君の名前を書き記した大きい幟のぼりが、六本も山門の前に立ちならんだ。T君の家の工場で働いている職工さん、女工さんたちも、工場を休んで見送りに来た。私は皆から離れて、山門の端のほうに立った。ひがんでいたのである。T君の家は、金持だ。私は、齒も欠けて、服装もだらしない。袴はかまもはいていなければ、帽子さえかぶっていない。貧乏文士だ。息子の許嫁いなすけの薄穢うすけい身内が来た、とT君の両親たちは思っているにちがいない。妹が私のほうに話しに来て、「……おまえは、きょうは大事な役なのだから、お父さんの傍に附いていなさい」と言つて追いやつた。T君の部隊は、なかなか来なかつた。十時、十一時、十二時になつても来なかつた。女学校の修学旅行の団体が、遊覧バスに乗つて、幾組も目の前を通る。バスの扉に、その女学校の名前を書いた紙片が貼りつけられて在る。故郷の女学校の名もあつた。長兄の長女も、その女学校にはいつている筈である。乗っているのかも知れない。この東京名所の増上寺山門の前に、ばかな叔父が、のっそり立っているさまを、叔父とも知らず無心に眺めて通つたのかも知れない等と思つた。二十台ほど、絶えては続き山門の前を通り、バスの女車掌

がその度毎に、ちやうど私を指さして何か説明をはじめるのである。はじめは平気を装っていたが、おしまいには、私もポオズをつけてみたりなどした。バルザック像のようにゆったりと腕組みした。すると、私自身が、東京名所の一つになってしまったような気さえて来たのである。一時ちかくなつて、来た、来たという叫びが起つて、間もなく兵隊を満載したトラックが山門前に到着した。T君は、ダットサン運転の技術を体得していたので、そのトラックの運転台に乗っていた。私は、人ごみのうしろから、ぼんやり眺めていた。

「兄さん」と、いつの間にか私の傍に来ていた妹が、そう小声で言つて、私の背中を強く押した。気を取り直して、見ると、運転台から降りたT君は、群集の一ばんうしろに立っている私を、いち早く見つけた様子で拳手の礼をしているのである。私は、それでも一瞬疑つて、あたりを見廻し躊躇したが、やはり私に礼をしているのに違ひなかつた。私は決意して群集を掻きわけ、妹と一緒にT君の面前まで進んだ。

「……あとの事は心配ないんだ。妹は、こんなばかりですが、でも女の一ばん大事な心掛は知っている筈なんだ。少しも心配ないんだ。私たち皆で引き受けます」と、私は、珍しく、ちつとも笑わずに言つた。妹の顔を見ると、これもやや仰向になつて緊張している。T君は、少し顔を赤らめ、黙つてまた拳手の礼をした。

「……あと、おまえから言うこと無いか？」と、こんどは私も笑つて、妹に尋ねた。妹は、「……もう、いい」と顔を伏せて言つた。

すぐ出発の号令が下つた。私は再び人ごみの中にこそそ隠れて行つたが、やはり妹に背中を押されて、こんどは運転台の下まで進出してしまった。その辺には、T君の両親が立っているだけである。

「……安心して行つて来給え」と、私は大きい声で言つた。T君の厳父は、ふと振り返つて私の顔を見た。ばかに出しやばる、こいつは何者という不機嫌の色が、その厳父の眼つきに、ちらと見えた。けれども私は、その時は、たじろがなかつた。人間のプライドの窮極の立脚点は、あれにも、これにも死ぬほど苦しんだ事があります、と言ひ切れる自覚ではないか。私は丙種合格で、しかも貧乏だが、いまは遠慮する事は無い。東京名所は、更に大きい声で、「……あとは、心配ないぞ！」と叫んだ。これからT君と妹との結婚の事で、万一むずかしい場合が惹起したところで、私は世間体などに構わぬ無法者だ、必ず二人の最後の力になつてやれると思つた。

増上寺山門の一景を得て、私は自分の作品の構想も、いまや十分に弓を、満月の如くきりりと引きしぼつたような気がした。それから数日後、東京市の大地図と、ペン、インク、原稿用紙を持つて、いさんと伊豆に旅立つた。伊豆の温泉宿に到着してからは、どんな事になつたか。旅立つてから、もう十日も経つけれど、まだ、あの温泉宿に居るようである。何をしている事やら。(完)

*

*

さて、この『東京八景』という作品は、太宰治という作家を知る上では極めて大事な作品であり、太宰治(二十一歳〜三十二歳)までの間、東京でどのように過ごし、そして、どのようなことが実際にあつたのかを知る上では、非常に貴重な内容であり、この時期に關しては、私の書いた『人間失格』のこの時期の部分を読んでもらえれば、より詳しくその内容を知ることができ得るかと思う。そして、昭和十六年(一九四一年)十二月

八日には、いよいよ「太平洋戦争」（つまり「真珠湾攻撃」）が勃発するのである。太宰治、三十二歳の時である。それが、まさに当時の「戦地への出兵」という実に生々しい出来事につながるのである。それでは、その後、戦時中、太宰治という人は、どのように過ごしたのかという事がより詳しく記述されているのが、まさに次の『十五年間』という作品になるのである。

*

*

六、十五年間

十五年間

序（冒頭部分）

れいの戦災をこうむり、自分ひとりなら、またべつだが、五歳と二歳の子供をかかえているので窮し、とうとう津軽の生家にもぐり込んで、親子四人、居候いそうろうという身分になった。たいていの人は、知っているかと思うが、私は生家の人たちと長いこと、具合の悪い間柄になっていた。げびたげびた（下品な）言い方をすれば、私は二十代のふしだらのために勘当されていたのである。

それが、二度も罹災りさいして、行くところがなくなり、ヨロシクタノムと電報を發し、のこの生家に戻り込んだ。そうして間もなく戦いが終わり、私は和服の着流しで故郷の野原を、五歳の女兒を連れて歩きまわったりなど出来るようになった。

まことに、妙な気持ちのものであった。私はもう十五年間も故郷から離れていたのだが、故郷はべつだん変わっていない。そうしてまた、その故郷の野原を歩きまわっている私も、ただの津軽人である。十五年間も東京で暮していながら、一向に都会人らしくないのである。首筋太く鈍重な、私はやはり百姓である。いったい東京で、どんな生活をして来たのだろうか。ちつとも、あか抜けてやしないじゃないか。私は不思議な気がした。

そうして、或る眠られぬ一夜、自分の十五年間の都会生活について考え、この際もういちど、私の回想記を書いてみようかと思立った。もういちど、というわけは、五年くらい前に、私は「東京八景」という題で私のそれまでの東京生活をいつわらずに書いて発表した事があるからである。しかし、それから五年経ち、大戦の辛苦しんくをなめるに及んで、あの「東京八景」だけでは、何か足りないような気がして、こんどは一つ方向をかえ、私がこれまで東京において発表して来た作品を主軸にして、私という津軽の土百姓の血統の男が、どんな都会生活をして来たかを書きため、また「東京八景」以後の大戦の生活をも補足し、そうして、私の田舎いなかくさい本質をきわめたいと思った。

一、最初の頃の作品

私が東京においてはじめて発表した作品は、「魚服記」という十八枚の短篇小説で、その翌月から「思い出」という百枚の小説を三回にわけて発表した。いずれも、「海豹かいひょう」という同人雑誌に発表したものである。昭和八年である。私が弘前ひろさきの高等学校を卒業し、東京帝大のフランス文科に入学したのは昭和五年の春であるから、つまり、東京へ出て三年目に小説を発表したわけである。けれども私が、それらの小説を本気で書きはじめたのは、その前年からの事であった。その頃の事情を『東京八景』には次のように記されている。

「……けれども私は、少しずつ、どうやらあほうから目ざめていた。遺書つづを綴った。『思い出』百枚である。今では、この『思い出』が私の処女作という事になっている。自分の幼時からの悪を、飾らずに書いておきたいと思ったのである。二十四歳の秋の事である。草ぼうぼうの広い庭園をながめながら、私は離れの一室にすわって、めっきり笑いを失っていた。私は、再び死ぬつもりでいた。きざと言え、きざである。いい気なものであった。私は、やはり、人生をドラマと見なしていた。いや、ドラマを人生と見なしていた。

(中略)けれども人生は、ドラマでなかった。二幕目は誰も知らない。「滅び」の役割をもって登場しながら、最後まで退場しない男もいる。小さい遺書のつもりで、こんなきたない子供もいましたという幼年及び少年時代の私の告白を、書き綴ったのであるが、その遺書が、逆に猛烈に気がかりになって、私の虚無にかすかな燭燈がともった。死に切れなかった。その『思い出』一篇だけでは、なんととしても、不満になって来たのである。どうせ、ここまで書いたのだ。全部を、書いておきたい。きょう迄の生活の全部を、ぶちまけてみたい。あれも、これも。書いておきたい事が一ぱい出て来た。まず、鎌倉の事件を書いて、だめ。どこかに手落ちがある。さらにまた、一作書いて、やはり不満である。ため息ついて、また次の一作にとりかかる。ピリオドを打ち得ず、小さいコンマの連続だけである。永遠においておいでの、あの悪魔に、私はそろそろ食われかけていた。蠍の斧(無謀で、身のほどをわきまえない行ないをすること)である。

私は二十五歳になっていた。昭和八年である。私は、この年の三月に大学を卒業しなければならなかった。けれども私は、卒業どころか、てんで試験にさえ出ていない。故郷の兄たちは、それを知らない。ばかな事ばかり、やらかしたがそのおわびに、学校だけは卒業して見せてくれるだろう。それくらいの誠実は持っている奴だと、ひそかに期待していた様子であった。私は見事に裏切った。卒業する気はないのである。信頼している者を欺くことは、狂せんばかりの地獄である。それからの二年間、私は、その地獄の中に住んでいた。来年は、必ず卒業します。どうか、もう一年、おゆるし下さい、と長兄に泣訴しては裏切る。その年も、そうであった。その翌年も、そうであった。死ぬるばかりの猛省と自嘲と恐怖の中で、死にもせず私は、身勝手な、遺書と称する一聯の作品に凝っていた。これが出来たならば。そいつは所詮、青くさい気取った感傷に過ぎなかったのかも知れない。けれども私は、その感傷に、命をかけていた。私は書き上げた作品を、大きい紙袋に、三つ四つと貯蔵した。次第に作品の数もふえて来た。私は、その紙袋に毛筆で、「晩年」と書いた。その一聯の遺書の、銘題のつもりであった。もう、これで、おしまいだという意味なのである」。

ちなみに、『東京八景』には、その年の晩秋に、私は、どうやら書き上げた。二十数篇の中、十四篇だけを選び出し、あとの作品は、書き損じの原稿と共に焼き捨てた。行李一杯ぶんは充分にあった。庭に持ち出して、きれいに燃やした。「……ね、なぜ焼いたの」とH(小川初代)は、その夜、ふつと言い出した。「……要らなくなったから」と私は微笑して答えた。「……なぜ焼いたの」と同じ言葉を繰り返した。泣いていたとある。

*

*

こんなところがまあ、当時の私の作品のいわゆる、「楽屋裏」であった。この紙袋の中の作品を、昭和八、九、十、十一と、それから四箇年のあいだに全部発表してしまったが、書いたのは、おもに昭和七、八の両年であった。ほとんど二十四歳と二十五歳の間の作品なのである。私はそれからの二、三年間は、人から言われる度に、ただその紙袋の中から、一篇ずつ取り出して与えると、それでよかった。

昭和八年、私が二十五歳の時に、その「海豹」という同人雑誌の創刊号に発表した「魚服記」という十八枚の短篇小説は、私の作家生活の出発になったのであるが、それが意外の反響を呼んだので、それまで私の津軽訛りの泥くさい文章をていねいに直して下さっていた井伏さんは驚き、「……そんな、評判なんかになるはずはないんだがね。いい気にな

「つちやいけないよ、何かの間違いかもわからない」と実に不安そうな顔をしておっしゃった。そうして井伏さんはその後、また、いつまでも、或いは何かの間違いかもわからない、とハラハラしていらっしやる。永遠に私の文章について不安をいだいてくれる人は、この井伏さんと、それからの津軽の生家の兄かも知れない。このお二人は、共にことし四十八歳。私より十一、年上であって、兄の頭は既にはげて光り、井伏さんも近年めつきり白髪がふえた。いずれもなかなか稽古けいこがきびしかった。性格も互いにどこやら似たところがある。私は、しかし、この人たちに育てられたのだ。この二人に死なれたら、私はひどく泣くだろうと思われる。

『魚服記』を発表し、井伏さんは、「何かの間違いかもわからない」と言って心配してくれているのに、私は田舎者いなかもののずうずうしさで、さらにその年とし『思い出』という作品を発表し、もはや文壇の新人という事になった。そうしてその翌る年には、他のかなり有名な文芸雑誌などから原稿の依頼を受けたりしていたが、原稿料は、あつたりなかったり、あつても一枚三十銭とか五十銭とか、ひどく安いもので、当時最も親しくつき合っていた学友などと一緒におでん屋でお酒を飲みたくても、とても足りない金額であった。『晩年』という創作集なども出版せられ、太宰という私の筆名だけは世に高くなったが、私は少しも幸福にならなかった。私のこれまでの生涯を追想して、かすかにでも休養のゆとりを感じた一時期は、私が三十歳の時、いまの女房を井伏さんの媒酌でもらって、甲府市の郊外に一箇月六円五十銭の家賃の、最小の家を借りて住み、二百円ばかりの印税を貯金して誰とも逢わず、午後の四時頃から湯豆腐でお酒を悠々ゆうゆうと飲んでいたあの頃である。誰に気かねもいらなかった。しかし、それも、たった三、四か月でだめになった。二百円の貯金なんて、そんなにいつまでもあるわけではない。私はまた東京へ出て来て、荒っぽいすさんだ生活に、身を投じなければならなかった。私の半生は、ヤケ酒の歴史である。

秩序ある生活と、アルコールやニコチンを抜いた清潔なからだを純白のシャツに横たえる事とを、いつも念願にしていながら、私は薄ぎたない泥酔者として場末の露地をうろつきまわっていたのである。なぜ、そのような結果になってしまうのだろう。それを今ここで、二言か三言で説明し去るのも、あんまりいい気なもののように思われる。それは私たちの年代の、日本の知識人全部の問題かも知れない。私のこれまでの作品ごとごとくを挙げて答えてもなお足りずとする大きい問題かも知れない。

二、サロン芸術

私はサロン芸術を否定した。サロン思想を嫌悪けんおした。要するに私は、サロンなるものには居たたまらなかつたのである。

それは、知識の淫売店いんばいである。いや、しかし、淫売店いんばいにだって時たま真実の宝玉が発見できるだろう。それは、知識のどろぼう市である。いや、しかし、どろぼう市にだってほんものの金の指環ゆびわがころがっていない事もない。サロンは、ほとんど比較を絶したものである。いつそ、こうとでも言おうかしら。それは、知識の「大本営発表」である。それは、知識の「戦時日本の新聞」である。

戦時日本の新聞の全紙面において、一つとして信じられるような記事は無かったが、（しかし、私たちはそれを無理に信じて、死ぬつもりでいた。親が破産しかかって、せっぱつ

まり、見えすいたつらい嘘をついている時、子供がそれをすっぱ抜けるか。運命窮まると観じて黙って共に討死さ。たしかに全部、苦しい言いにくろいの記事ばかりであったが、しかし、それでも、嘘でない記事が毎日、紙面の片隅かたすみに小さく載っていた。曰く、死亡広告である。羽左衛門はねさゑもんが疎開先で死んだという小さい記事は嘘でなかった。

サロンは、その戦時日本の新聞よりもまだ悪い。そこでは、人の生死さえ出鱈目でたらめである。太宰などは、サロンに於いて幾度か死亡、あるいは転身あるいは没落を広告せられたかわからない。

私はサロンの偽善と戦って来たど、せめてそれだけは言わせてくれ。そうして私は、いつまでも薄汚いのだくれだ。本棚ほんだなに私の著書を並べているサロンは、どこにも無い。

けれども、私がこうしてサロンがどうのと、おそろしくむきになって書いても、それはいったい何の事だか、一向にわからない人が多いだろうと思われる。サロンは、諸外国に於いて文芸の発祥地だったではないか、などと言って私に食ってかかる半可通が、私のいうサロンなのだ。世に、半可通ほどおそろしいものは無い。こいつらは、十年前に覚えた定義を、そのまま暗記しているだけだ。そうして新しい現実をその一つ覚えの定義に押し込めようと試みる。無理だよ、婆さん。所詮、合いませぬ。

自分を駄目だと思ひ得る人は、それだけでも既に尊敬するに足る人物である。半可通は永遠に、洒々しやあしやあぜん然たるものである。天才の誠実を誤り伝えるのは、この人たちである。そうしてかえって、俗物の偽善に支持を与えるのはこの人たちである。日本には、半可通ばかりうようよいて、国土を埋めたといっても過言ではあるまい。

もっと気弱くなれ！ 偉いのはお前じやないんだ！ 学問なんて、そんなものは捨てちまえ！ おのれを愛するが如くごと、汝なんじの隣人を愛せよ。それからでなければ、どうにもこうにもなりやしないのだよ。

とこう言うどまた、れいのサロンの半可通どもは、その思想は云々うんぬんと、ばかな議論をはじめるだろう。かえるのつらに水である。やり切れねえ。

いったい私の言っているサロンとは何の事か。諸外国の文芸の発祥地と言われているサロンと、日本のサロンとは、どんな根本的な差異があるか。皇室または王室と直接のつながりのあるサロンと、企業家または官吏につながっているサロンと、どう違うか。君たちのサロンは、猿芝居さるしばいだというのはどういうわけか。いまここで、いちいち諸君に嘔かんでふくめるように説明してお聞かせすればいいのかも知れないが、そんな事に努力を傾注していると、君たちからイヤな色気を示されたりして、太宰もサロンに迎えられ、むざんやミイラにされてしまうおそれが多分にあるので、私はこれ以上の奉仕はごめんこうむる。なあに、いいやつには、言わなくてちゃんとわかっているのだから。

三、転々と転居した

私はいま、自分の創作年表とでも称すべき焼け残りの薄汚い手帳のペエジを繰りながら、さまざまの回想にふける。私をはじめて東京で作品を発表した昭和八年から、二十年まで、その十二箇年間、私はいまのサロンの連中とはまるつきり違った歩調であるいて来た。これではあの者たちと永遠に溶け合わないのも無理がない。あれは昭和二、三年の頃であったろうか。私がまだ弘前高等ひろまき学校の文科生であって、しばしば東京の兄（この兄はからだの

弱い彫刻家で、二十七歳で病死した)のところへ遊びに行ったが、この兄に連れられて喫茶店なるものにはいつてみると、そこにはたいいキザに気取った色の白いやさ男がいて、兄は小声で、あれは新進作家の何の誰だ、と私に教え、私はなんてまあ浅墓な軽薄そうな男だろうと呆れ、つくづく芸術家という種族の人間を嫌悪した。

私は上品な芸術家に疑惑を抱き、「うつくしい」芸術家を否定した。田舎者の私には、どうもあんなものは、キザで仕様が無かったのである。

ベックリンという海の妖怪などを好んでかく画家の事は、どなたもご存じの事と思う。あの人の画は、それこそ少し青くさくて、決していいものでないけれども、たしか「芸術家」と題する一枚の画があった。それは大海の孤島に緑の葉の繁ったふとい樹木が一本生えていて、その樹の蔭にからだをかくして小さい笛を吹いているまことにどうも汚ならしいへんな生き物がいる。かれは自分の汚いからだをかくして笛を吹いている。孤島の波打際に、美しい人魚があつまり、うっとりとその笛の音に耳を傾けている。もし彼女が、ひとめその笛の音の姿を見たならば、きやっと叫んで悶絶するに違いない。芸術家はそれゆえ、自分のからだをひた隠しに隠して、ただその笛の音だけを吹き送る。

ここに芸術家の悲惨な孤独の宿命もあるのだし、芸術の身を切られるような真の美しさ、気高さ、えい何と言ったらいのか、つまり芸術さ、そいつが在るのだ。

私は断言する。真の芸術家は醜いものだ。喫茶店のあの気取った色男は、にせものだ。アンデルセンの「あひるの子」という話を知っているだろう。小さな可愛いあひるの雛の中に一匹、ひどくぶざまで醜い雛がまじっていて、皆の虐待と嘲笑の的になる。意外にもそれは、スワンの雛であった。巨匠の青年時代は、例外なく醜い。それは決してサロン向きの可愛げのあるものでは無かった。

お上品なサロンは、人間の最も恐るべき墮落だ。しからば、どこの誰をまずまっさきに糾弾すべきか。自分である。私である。太宰治とか称する、この妙に気取った男である。生活は秩序正しく、まっ白なスーツに眠るといふのは、たいへん結構な事だが、(それは何としても否定できない魅力である!)。しかし、自分ひとり大いに努力してその境地を獲得した途端に、急に人が変って様子ぶった男になり、かねてあんなに憎悪していたサロンにも出入し、いや出入どころか、自分からチャチなサロンを開設し半可通どもの先生になりはしないか。何せどうも、気が弱くてだらしな癖に、相当虚栄心も強くて、ひとにおだてられるとわくわくして何をやり出すかわかったもんじやない男なのだから。

私はそのような成行きに対して、極度におびえていた。私もしサロンのなお上品の家庭生活を獲得したならば、それは明らかに誰かを裏切った事になると考えていた。私は、いやらしいくらいに小さな債務家のようなものであった。

私は私の家庭生活を、つぎつぎと破壊した。破壊しようとする強い意志が無くとも、おのずから、つぎつぎと崩壊した。私が昭和五年に弘前の高等学校を卒業して大学へはいり、東京に住むようになってから今まで、いったい何度、転居したろう。その転居も、決して普通の形式ではなかった。私はたいい全部を失い、身一つのがれ去り、あらたにまた別の土地で、少しずつ身のまわりの品を都合するというような有様であった。戸塚。本所。鎌倉の病室。五反田。同朋町。和泉町。柏木。新富町。八丁堀。白金三光町。この白金三光町の大きな空家の、離れの一室で私は「思い出」などを書いていた。天沼三丁目。天沼一丁目。阿佐ヶ谷やの病室。経堂の病室。千葉県船橋。板橋の病室。天沼のアパー

ト。天沼の下宿。甲州御坂峠。甲府市の下宿。甲府市郊外の家。東京都下三鷹町。甲府水門町。甲府新柳町。津軽。

忘れているところもあるかも知れないが、これだけでも既に二十五回の転居である。いや、二十五回の破産である。私は、一年に二回ずつ破産してはまた出発し直して生きて来ていたわけである。そうしてこれから私の家庭生活は、どういう事になるのか、まるつきり見当もつかない。

以上挙げた二十五箇所の中で、私には千葉船橋町の家が最も愛着が深かった。私はそこで、「ダス・ゲマイネ」というのや、また「虚構の春」などという作品を書いた。どうしてもその家から引き上げなければならなくなった日に、私は、たのむ！ もう一晚この家に寝かせて下さい、玄関の夾竹桃も僕が植えたのだ、庭の青桐も僕が植えたのだ、と或る人にたのんで手放して泣いてしまったのを忘れていない。一ばん永く住んでいたのは、三鷹町下連雀の家であろう。大戦の前から住んでいたのだが、ことしの春に爆弾でこわされたので、甲府市水門町の妻の実家へ移転した。しかるに、移転して三月目にその家が焼夷弾で丸焼けになったので、まちはずれの新柳町の或る家へ一時立ち退き、それからどうせ死ぬなら故郷で、という気持から子供二人を抱えて津軽の生家へ来たのであるが、来て二週目に、あの御放送があった、というのが、私のこれまでの浪々生活の、あらましの経緯である。

四、太平洋戦争中の状況

私は既に三十七歳になっている。そうしてまたもや無一物の再出発をしなければならなくなつた。やつぱり、サロン思想嫌悪の情をもつて。

創作年表とでも称すべき手帳を繰ってみると、まあ、過去十何年間、どのとしも、どの年も、ひでえみじめな思いばかりして来たのが、よくわかる。いったい私たちの年代の者は、過去二十年間、ひでえめにばかり遭つて来た。それこそ怒濤の葉っぱだった。めっちゃ苦茶だった。はたちになるやならずの頃に、既に私たちの殆ど全部が、れいの階級闘争に参加し、或る者は投獄され、或る者は学校を追われ、或る者は自殺した。東京に出てみると、ネオンの森である。曰く、フネノフネ。曰く、クロネコ。曰く、美人座。何が何やら、あの頃の銀座、新宿のまあ賑わい。絶望の乱舞である。遊ばなければ損だとばかりに眼つきをかえて酒をくらっている。つづいて満洲事変。五・一五だの、二・二六だの、何の面白くもないような事ばかり起つて、いよいよ支那事変になり、私たちの年頃の者は皆戦争に行かなければならなくなつた。事変はいつまでも愚図愚図つづいて、蒋介石を相手にするのはないのと騒ぎ、結局どうにも形がつかず、こんどは敵は米英という事になり、日本の老若男女すべてが死ぬ覚悟を極めた。

実に悪い時代であった。その期間に、愛情の問題だの、信仰だの、芸術だのと言って、自分の旗を守りとおすのは、実に至難の事業であった。この後だつて楽じゃない。こんな具合じゃ仕様がな。また十何年前のフネノフネ時代にかえつたんでは意味がない。戦争時代がまだよかつたなんて事になると、みじめなものだ。うっかりすると、そうなりますよ。どさくさまぎれに一もうけなんて事は、もうこれからは、よすんだね。なんにもならんじゃないか。

昭和十七年、昭和十八年、昭和十九年、昭和二十年、いやもう私たちにとつては、ひどい時代であった。私は三度も点呼を受けさせられ、そのたんびに竹槍突撃の猛訓練などがあり、暁天動員だの何だの、そのひまひまに小説を書いて発表すると、それが情報局に、ならまれているとかいうデマが飛んで、昭和十八年に「右大臣実朝」という三百枚の小説を発表したら、「右大臣実朝」というふざけ切った読み方をして、太宰は実朝をユダヤ人として取り扱っている、などと何が何やら、ただ意地悪く私を非国民あつかいに弾劾しようとしている愚劣な「忠臣」もあった。私の或る四十枚の小説は発表直後、はじめから終りまで全文削除を命じられた。また或る二百枚以上の新作の小説は出版不許可になった事もあった。しかし、私は小説を書く事は、やめなかった。もうこうなったら、最後までねばって小説を書いて行かなければ、ウソだと思った。それはもう理窟ではなかった。百姓の糞意地である。しかし、私は何もここで、誰かのように、「余はもともと戦争を欲せざりき。余は日本軍閥の敵なりき。余は自由主義者なり」などと、戦争がすんだら急に、東条の悪口を言い、戦争責任云々と騒ぎまわるような新型の便乗主義を發揮するつもりはない。いままではもう、社会主義さえ、サロン思想に墮落している。私はこの時流にもまたついて行けない。

私は戦争中に、東条に呆れ、ヒトラーを軽蔑し、それを皆に言いふらしていた。けれどもまた私はこの戦争に於いて、大いに日本に味方しようと思った。私など味方になっても、まるでちつともお役にも何も立たなかったかと思うが、しかし、日本に味方するつもりでいた。この点を明確にして置きたい。この戦争には、もちろんはじめから何の希望も持てなかったが、しかし、日本は、やつちやったのだ。

昭和十四年に書いた私の「火の鳥」という未完の長編小説に、次のような一節がある。これを読んでくれると、私がさきにもちよつと言つて置いたような「親が破産しかかって、せつぱつまり、見えすいたつらい嘘をついている時、子供がそれをすつぱ抜けるか。運命窮まると観じて、黙って共に討死さ」という事の意味がさらにはつきりして来ると思われる。——それは、次のような内容の作品である。

五、「火の鳥」の一節

(前略) 長火鉢へだてて、老母は瀬戸の置き物のように綺麗に、ちんまり坐つて、伏目がち、やがて物語ることには、——あれは、わたくしの一人息子で、あんな化け物みたいな男ですが、でも、わたくしは信じている。あれの父親は、ことしで、あけて、七年まえに死にました。まあ、昔自慢してあわれなことでございますが、父の達者な頃は、前橋で、ええ、国は上州でございませう。前橋でも一流の割烹店でございました。大臣でも、師団長でも、知事でも、前橋でお遊びのときには、必ず、わたくしの家に、きまつていました。あのころは、よかったです。わたくしも、毎日々々、張り合いあつて、身を粉にして働きました。ところが、あれの父は、五十のときに、わるい遊びを覚えましてな、相場です。崩れるとなつたら、早いものでした。ふつと気のついた朝には、すつからかん。きれいな、さつぱり。可笑しいですよ。父は、みんなに面目ないのですね。そうなるも、まだ見栄張つていて、なかに、おれには、内緒でかくしている山がある。金が出る山ひとつ持っている、とまるで、子供みたいな、とんでもない嘘を言い出しましてな、男は、

つらいものですね、ながねん連れ添うて来た婆にまで、何かと苦しく見栄張らなければいけないのですからね、わたくしたちに、それはくわしく細々とその金の山のこと真顔になつて教えるのです。嘘とわかつているだけに、聞いているほうが、情ないやら、あさましいやら、いじらしいやら、涙が出て来て困りました。父は、わたくしたち、あまり身を入れて聞いていないのに感附いて、いよいよ、むきになって、こまかく、ほんとうらしく、地図やら何やらたくさん出して、一生懸命にひそひそ説明して、とうとう、これから皆でその山に行こうではないか、とまで言い出し、これには、わたくし、当惑してしまいました。まちの誰かれ見さかいなくつかまえて来ては、その金山のこと言つて、わたくしは恥ずかしくて死ぬるほどでございました。まちの人たちの笑い草にはなるし、朝太郎は、そのころまだ東京の大学にはいったばかりのところでもございましたが、わたくしは、あまり困つて、朝太郎に手紙で事情全部を知らせてやつてしまいました。そのときに、朝太郎は偉かつた。すぐに東京から駆つけ、大喜びのふりして、お父さん、そんないい山を持つていながら、なぜ僕にいままで隠していたのです、そんないい事あるんだつたら、僕は、学校なんか、ばかばかしい、どうか学校よさせて下さい、こんな家、売りとばして、これからすぐに、その山の金鉱しらべに行こう、と、もう父の手をひっぱるようにしてせきたて、また、わたくしを、こっそりものかげに呼んで、お母さん、いいか、お父さんは、もうさがが長くないのだ、おちぶれた人に、恥をかかせちゃいけない、とわたくしを、きつく叱りました。わたくしも、そう言われて、はじめて、ああそうだったと気がついて、お恥ずかしい、わが子ながら、両手合せて拝みたいほどでございました。嘘、とはつきり知りながら、汽車に乗り、馬車に乗り、雪道歩いて、わたくしたち親子三人、信濃の奥まで、まいりました。いま、思い出しても、せつなくなりませう。信濃の山奥の温泉に宿をとり、それからまる一年間、あの子は、降つても照つても父のお伴して山を歩きまわり、日が暮れて宿へかえつては、父の言うこと、それは芝居と思えないほど、熱心に聞いて、ふたりで何かと研究し、相談し、あしたは大丈夫だ、あしたは大丈夫だと、お互い元氣をつけ合つて、そうして寝て、また朝早く、山へ出かけて、ほうぼう父に引っぱりまわされ、さんざ出鱈目の説明聞かされて、それでも、いちいち深くうなずいて、へとへとになつて帰つてきました。何もかも、朝太郎のおかげです。父は、山宿で一年、張り合ひのある日をつづけることができて、女房、子供にも、立派に体面保つて、恥を見せずに安樂な死に方を致しました。ええ、信濃の、その山宿で死にました。わしの山は見込みがある、どうだい、身代二十倍になるのだぞ、と威張つて、死んでゆきました。まえから、心臓が、ひどく悪かつたのです。木枯しのおそろしく強い朝でした。あわれな話ですね。けれども、あの子は、見どころあります。それから母子ふたりで、東京へ出て、苦労しました。わたくしは、どんぶり持つて豆腐いっちょう買に行くのが、一ばんつらかつた。いまでは、どうやら、朝太郎も、皆様のおかげで、もの書いてお金いただけるようになって、わたくしは、朝太郎が、もう、どんな、ばかをして、も、信じている。むかし、あれの父をあんなに大事にかばつて呉れたこと思えば、あの子が、ありがたくて、もったいなくて、あの子のことだったら、どんなことがあつても、たとえあれが、人殺ししたつて、わたくしは、あれを信じている。あれは、情の深い子です。(後略)

*

*

このような思想を、古い人情主義さ、とか言つて、へへんと笑つて片づける、自称「科

学精神の持主」とは、私は永遠に仕事を一緒にやって行けない。私は戦争中、もしこんなでいたらしく日本が勝ったら、日本は神の国ではなくて、魔の国だと思っていた。けれど私は、日本必勝を口にし、日本に味方するつもりでいた。負けるにきまつているものを、陰でこそこそ、負けるぞ負けるぞ、と自分ひとり知ってるような顔で囁いて歩いている人の顔も、あんまり高潔でない。

私はそのように「日本の味方」のもりでいたのであるが、しかし時の政府には、やっぱりどうも信用が無かったようである。情報局の注意人物というデマが飛び、私に、原稿を依頼する出版社が無くなってしまった。しみつたれた事を言うようであるが、生活費はどんどんあがるし、子供は殖えるし、それに収入がまるで無いんだから、心細いこと限りない。当時は私だけでなく、所謂純文芸の人たち全部、火宅の形相を呈していたらしい。しかし、他の人たちにはたいてい書画骨董などという財産もあり、それを売り払ってどうにかやっていたらしいが、私にはそんな財産らしいものは何も無かった。これで私が出征でもしたら、家族はひどい事になるだろうと思つたが、どういうわけか、とうとう私には召集令状が来なかつた。安易にこんな事は口にしたくないが、神の配慮、という事を思わずにはいられない。私はねばって、とにかく小説を書きとおした。

戦争成金のほかは、誰しも今は苦しいのだから、自分ひとりの生活苦は言うまいと思つて努めて快活のふうを装っていたが、それでも、あまりに心細くて、或る先輩にあてこんな意味の手紙を書いて出した事がある。

六、先輩へのある手紙

拝啓。この手紙は、あなたに何かお願いする手紙でもないし、また訴えの手紙でもありませんし、また誰かを非難しようとする手紙でも無いのです。私は家の者にも、打ち明けていない事実を、せめて、あなたひとり知って置いてもらいたくてこの手紙を書くのです。あなたがしかしこの事実を知ったからとて、何をなさって下さるにも及びません。私には、そんな期待は無いのです。ただ、この事実を知って置いて下さったらそれでいいのです。そうしてこの手紙を御一読なさったら、黙って破り棄すて下さい。お願いします。他の人にもおっしゃらないように。

私は、いま、自殺という事を考えています。しかし、こらえています。妻子がふびん、というよりは、私は日本国民として、私の自殺が外国の宣伝材料などになってはたまらぬ、また、戦地へ行っている私の若い友人たちが、私の自殺を聞いてどんな気がするか、それを考えて、こらえています。なぜ、自殺の他に途が無いか。それは、あなたもご存じの筈です。ただ、私には財産が無いので、他の人よりも苦しみが強くなりました。私のことしの収入は、××円です。そうして、いま手許に残っているお金は、××円です。しかし、私は誰からもお金を借りないつもりです。故郷の兄に、よっぽど借金申込みの手紙を出そうかと、思つた夜もございましたが、やめにしました。こうなると、糞意地です。私は死ぬる前夜まで、大いに景氣のいい顔をしてはしゃいでいるつもりです。そうして、あくまでも小説だけを書いて行きます。しかし、まさか、戦争礼讃の小説などは書く気はしません。たつたこれだけの事です。あなたが、あなたに知って置いていただきたいと思ひます。私の身にも、いつ、どのような事があるかわかりませんから。この手紙には、御返事も何も要りま

せん。御一読後は、ただちに破棄して下さい。以上。

*

*

だいたい、こんな意味の手紙を、その先輩にこっそり出した事がある。愚痴をこぼしてさえ、非国民あつかいを受けなければならなかったのだから、思えば、ひどい時代だった。そんな手紙を出して、一箇月ばかり経った頃、私はその先輩と偶然、新宿で出逢であった。私たちは何も言わずに黙って一緒に歩いた。しばらくして、その先輩が言った。

「……君のあの手紙を読んだ」、「……そう。すぐ破つてくれましたか」、「……ああ、破つた」、それだけだった。その先輩もまた、その頃は私以上につらい立場に置かれていたらしい。

七、津軽旅行を企てる

とにもかくにも、そんな生活をいつまでも続けているわけにはいかなかった。何とかして窮迫した生計の血路をひらかなければいけない。

私は或る出版社から旅費をもらい、津軽旅行を企てた。その頃日本では、南方へ南方へと、皆の関心がつぼらその方面にばかり集中せられていたのであるが、私はその正反対の本州の北端に向って旅立った。自分の身も、いつどのような事になるかわからぬ。いまのうちに自分の生れて育った津軽を、よく見て置こうと思ひ立ったのである。

私は所謂純粹の津軽の百姓として生れ、小学、中学、高等学校と二十年間も津軽で育ちながら、津軽の五つ六つの小都市、町村を知っているに過ぎなかった。中学時代の夏冬の休暇には、自分の生家でごろごろしていて、兄たちの蔵書を手当り次第読みちらし、どこへ旅行しようとしなかったし、また高等学校時代の休暇には、東京にいる彫刻家の、兄のところへ遊びに行き、ほとんど生家に帰らず、東京の大学へはいるようになったら、もうそれっきり、十数年間帰郷しなかったのであるから、津軽という国に就いてはまるで知らないと言つてよかつた。私はゲートルを着け、生れてはじめて津軽の国の隅々まで歩きまわつてみた。蟹田から青森まで、小さい蒸気船の屋根の上に、みずぼらしい服装で仰向に寝ころがり、小雨が降つて来て濡れてもじつとしていて、蟹田の土産の蟹の脚をポリポリかじりながら、暗鬱な低い空を見上げていた時の、淋しさなどは忘れ難い。結局、私がこの旅行で見つけたものは「津軽のつたなさ」というものであつた。拙劣さである。不器用さである。文化の表現方法の無い戸惑いである。私はまた、自身にもそれを感じた。けれども同時に私は、それに健康を感じた。ここから、何かしら全然あたらしい文化（私は、文化という言葉に、ぞつとする。むかしは文花と書いたようである）そんなものが、生れるのではなからうか。愛情のあたらしい表現が生れるのではなからうか。私は、自分の血の中の純粹の津軽氣質に、自信に似たものを感じて帰京したのである。つまり私は、津軽には文化なんてものは無く、したがって、津軽人の私も少しも文化人では無かつたという事を発見してせいせいしたのである。それ以後の私の作品は、少し変つたような気がする。私は「津軽」という旅行記みたいな長編小説を発表した。その次には「新釈諸国噺」という短篇集を出版した。そうして、その次に、「惜別」という魯迅の日本留学時代の事を題材にした長篇と、「お伽草子」という短篇集を作り上げた。その時に死んでも、私は日本の作家としてかなり仕事を残したと言われてもいいと思つた。他の人たちは、だらしない

かった。

八、津軽の生家へと疎開する

その間に私は二度も罹災りさいしていた。「お伽草子」を書き上げて、その印税の前借をして私たちはとうとう津軽の生家へ来てしまった。

甲府で二度目の災害を被りこうむ、行くところが無くなって、私たち親子四人は津軽に向って出発したが、それからたつぷり四昼夜かかってようやくの事で津軽の生家にたどりついたのである。

その途中の困難は、かなりのものであった。七月の二十八日朝に甲府を出発して、大月おおつき附近で警戒警報、午後二時半頃上野駅に着き、すぐ長い列の中にはいつて、八時間待ち、午後十時十分発の奥羽線おううまわり青森行きに乗ろうとしたが、折あしく改札直前に警報が出て構内は一瞬のうちに真暗になり、もう列も順番もあつたものでなく、異様な大叫喚と共に群集が改札口に殺到し、私たちはそれぞれ幼児をひとりずつ抱えているのでたちまち負けて、どうやら列車にたどり着いた時には既に満員で、窓からもどこからもはいり込むすきが無かった。プラットホームに呆然ぼうぜんと立っているうちに、列車は溜息のような汽笛を鳴らして、たいぎそうにごりと動いた。私たちはその夜は、上野駅の改札口の前にごろ寝をした。拡声機は夜明けちかくまで、青森方面の焼夷弾攻撃の模様を告げていた。しかし、とにかく私たちは青森方面へ行かなければならぬ。どんな列車でもいいから、少しでも北へ行く列車に乗ろうと考えて、翌朝五時十分、白河行きの汽車に乗った。十時半、白河着。そこで降りて、二時間プラットホームで待って、午後一時半、さらに少し北の小牛田こごた行きの汽車に乗った。窓から乗った。途中、郡山駅爆撃。午後九時半、小牛田駅着。また駅の改札口の前で一泊。三日分くらいの食料を持参して来たのだが、何せ夏の暑いさいちゅうなので、にぎりめしが皆くさりかけて、めし粒が納豆のように糸をひいて、口にいれてもにちやにちやしてとても嘔下えんげすることが出来ぬ。小牛田駅で夜を明し、お米は一升くらい持っていたので、そのお米をおむすびと交換してもらいに、女房は薄暗いうちから駅の附近の家をたたき起してまわった。やっと一軒かえてくれた。かなり大きいおむすびが四つである。私はおむすびに食らいついた。がりりと口中で音がした。吐き出して見ると、梅干である。私はその種を噛みくだいてしまっていた。歯の悪い私が、梅干のあの固い種を噛みくだいたのである。ぞつとした。

しかし、これでもまだ、故郷までの全旅程の三分の一くらいしか来ていないのである。読者も、うんざりするだろう。あとまたいろいろ悲惨な思いをしたのであるが、もう書かない。とにかく、そんな思いをして故郷にたどりついてみると、故郷はまた艦載機かんざいきの爆撃で大騒動の最中であつた。

けれども、もう死んだって、故郷で死ぬのだから仕合せなほうかも知れないと思つていた。そうしてまもなく日本の無条件降伏である。

それから、既に、五箇月ちかく経たっている。私は新聞連載の長篇一つと、短篇小説をいくつか書いた。短篇小説には、独自の技法があるように思われる。短かければ短篇というものではない。外国でも遠くはデカメロンあたりから発して、近世では、メリメ、モオパッサン、ドオデエ、チェホフなんて、まあいろいろあるだろうが、日本では殊ことにこの技術

が昔から発達していた国で、何々物語というもののほとんど全部がそれであつたし、また近世では西鶴なんて大物も出て、明治では鴎外がうまかつたし、大正では、直哉だの善蔵だの龍之介だの菊池寛だの、短篇小説の技法を知っている人も少くなかつたが、昭和のはじめでは、井伏さんが拔群のように思われたくらいのもので、最近に到つてまるで駄目になった。皆ただ、枚数が短いというだけのものである。戦争が終つて、こんどは好きなものを書いてもいいという事であつたので、私は、この短篇小説のすたれた技法を復活させてやれと考へて、三つ四つ書いて雑誌社に送つたりなどしているうちに、何だかひどく憂鬱になつて来た。

またもや、八つ当りしてヤケ酒を飲みたくなつて来たのである。日本の文化がさらにまた一つ墮落しそうな気配を見たのだ。このごろの所謂「文化人」の叫ぶ何々主義、すべて私には、れいのサロン思想のにおいがしてならない。何食わぬ顔をして、これに便乗すれば、私も或いは「成功者」になれるのかも知れないが、田舎者ものの私にはてれくさくて、だめである。私は、自分の感覚をいつわる事が出来ない。それらの主義が発明された当初の真実を失い、まるで、この世界の新現実と遊離して空転しているようにしか思われないのである。

新現実。まったく新しい現実。ああ、これをもつともつと高く強く言いたい！

そこから逃げ出してはだめである。ごまかしてはいけない。容易ならぬ苦悩である。先日、ある青年が私を訪れて、食物の不足の憂鬱を語つた。私は言つた。

「……嘘をつけ。君の憂鬱は食料不足よりも、道徳の煩悶だろう」。

青年は首肯した。私たちのいま最も気がかりな事、最もうしろめいたいもの、それをいまの日本の「新文化」は、素通りして走りそうな気がしてならない。

私は、やはり、「文化」というものを全然知らない、頭の悪い津軽の百姓でしか無いのかも知れない。雪靴をはいて、雪路を歩いている私の姿は、まさに田舎者そのものである。しかし、私はこれからこそ、この田舎者の要領の悪さ、拙劣さ、のみ込みの鈍さ、単純な疑問でもって、押し通してみたいと思つている。いまの私が、自身にたよるところがありとすれば、ただその「津軽の百姓」の一点である。

九、「パンドラの匣」の一節

十五年間、私は故郷から離れていたが、故郷も変らないし、また、私も一向に都会人らしく垢抜けていないし、いや、いよいよ田舎臭く野暮つたくなるばかりである。「サロン思想」は、いよいよ私と遠くなる。

このごろ私は、仙台の新聞に「パンドラの匣」という長篇小説を書いているが、その一節を左に披露して、この悪夢に似た十五年間の追憶の手記を結ぶ事にする。

（前略）嵐のせいであろうか、或いは、貧しいとしびのせいであろうか、その夜は私たち同室の者四人が、越後獅子の蝋燭の火を中心にして集まり、久し振りで打ち解けた話を交わした。「自由主義者つてのは、あれは、いったい何ですかね？」と、かつばれば如何なる理由からか、ひどく声をひそめて尋ねる。

*

*

さて、「……私たち同室の者四人が、越後獅子の蠟燭の火を中心にして集まり、久し振りで打ち解けた話を交わした。『自由主義者つてのは、あれは、いったい何ですかね?』というテーマで親しく話し合った。——一人は、「越後獅子」という人であり、一人は、「固パン」という人であり(フランス方面の知識を披露し)、もう一人は、「かつぽれ」という人であり、そして、四人目の人は、この引用文の中には出て来ない。……

ところで、終戦間もなくの日本社会に於いては、やはり「民主主義」とは「自由思想」とは何か?という問題が、人々の「最大の関心事」の一つにはなっていたのだろう。

*

*

さて、「フランスでは」と固パンは英語のほうでこりたからであろうか、こんどはフランスの方面の知識を披露する。「リベルタンつてやつがあつて、これがまあ自由思想を謳かしてずいぶんあばれ廻ったものです。十七世紀と言いますから、いまから三百年ほど前の事ですがね」と、眉をはね上げてもったいぶる。「こいつらは主として宗教の自由を叫んで、あばれていたらしいです。」

「……なんだ、あばれんぼうか」とかつぽれは案外だというような顔で言う。「……ええ、まあ、そんなものです。たいていは、無頼漢みたいな生活をしていたのです。芝居なんかで有名な、あの、鼻の大きいシラノ、ね、あの人も当時のリベルタンのひとりだと言えるでしょう。時の権力に反抗して、弱きを助ける。当時のフランスの詩人なんてのも、たいていもうそんなものだったでしょう。日本の江戸時代の男伊達とかいうものに、ちよつと似ているところがあつたようです。」「……なんて事だい、」とかつぽれは噴き出して、「……それじゃあ、幡随院の長兵衛なんかも自由主義者だったわけですかねえ」と言う。

しかし、固パンはニコリともせず、「……そりゃ、そう言つてもかまわないと思います。もつとも、いまの自由主義者というのは、タイプが少し違つていますが、フランスの十七世紀のリベルタンつてやつは、まあたいていそんなものだったのです。花川の助六も鼠小僧の次郎吉も、或いはそうだったのかも知れませんがね」。

「……へええ、そんなわけの事になるますかねえ」とかつぽれは、大喜びである。越後獅子も、スリッパの破れを縫いながら、にやりと笑う。「……いつたいこの自由思想というものは、」と固パンはいよいよよまじめに、「……その本来の姿は、反抗精神です。破壊思想といつていいかも知れない。圧制や束縛が取りのぞかれたところにはじめて芽生える思想ではなくて、圧制や束縛のリアクションとしてそれらと同時に発生し闘争すべき性質の思想です。よく挙げられる例ですけれども、鳩が或る日、神様にお願ひした、『……私が飛ぶ時、どうも空気というものが邪魔になつて早く前方に進行できない。どうか空気というものを無くして欲しい』。神様はその願ひを聞き容れてやつた。然るに鳩は、いくらばばたいても飛び上る事が出来なかつた。つまりこの鳩が自由思想です。空気の抵抗があつてはじめて鳩が飛び上る事が出来るのです。闘争の対象の無い自由思想は、まるでそれこそ真空管の中ではばたいている鳩のようなもので、全く飛翔が出来ません」。

「……似たような名前の男がいるじゃないか」と越後獅子はスリッパを縫う手を休めて言った。「あつ」と固パンは頭のうしろを掻き、「……そんな意味で言つたものではありません。これは、カントの例証です。僕は、現代の日本の政治界の事はちつとも知らないのです、」……しかし、多少は知っていなくちゃいけないね。これから、若い人みんなに

選挙権も被選挙権も与えられるそうだから」と越後は、一座の長老らしく落ちつき払った態度で言い、「……自由思想の内容は、その時、その時で全く違うものだと言っている。真理を追究して闘った天才たちは、ことごとく自由思想家だと言える。わしなんかは、自由思想の自家本元は、キリストだとさえ考えている。思い煩うな、空飛ぶ鳥を見よ、播かず、刈らず、蔵に収めず、なんてのは素晴らしい自由思想じゃないか。わしは西洋の思想は、すべてキリストの精神を基底にして、或いはそれを敷衍し、或いはそれを卑近にし、或いはそれを懷疑し、人さまさまの諸説があっても結局、聖書一卷にむすびついていると思う。科学でさえ、それと無関係ではないのだ。科学の基礎をなすものは、物理界に於いても、化学界に於いても、すべて仮説だ。肉眼で見とどける事の出来ない仮説から出発している。この仮説を信仰するところから、すべての科学が発生するのだ。日本人は、西洋の哲学、科学を研究するよりさきに、まず聖書一卷の研究をしなければならぬ筈だったのだ。わしは別に、クリスチャンではないが、しかし日本が聖書の研究もせずに、ただやたらに西洋文明の表面だけを勉強したところに、日本の大敗北の真因があったと思う。自由思想でも何でも、キリストの精神を知らなくては、半分も理解できない」(中略)

*
さて、「……十年一日の如き、不変の政治思想などは迷夢に過ぎない。キリストも、いっさい誓うな、と言っている。明日の事を思うな、とも言っている。実に、自由思想家の大先輩ではないか。狐には穴あり、鳥には巢あり、されど人の子には枕するところ無し、とはまた、自由思想家の嘆きといつていいだろう。一日も安住を許されない。その主張は、日々にあらたに、また日にあらたでなければならぬ。日本に於いて今さら昨日の軍閥官僚を罵倒してみたって、それはもう自由思想ではない。それこそ真空管の中の鳩である。真の勇氣ある自由思想家なら、いまこそ何を措いても叫ばなければならぬ事がある。天皇陛下万歳！ この叫びだ。昨日までは古かった。古いどころか詐欺だった。しかし、今日に於いては最も新しい自由思想だ。十年前の自由と、今日の自由とその内容が違うとはこの事だ。それはもはや、神秘主義ではない。人間の本然の愛だ。アメリカは自由の国だと聞いている。必ずや、日本のこの真の自由の叫びを認めてくれるに違いない」(後略)

*
さて、この「十五年間」という作品は、まさに書いてある通りであり、特にここで解説を加える必要もないかと思うが、やはり「……昭和十七年、昭和十八年、昭和十九年、昭和二十年、いやもう私たちにとっては、ひどい時代であった」ということになるのだろう。

「参考文献」

- ※ 底本「恥」 太宰治著（「青空文庫」）
- ※ 底本「家庭の幸福」 太宰治著（「青空文庫」）
- ※ 底本「桜桃」 太宰治著（「青空文庫」）
- ※ 底本「ビイヨンの妻」 太宰治著（「青空文庫」）
- ※ 底本「グッド・バイ」 太宰治著（「青空文庫」）
- ※ 底本「駆込み訴え」 太宰治著（「青空文庫」）
- ※ 底本「東京八景」 太宰治著（「青空文庫」）
- ※ 底本「十五年間」 太宰治著（「青空文庫」）
- ※ 底本「福音書」 塚本虎二著（「岩波文庫」）